

JOU NAN
城 南 遺 跡

大分県大分市大字永興所在遺跡の発掘調査報告書

1993

大分市教育委員会

JOU NAN
城 南 遺 跡

大分県大分市大字永興所在遺跡の発掘調査報告書



1993

大分市教育委員会

序 文

近年、産業の発展と科学技術の進歩はめざましく、精神的なうるおいと安らぎを求める傾向にあります。本市では、こうした社会情勢に対応して、文化のかおるまちづくりをめざすにあたり、文化財の果たす役割はきわめて大きいものがあります。そうした、趣旨に基づいて各種文化財の調査、保存調査活動の推進に努めているところであります。

この報告書は、大分市城南に位置します弥生時代から古代、さらに中近世に至る複合遺跡の発掘調査報告書であります。

弥生時代におきましては中期から後期にかけての住居跡や多くの土器が見つかり、新たな資料の追加がみられました。奈良時代の方形周溝遺構は県下で初めて確認されたものであり、九州においてもこれまで報告例が少なく、大変貴重なものといえるでしょう。さらに、平安時代の墓からは大分市内で4カ所目の墨書土器が発見されるなど貴重な成果を挙げることができました。

これもひとえに、三井不動産株式会社をはじめ、関係各位のご協力とご理解のたまものと感謝し、心より厚くお礼申し上げます。

本書が大分市民をはじめ多くの方々に、埋蔵文化財への理解と文化財保護への関心が深まるとともに、学術研究のための資料として活用いただければ幸いです。

平成5年3月31日

大分市教育委員会

教育長 安 東 裕

例 言

- 1 本報告書は大分市教育委員会が三井不動産株式会社の委託を受けて実施した、大分市大字永興字開臺に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は三井不動産株式会社の宅地造成に伴い、大分市教育委員会が調査主体となって、平成2年12月より平成3年4月にかけて実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、三井不動産株式会社の全面的な協力を得た。
- 4 本書の執筆は池邊千太郎がおこなった。
- 5 遺構の実測は担当者が主としてこれにあたり、写真撮影は担当者がおこなった。
- 6 遺物の実測は担当者がおこない、拓本は釘宮香苗（大分市教育委員会社会教育課文化財室臨時職員）がおこなった。
- 7 実測図製図は釘宮香苗・井口あけみ・松村千里（同上）がおこなった。
- 8 遺物整理は渡辺里美・三重野八重子（同上）があたった。
- 9 遺物の写真撮影は池邊千太郎（大分市教育委員会社会教育課文化財室）がおこなった。
- 10 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
- 11 遺構の実測図の一部については国際航業株式会社に委託した。
- 12 調査番号は発掘年度の下二桁(90)とその年度の通し番号(07)により9007として登録した。
- 13 本文中の遺構番号については混乱を避けるため、原則として現場時に使用したものをそのまま使用している。

・本文中で使用する略号は次の内容を意味する。

S B－掘立柱建物 S D－溝状遺構
S H－竪穴住居跡遺構 S K－土壌状遺構
Pit－柱状遺構

- 14 遺物観察表は以下の記述基準により標記される。

遺物 番号	挿図 番号	出土区 遺構名	器種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑦	⑧	⑧	⑨	⑨	⑨	⑨	⑩

- ① 1からの通し番号で記述する。
- ② 挿図番号に一致する。
- ③ 項目13に準ずる。
- ④ 判明する器種について記述する。
- ⑤ 胎土中に含まれる混和材について記述する。
- ⑥ 径約1mmのものを細粒とし、それ以下を微粒、それ以上を小粒として標記する。
- ⑦ 色調について記述する。
- ⑧ 器面調整について記述する。複数段で標記される基本的に上位のものが上部調整を示す。
- ⑨ 計測可能な各部位のサイズを記入する。復元数値は（ ）にて表示する。
- ⑩ 特記事項について記述する。
- 15 本書の編集は讃岐・池邊がおこなった。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	3
第Ⅲ章	調査の成果	9
第1節	調査の概要	9
1.	掘立柱建物（SB）	10
SB01		10
SB02		10
SB03		11
2.	溝状遺構（SD）	12
SD01		12
SD02		13
SD03		14
SD04		15
SD05		16
SD06		17
SD07		17
SD08		18
SD09		18
SD10		19
SD11		19
3.	住居跡（SH）	20
SH01		20
SH02		23
SH03		25
SH04・05・06		28
SH07		29
SH08		30
SH09		30
SH10		33
4.	土塋（SK）	34
SK03		34
SK13		37

SK 1 4	38
SK 1 5	38
SK 2 3	39
SK 2 8	40
SK 3 8	41
SK 4 2	44
SK 4 7	45
SK 4 8	46
SK 4 9	47
SK 5 0	50
SK 5 1	51
SK 5 2	53
SK 5 3	55
SK 5 4	56
SK 5 7	57
SK 6 1	58
5. 円形周溝遺構	66
6. 方形周溝遺構	68
7. 柱穴 (Pit)	74
8. その他	74
第Ⅳ章 まとめと考察	84
第1節 まとめ	84
第2節 竪穴住居跡について	86
第3節 SD 0 8に見られる土坑列について	86
第4節 方形・円形周溝遺構について	87

挿 図 目 次

第1図	城南遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50000)	4
第2図	城南遺跡とその周辺の地形図 (1/2500)	5
第3図	城南遺跡遺構配置図 (1/750)	7
第4図	城南遺跡土層図 (1/60)	9
第5図	S B 0 1 平面・断面実測図 (1/80)	10
第6図	S B 0 2 平面・断面実測図 (1/80)	11
第7図	S B 0 3 平面・断面実測図 (1/80)	11
第8図	S B 0 3 出土遺物実測図 (1/2)	11
第9図	S D 0 1 平面・断面実測図 (1/120)	12
第10図	S D 0 1 出土遺物実測図 (1/3)	13
第11図	S D 0 2 平面・断面実測図 (1/80)	13
第12図	S D 0 3 平面・断面実測図 (1/80)	14
第13図	北側調査区 (G区) S D 0 4 平面・断面実測図 (1/160)	15
第14図	南側調査区 (C区) S D 0 4 平面実測図 (1/250)	15
第15図	S D 0 5 平面・断面実測図 (1/80)	16
第16図	S D 0 6 平面・断面実測図 (1/80)	17
第17図	S D 0 7 平面 実測図 (1/80)	17
第18図	S D 0 8 平面・断面実測図 (1/120)	18
第19図	S D 1 1 平面・断面実測図 (1/80)	19
第20図	S H 0 1 平面・断面実測図 (1/60)	21
第21図	S H 0 1 出土遺物実測図 (1/3)	22
第22図	S H 0 2 平面・断面実測図 (1/60)	23
第23図	S H 0 2 出土遺物実測図 (1/3)	24
第24図	S H 0 3 平面・断面実測図 (1/60)	25
第25図	S H 0 3 出土遺物実測図① (1/3)	26
第26図	S H 0 3 出土遺物実測図② (1/3)	27
第27図	S H 0 4・0 5・0 6 平面・断面実測図 (1/60)	28
第28図	S H 0 7 平面・断面実測図 (1/30)	29
第29図	S H 0 8 出土遺物実測図 (1/3)	30
第30図	S H 0 9 平面・断面実測図 (1/60)	31
第31図	S H 0 9 出土遺物実測図 (1/3)	32
第32図	S H 1 0 平面・断面実測図 (1/60)	33
第33図	S K 0 3 平面・断面実測図 (1/20)	34
第34図	S K 0 3 出土遺物実測図① (1/3)	35

第35図	S K 0 3	出土遺物実測図② (1/3)	36
第36図	S K 1 3	平面・断面実測図 (1/20)	37
第37図	S K 1 3	出土遺物実測図 (1/3)	37
第38図	S K 1 4	平面・断面実測図 (1/20)	38
第39図	S K 1 4	出土遺物実測図 (1/3)	38
第40図	S K 1 5	平面・断面実測図 (1/20)	38
第41図	S K 2 3	平面・断面実測図 (1/20)	39
第42図	S K 2 3	出土遺物実測図 (1/3)	39
第43図	S K 2 8	平面・断面実測図 (1/40)	40
第44図	S K 3 8	平面・断面実測図 (1/20)	41
第45図	S K 3 8	出土遺物実測図① (1/3)	42
第46図	S K 3 8	出土遺物実測図② (1/3)	43
第47図	S K 4 2	平面・断面実測図 (1/30)	44
第48図	S K 4 2	出土遺物実測図 (1/3)	44
第49図	S K 4 7	平面・断面実測図 (1/20)	45
第50図	S K 4 7	出土遺物実測図 (1/3)	45
第51図	S K 4 8	平面・断面実測図 (1/20)	46
第52図	S K 4 8	出土遺物実測図 (1/3)	46
第53図	S K 4 9	平面・断面実測図 (1/20)	47
第54図	S K 4 9	出土遺物実測図① (1/3)	48
第55図	S K 4 9	出土遺物実測図② (1/3)	49
第56図	S K 5 0	平面・断面実測図 (1/20)	50
第57図	S K 5 0	出土遺物実測図 (1/3)	50
第58図	S K 5 1	平面・断面実測図 (1/20)	51
第59図	S K 5 1	出土遺物実測図 (1/3)	52
第60図	S K 5 2	平面・断面実測図 (1/20)	53
第61図	S K 5 2	出土遺物実測図 (1/3)	54
第62図	S K 5 3	平面・断面実測図 (1/20)	55
第63図	S K 5 3	出土遺物実測図 (1/4)	55
第64図	S K 5 4	平面・断面実測図 (1/30)	56
第65図	S K 5 4	出土遺物実測図 (1/3)	56
第66図	S K 5 7	平面・断面実測図 (1/20)	57
第67図	S K 5 7	出土遺物実測図 (1/3)	57
第68図	S K 6 1	平面実測図 (1/20)	58
第69図	S K 6 1	出土遺物実測図 (1/4)	58
第70図	S K 0 1・0 2・0 4・0 5・0 6・0 7・0 8・0 9・1 0・1 1	平面・断面実測図 (1/40)	59

第71図	S K 1 2・1 6・1 7・1 8・1 9・2 0・2 1・2 2・2 4・2 5・2 6・2 7 平面・断面実測図 (1/40)	60
第72図	S K 2 9・3 0・3 1・3 2・3 3・3 4・3 5・3 6・3 7・3 9・4 0 平面・断面実測図 (1/40)	61
第73図	S K 4 1・4 2・4 3・4 4・4 5・4 6・5 8・5 9・6 0・6 2・6 3 平面・断面実測図 (1/40)	62
第74図	S K 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	63
第75図	S K 出土遺物実測図 (1/6)	63
第76図	S K 出土遺物実測図 (1/6)	64
第77図	円形周溝遺構 平面・断面実測図 (1/50)	66
第78図	円形周溝遺構 出土遺物実測図 (1/2)	67
第79図	方形周溝遺構 平面・断面実測図 (1/80)	69
第80図	方形周溝遺構 遺物出土地点実測図 (1/80)	71
第81図	方形周溝遺構 出土遺物実測図 (1/3)	73
第82図	Pit107 出土遺物実測図 (1/3)	74
第83図	A 地区 出土遺物実測図 (1/3)	74
第84図	C 地区・G 地区 出土遺物実測図 (1/1)	74

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧.....	5
第 2 表	土壙(S K) 遺構一覧表.....	65
第 3 表	出土遺物観察表(1).....	75
第 4 表	出土遺物観察表(2).....	76
第 5 表	出土遺物観察表(3).....	77
第 6 表	出土遺物観察表(4).....	78
第 7 表	出土遺物観察表(5).....	79
第 8 表	出土遺物観察表(6).....	80
第 9 表	出土遺物観察表(7).....	81
第10表	出土遺物観察表(8).....	82
第11表	出土遺物観察表(9).....	83
第12表	石器観察表.....	83

写 真 目 次

写真①	城南遺跡発掘調査参加者	2
写真②	S D 0 5 遠景（左下）	16
写真③	S D 1 1 遠景	19
写真④	S H 0 1 全景	21
写真⑤	S H 0 2 全景	24
写真⑥	S H 0 3・0 8 全景	27
写真⑦	S H 0 4・0 5・0 6 全景	28
写真⑧	S K 0 3 土層堆積状況	36
写真⑨	S K 0 3 遺物出土状況	36
写真⑩	S K 2 3 遺物出土状況	39
写真⑪	S K 3 8 遺物出土状況	43
写真⑫	S K 4 7 遺物出土状況	45
写真⑬	S K 4 8 遺物出土状況	46
写真⑭	S K 4 9 遺物出土状況	49
写真⑮	S K 5 0 遺物出土状況	50
写真⑯	S K 5 1 遺物出土状況（東より）	52
写真⑰	S K 5 2 遺物出土状況	53
写真⑱	S K 5 4 遺物出土状況	56
写真⑲	S K 5 7 遺物出土状況	57
写真⑳	S K 6 1 遺物出土状況	58
写真㉑	円形周溝遺構 遠景（西より）	67
写真㉒	円形周溝遺構 全景（南より）	67
写真㉓	方形周溝遺構 全景（北より）	73

図 版 目 次

第1図版	城南遺跡全景（上空より）	93
第2図版	①A区・B区・H区 遠景（北東より）	94
	②B区 遠景（北西より）	94
第3図版	①D区 遠景（西より）	95
	②D区 遠景（西より）	95
	③E区 遠景（西より）	95
第4図版	①G区 全景（西より）	96
	②H区 全景（東より）	96
	③H区 遠景（東より）	96
第5図版	①SD01 全景（西より）	97
	②SD01 遠景（西より）	97
	③SD01 土層堆積状況（西より）	97
第6図版	①SD04（G区・南より）	98
	②SD04・05（D区・北より）	98
	③SD08 遠景（西より）	98
	④SD08 近景（西より）	98
第7図版	①SH01 完掘状況（北より）	99
	②SH01 遺物出土状況（北より）	99
	③SH01内土壙（東より）	99
第8図版	①SH02 遺物出土状況（北より）	100
	②SH04・05・06 完掘状況（西より）	100
	③SH04・05・06 遠景（西より）	100
第9図版	①SH09 完掘状況（北より）	101
	②SH09 遺物出土状況（南より）	101
	③SH09 土層堆積状況（東より）	101
第10図版	①SH07 完掘状況（東より）	102
	②SH10 完掘状況（北西より）	102
第11図版	①SK13 遺物出土状況	103
	②SK14 遺物出土状況	103
	③SK15 遺物出土状況	103
	④SK13・14・15・16 全景（南より）	103
第12図版	①SK28 完掘状況（西より）	104
	②SK47 遺物出土状況（西より）	104
	③SK62 遺物出土状況	104

第13図版	①SK42 全景（東より）	105
	②SK42 遺物出土状況（西側）	105
	③SK42 遺物出土状況（東側）	105
	④SK42 土層堆積状況（南より）	105
第14図版	①方形周溝遺構 遺構検出状況（北より）	106
	②方形周溝遺構 全景（北より）	106
	③方形周溝遺構 全景（西より）	106
第15図版	①方形周溝遺構 土層堆積状況 西側（北より）	107
	②方形周溝遺構 土層堆積状況 北側（東より）	107
	③方形周溝遺構 土層堆積状況	107
第16図版	①方形周溝遺構 遺物出土状況 南側（東より）	108
	②方形周溝遺構 遺物出土状況 北側（東より）	108
	③方形周溝遺構 遺物出土状況 東側（東より）	108
	④方形周溝遺構 遺物出土状況 南西側（東より）	108
	⑤方形周溝遺構 遺物出土状況 東側（南より）	108
第17図版	城南遺跡出土遺物①	109
第18図版	城南遺跡出土遺物②	110
第19図版	城南遺跡出土遺物③	111
第20図版	城南遺跡出土遺物④	112
第21図版	城南遺跡出土遺物⑤	113
第22図版	城南遺跡出土遺物⑥	114

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

市街地より南西へ約3 kmに位置する庄ノ原台地には、庄ノ原片面遺跡・庄ノ原遺跡・田崎遺跡・城南遺跡・尼ヶ城跡などの、旧石器から中世における周知遺跡が点在している所である。

このように遺跡の集中している所で、平成元年10月に庄ノ原台地の庄ノ原遺跡群の周知遺跡内において民間業者の宅地造成計画が持ち上がった。現状ではミカン園と雑木の状態であり、遺跡の範囲や埋蔵状態を把握することが望ましいことから、大分市教育委員会では同年11月に範囲確認調査をおこなった。その結果、遺構の密度は希薄ながらも全体的に遺跡が分布していることが判明した。このため大分市教育委員会と民間業者との間で遺跡の保存について工法や計画変更などの度重なる協議を交えた。その結果、谷の部分に関しては保存できるものの台地上は削平が行われることから保存が不可能であるとの判断により調査の必要性がでてきた。こうした経緯により平成2年12月から発掘調査を実施することとなった。

2. 調査組織

調査指導 小田富士雄（福岡大学教授）
 賀川 光夫（別府大学教授）
 後藤 宗俊（別府大学教授）
 橘 昌信（別府大学教授）

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 安東 裕

事務局

大分市教育委員会

内田 悟（大分市教育委員会社会教育課課長）
野尻政文（ 同上 文化財室室長）
秦 政博（ 同上 社会教育課主幹）
是永和英（ 同上 文化財室主査）
佐藤良蔵（ 同上 文化財室主査・平成3年6月～）
佐藤小夜（ 同上 文化財室主任）

調査担当 讃岐和夫（大分市教育委員会社会教育課文化財室主任）

池邊千太郎（ 同上 文化財室技術員）

調査参加者 内野武・川鍋知秋・嶋田由希・兵谷有利・渡辺久江（以上別府大学学生）
 今川利夫・黒木典昭・実本知子・竹内啓次・野中嗣子・畑地洋介・濱口
 則子・原田三代子・山本雄一郎（以上大分大学学生）・後藤聡（福岡大
 学学生）、笠置則雄・河野豊重（以上三国建設㈱）

小野キミ子・小野淳子・小野正子・佐藤美智子・佐藤敦子・平野エミ子・平野沖子・三ヶ尻トミ子

整理作業員 測野玲子・渡辺里美・三重野八重子・西嶋スミエ・町田ユカリ・松村千里・釘宮香苗・井口あけみ・本室初代・得丸礼子

(以上大分市教育委員会社会教育課文化財室臨時職員)

以上の他、発掘調査期間中、清水宗昭氏、渋谷忠章氏、高橋 徹氏、村上和久氏、小林昭彦氏、吉田 寛氏、綿貫俊一氏（以上大分県教育庁文化課）、木村幾多郎氏、玉永光洋氏（大分市歴史資料館）の各氏が来訪され、種々の御教示・御助言を得た。

ここに記して感謝の意を表します。



写真① 城南遺跡発掘調査参加者

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

城南遺跡は大分県大分市大字永興字開臺に所在する。

大分市は九州の北東部にあたり、北側には別府湾が面しており瀬戸内海の西端に位置することから九州の東の玄関口としての役割を担ってきた所である。地形は東側より結晶片岩よりなる佐賀関山地が連なり、南側の中央部に霊山山地が広がり、そして西側には高崎山などがみられるが、その遠方には鶴見岳・由布岳・九重山さらに阿蘇山へと連なる火山列がある。これらの山地に囲まれるようにその内側に大分平野が広がっている。地層は新生代第三紀中新世から第四紀にかけてのものが分布し、碩南層群・大分層群・九重層群の順に形成されている。この平野部には中央部に大野川が流れ、西部に大分川が流れる。そして二大河川によってその周辺には河岸段丘が発達するとともに、丘陵地・台地・低地を成している。

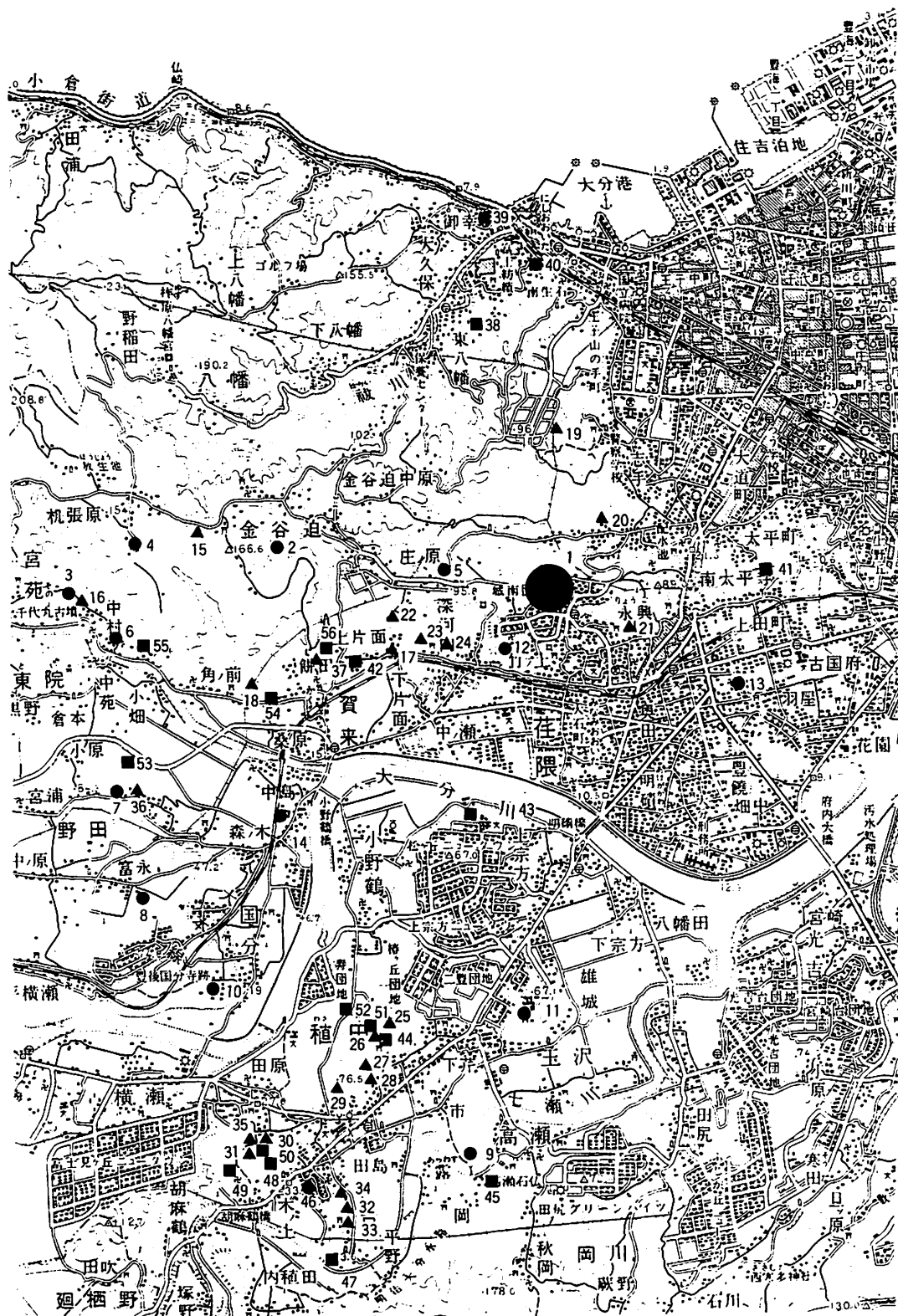
このうち遺跡は、庄ノ原面と称される庄ノ原から上野付近まで延びる火山噴出物の堆積によって形成された大分層群上にあり、その南側の眼下には由布院盆地を水源とする大分川が西から東に流れ、肥沃な平野を形成している。このうち、城南遺跡は標高84～92mの平坦な庄ノ原台地上にあり、南北約90m、東西約240mの面積約2haにおよび、日当たりの良い南下がりの緩やかな斜面に位置している。

遺跡の周辺部には旧石器から中世に至る遺跡が分布している。

この台地上にある庄ノ原遺跡では旧石器時代を始め、縄文時代早期・前期の遺物が確認されている。なお、縄文時代早期の遺跡として庄ノ原片面遺跡もあげられる。

弥生時代に入ると低地（沖積平野）と台地（丘陵）上に集落が営まれる。まず、本遺跡の東南方向には尼ヶ城遺跡があり、標高72mの丘陵の突出した部分にV字溝を構築して集落を独立させた様子が窺える。弥生時代終末期に相当する鏡の破片が1面出土している。こうした台地上に営まれた遺跡は、周辺部にも標高60mあまりの独立丘陵上に位置する守岡遺跡や舌状台地に位置する雄城台遺跡等においても見られる。台地上には数多くの住居と貯蔵穴が見つかっており、鏡の破片も出土している。共通して鏡が破棄されていることから弥生時代から古墳時代に移り変わる変革期と重なっており注目される。なお、低地のムラとしては賀来中学校遺跡や下郡遺跡があげられる。賀来中学校遺跡では幅4m、深さ2mあまりの2条の溝がムラを巡り、環溝集落であることが確認されている。下郡遺跡では、この地域において拠点となる集落が見つかっており、また、大量の農耕用木製品等が発見されていることから、この地で稲作が行われていたことが窺える。

つぎの古墳時代では、この台地はこれまで集落などの生活空間であった場所から多くの古墳が築かれるようになり墓域としての場所となっていく。蓬来山古墳は周濠をもつ前方後円墳であり、全長60mを越す台地で最も大きい規模を有する。年代は、古墳の形態などから古式の様相を窺うことができることから4世紀代のものと思われる。この古墳を中心とするように田崎古墳群と餅田古墳群が周辺に分布している。古墳の発掘調査は行われていないが、規模は径10～15m程の円墳であり、一部に箱式石棺が露出していることが確認されている。

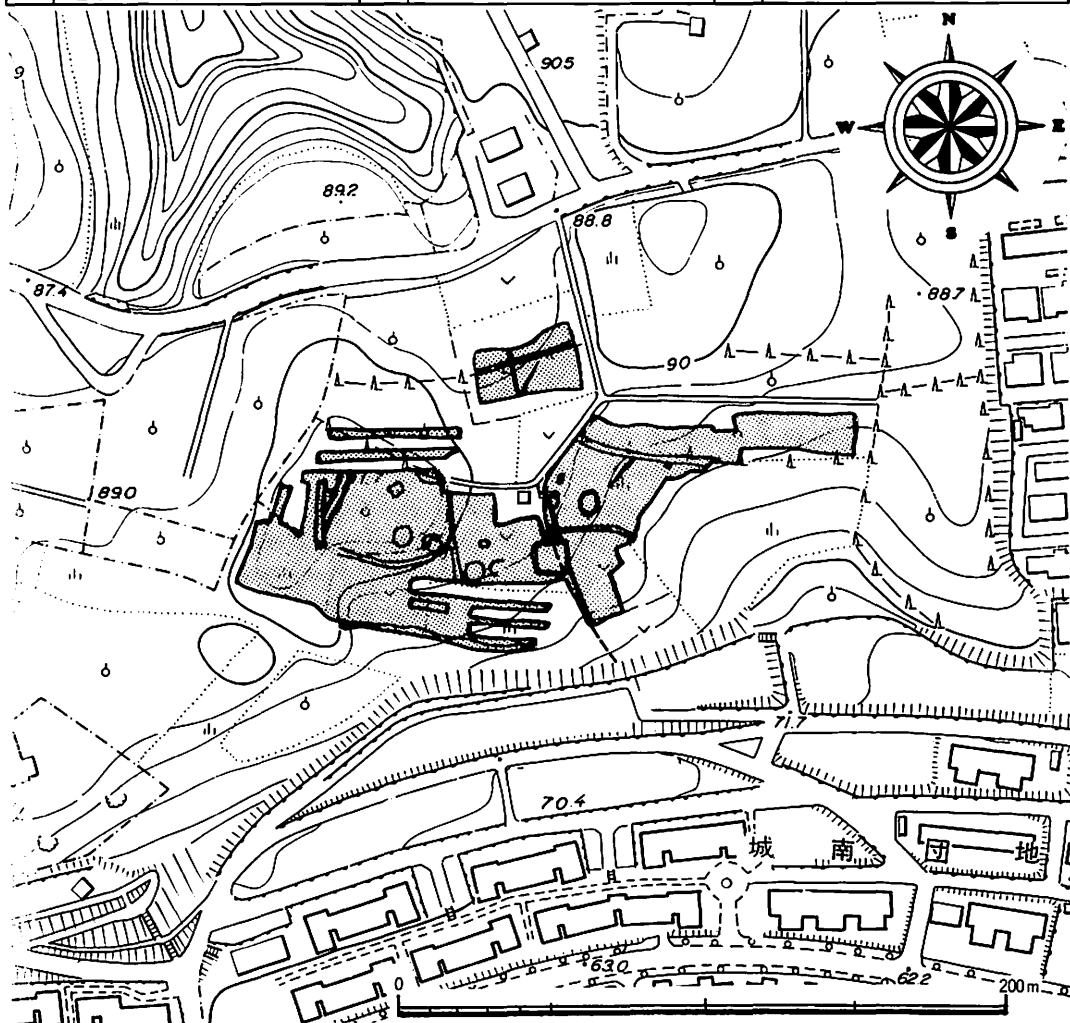


第1図 城南遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50000)

第1表 周辺遺跡一覧

●遺跡 ▲古墳 ■横穴墓群

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	城南遺跡	20	古宮古墳	39	蟹喰横穴墓群
2	金谷迫城跡	21	弘法穴古墳	40	生石横穴墓群
3	宮苑遺跡	22	蓬来山古墳	41	南太平寺横穴墓群
4	机帳原遺跡	23	田崎古墳群	42	上片面横穴墓
5	庄ノ原遺跡	24	深河内古墳群	43	小野鶴横穴墓群
6	中村遺跡	25	下迫古墳	44	高来山横穴墓
7	中尾遺跡	26	虎御前古墳	45	高瀬横穴墓群
8	国分台遺跡	27	漆間古墳	46	木ノ上古道石棺
9	植田市遺跡	28	世利門古墳	47	岩崎横穴墓群
10	豊後国分寺跡	29	稲荷古墳	48	土肥横穴墓群
11	雄城台遺跡	30	阿部古墳	49	志土地横穴墓群
12	尼ヶ城遺跡	31	山伏古墳	50	木ノ上峠横穴墓群
13	園遺跡	32	千人塚古墳	51	漆間横穴墓群
14	賀来中学校遺跡	33	浅草神社古墳	52	大曾横穴墓群
15	金谷迫古墳	34	御陵古墳	53	小原横穴墓
16	千代丸古墳	35	四本松古墳	54	餅田横穴墓群
17	丑殿古墳	36	中尾古墳	55	岩御堂横穴墓群
18	餅田古墳群	37	井手ノ上古墳	56	井手ノ上横穴墓群
19	亀甲山古墳	38	穴蟹喰横穴墓群		



第2図 城南遺跡とその周辺の地形図 (1/2500)

古墳時代の後期から終末期になると台地の下の低丘陵部や台地斜面に古墳が構築される。庄ノ原台地の南側裾には横穴式石室の丑殿古墳が見られる。内部主体部に家形石棺を備えている。なお、それより約2km東側の南斜面に横穴式石室を主体部とする弘法穴古墳が見られる。一方、台地の北側小河川を挟んだ南側丘陵斜面の標高50m付近に国指定史跡の古宮古墳が位置する。墳丘は方形を成し、主体部は直方体の凝灰岩を削り貫いて造った石室とその前方部に付設する羨道部からなる石棺式石室である。墳丘の規模を薄葬令の規定と比較すると「上臣」に相当していることから、被葬者を「日本書紀」天武天皇の条に登場する「大分君恵尺」とする説が有力である。

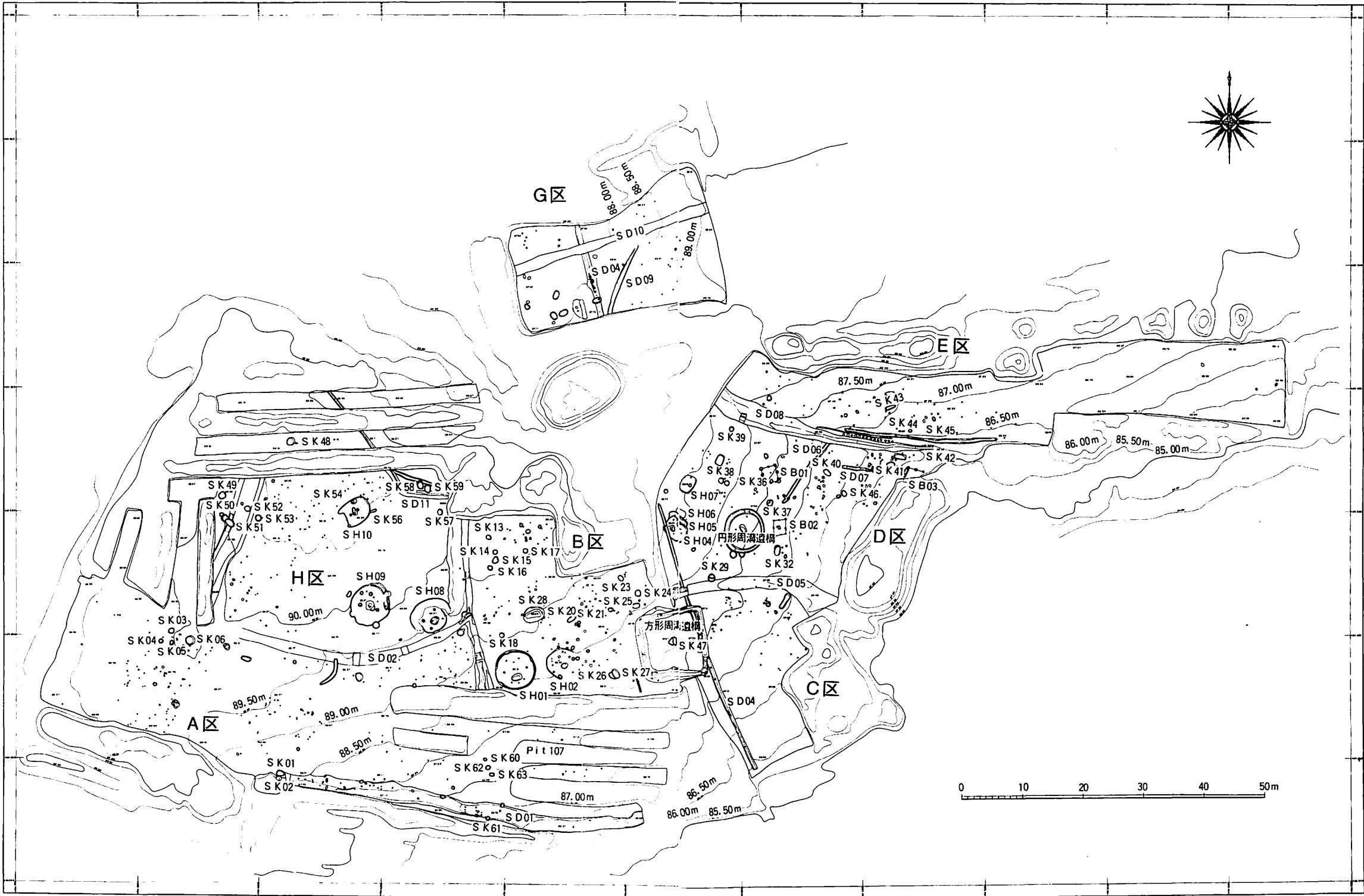
白鳳時代から奈良時代にかけて庄ノ原台地の裾部周辺には、国分寺創建瓦と同じ複弁十葉蓮花文軒丸瓦を出土させる永興寺と金剛宝戒寺の周囲から百済系単弁軒丸瓦を出土させており、この地の古代寺院の造営を知ることができる。

以上の様に庄ノ原台地上周辺部にかけて歴史的環境に包まれたところである。

参考文献

- | | | | |
|-----------|----------------------------------|----------|-------|
| 『大分市史』 | 上巻・中巻 | 大分市 | 1987年 |
| 『守岡遺跡』 | 昭和50・51年度発掘調査概報 | 大分市教育委員会 | 1979年 |
| 『雄城台』 | 第8次発掘調査の概要 | 大分県教育委員会 | 1987年 |
| 『古宮古墳』 | 大分市文化財調査報告 第4集 | 大分市教育委員会 | 1982年 |
| 『賀来中学校遺跡』 | 大分市賀来中学校プール移設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 | 大分市教育委員会 | 1992年 |

城南遺跡



第3図 城南遺跡遺構配置図 (1/750)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

遺跡は調査範囲の内、東側の部分と南側の段落ち部分には遺構が認められず、ミカン園を造成する時点において削平が行われており、全体的に遺構の遺存状態は悪い。このため、南側斜面に行くに従い削平が著しい。本遺跡からは、堀立柱の倉庫が3棟、住居跡が10棟、堅穴土壇が60数基、溝状遺構が11条、円形の周溝遺構が1基、方形の周溝遺構が1基、柱穴多数が検出された。

堀立柱は調査区中央より東側に2棟が近接して検出されており、2×2軒の方形を成す建物である。

住居跡は調査区の中央付近に集中して見られ、このうちのS H 01・02・03・08・09は円形を成し、弥生時代中期から後期の堅穴住居である。

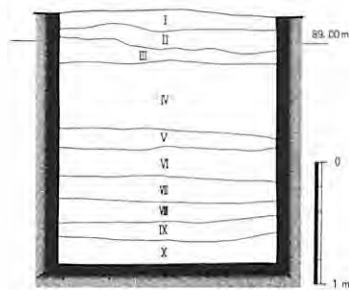
堅穴土壇は遺跡全体に分布しており、その数60基を越えている。中でも、S K 03・13・38・49・52においては弥生時代中期の遺物が出土している。

溝状遺構は8世紀代の溝（S D 01）が台地南側の端で東西方向に走っている。溝の幅は3 mを越える所もあるが、東側では次第に幅を減じ消滅している。その他の溝は調査区の至るところに走っているが、近世・近代における新しい溝であった。

また、堀立柱の西側に直径8 mの幅60 mの溝が円形に巡る遺構が見られる。さらに、南側にも溝を方形に巡らせた遺構が検出されている。遺構には幅1～2 m、深さ70 cmの溝が巡り、一辺12 mの規模を有する。時期は溝から出土した遺物より8世紀頃の所産であることが確認でき、これは南側で東西に走る溝状遺構（S D 01）と同時期であった。

あと堅穴土壇のうちS K 42・47は土壇墓であることが確認された。S K 42は長さ2 m、幅80 cm、深さ40 cmの規模を持ち、長方形を成す。埋土から4点の土師器が出土しており、このうちの1点には『西』と書かれた墨書土器が認められた。S K 47は方形周溝遺構の溝を切って造られており出土土器から中世の土壇墓であることが確認された。

以上のように今回の調査により弥生時代から中世にかけて幅広い時期における遺跡が明らかになった。



- I 黒色土層（比較的やわらかい有機質土）
- II 黒褐色土層（やや軟質）
- III 茶褐色土層（やや粘性を有する）
- IV 黄褐色土層（やや粘性を有する。ローム層）
- V 明黄褐色土層（青白色土が斑状に混入）
- VI 淡黄灰褐色土層（粘性を有する）
- VII 淡黄灰褐色土に茶褐色土と青白色土が斑状に混入
- VIII 黄褐色土層に黒褐色土と青白色土が斑状に混入
- IX 黄灰褐色土層に黒褐色土と青白色土が斑状に混入
- X 暗灰茶褐色土層に青白色土と黄褐色土が斑状に混入

第4図 城南遺跡土層図（1/60）

1. 掘立柱建物（SB）

本遺跡より検出された掘立柱建物は調査区の東側、東に緩やかに傾斜する地形に3棟確認され、この内SB01・SB02の2棟は総柱の建物であった。この2棟は、6m程はなれているが、建物の方位や建物規模が近似する事から、ほぼ同時期に建てられたものであろう。SB03は、調査区が限られており一部しか検出していないが、おそらく総柱の建物となろう。

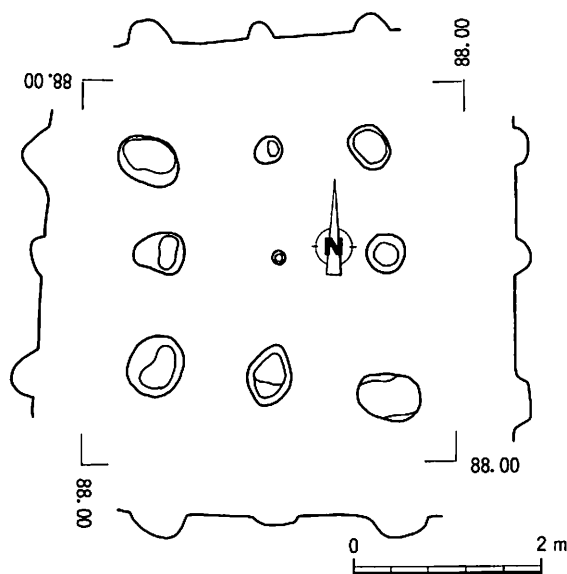
SB01（第5図）

SB01は、調査区東側の円形周溝遺構に近接し、東西2間（2.4m）×南北2間（2.3m）の総柱の掘立柱建物である。建物面積は5.8㎡であり、方形を呈する。検出面の地形は北西側に高く、東南側に下がって低くなっている。

柱間隔は北側列で東より1.2m+1.2mであり、南側列で東より1.3m+1.2mである。東側列では北より1.2m+1.5mであり、西側列では北より1.1m+1.2mである。

柱穴の掘り方は円形を成し、直径40cm～60cmで、深さは検出面より15cm～25cmである。

遺物は出土しておらず時期は不明であるが、遺構の性格は総柱の高床倉庫跡と思われる。



第5図 SB01 平面・断面実測図（1/80）

SB02 (第6図)

SB02は調査区東側の円形周溝遺構の北東側に位置し、SB01のちょうど北側6mの所にあたる。

遺構は東西2間(2.4m)×南北2間(2.2m)の総柱の掘立柱建物である。建物面積は5.3㎡であり、方形を呈する。検出面の地形は北東側に高く、東西側に下がっている。

柱間隔は北側列で東より1.2m+1.0mであり、南側列で東より1.2m+0.9mである。東側列では、北より1.4m+0.9mであり、西側列では北より1.2m+1.3mである。

柱穴の掘り方は円形を成し、直径18cm～30cmで、深さは検出面より10cm～20cmである。

時期の判明できる遺物は出土していないが、SB01と方向や建物規模が類似する事から同時期の所産と思われる。

SB03 (第7図)

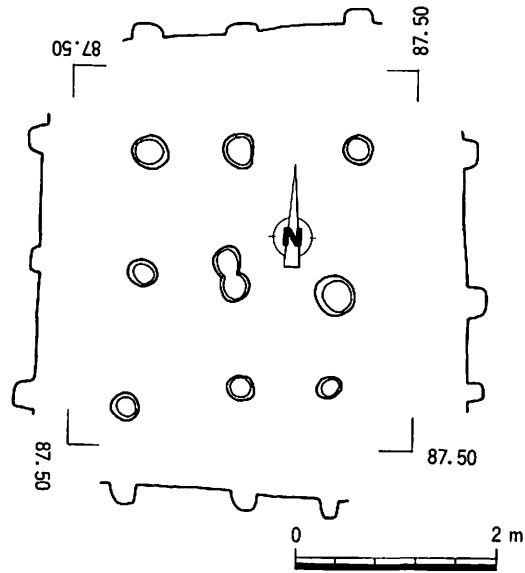
SB03は調査区東端に位置し、遺構の半分は調査区外に延び全容は不明である。

遺構は東西2間(2.6m)×南北2間(不明)の総柱の掘立柱建物と思われる。

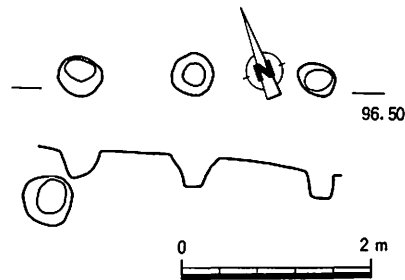
柱間隔は北側列で東より1.4m+1.2mである。

柱穴の掘り方は円形を成し、直径40cm～50cmである。

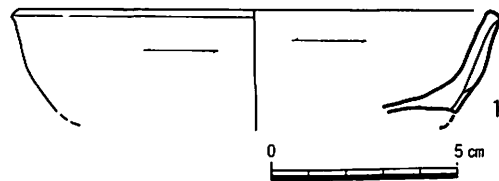
遺物としては、1(第8図)の土師器の坏が出土している。



第6図 SB02 平面・断面実測図(1/80)



第7図 SB03 平面・断面実測図(1/80)



第8図 SB03 出土遺物実測図(1/2)

2. 溝状遺構 (SD)

本遺跡から検出された溝状遺構は14条にのぼる。時期の判明している遺構を時期別に見れば、古い段階では古代のものが見られ、さらに中世・近世・近代に大きく時期を分けることができる。

古代の溝状遺構 (SD01) は、東西方向に延びる幅4 m程の規模を有するもので、同時期の方形周溝遺構との関連が考えられる。調査区東側の東西方向に延びる溝状遺構 (SD08) には、60cmおきに直径30cm程の円形の浅い掘り込みが連続的に続いて見られる特殊な遺構も見られた。

全体的には、近世～近代にかけての排水を目的とした溝が見られるものであった。

SD01 (第9図)

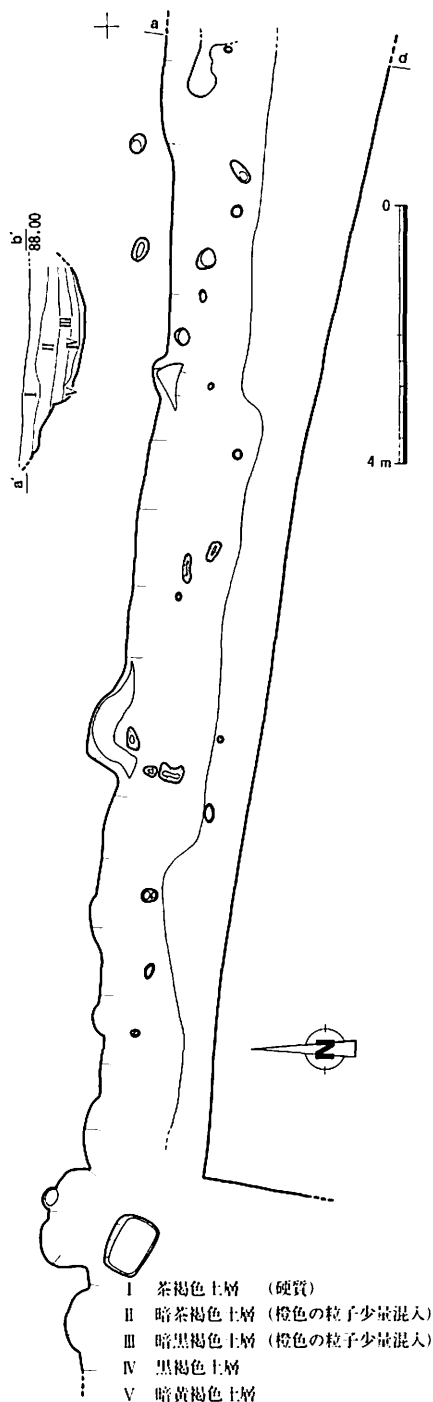
調査区南端部に東西方向に直線状に延びる溝状遺構である。検出長は東西に70m確認し、東西はそれぞれ調査区外に延びている。遺構の幅は、西側では4 m程を有するものと思われるが、東側に向かうに従って深さと幅を減じ、幅が2.5m程になっている。遺構の埋没状況を見ると、水平に堆積している。遺構の底には、直径30～40cm程の円形の掘り込みが見られるが、この遺構との関連は不明である。遺物には土師器や須恵器が出土しており、Ⅲ層～Ⅳ層に遺物が混在している。

掘り方は、皿状を呈している。

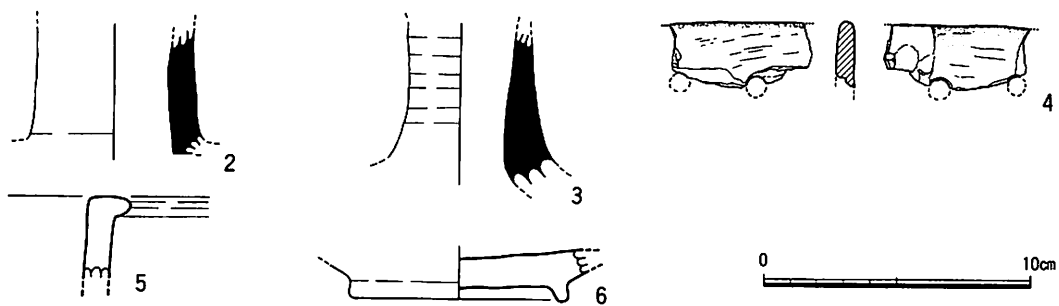
出土遺物 (第10図)

(2)は長頸壺の頸部であり、肩がやや張る形状のものと思われる。

(3)は長頸壺の頸部であり、外面に水引きの稜線が見られる。肩の張りがなく、丸味を帯びている。



第9図 SD01 平面・断面実測図 (1/120)

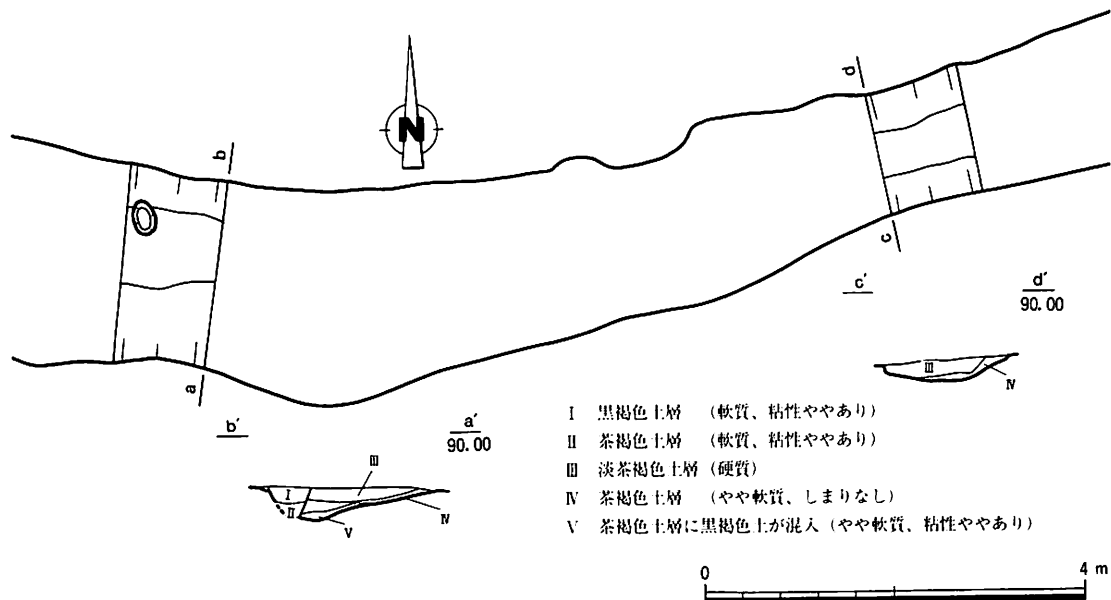


第10図 SD01 出土遺物実測図 (1/3)

SD02 (第11図)

調査区南西側に位置し、東西方向に走る溝状遺構である。東側において、南北に走るSD03と交わる。SD03との切り合いは認められず、同時期の所産と考えられる。

検出長は40mにおよび、最大幅は1.9mを有する。掘り方は、逆台形状を呈するが、床面からの立ち上がりはなだらかである。検出面から床面までは20～30cm程である。遺物は希少であり、時期を明確にしうるものは出土していない。

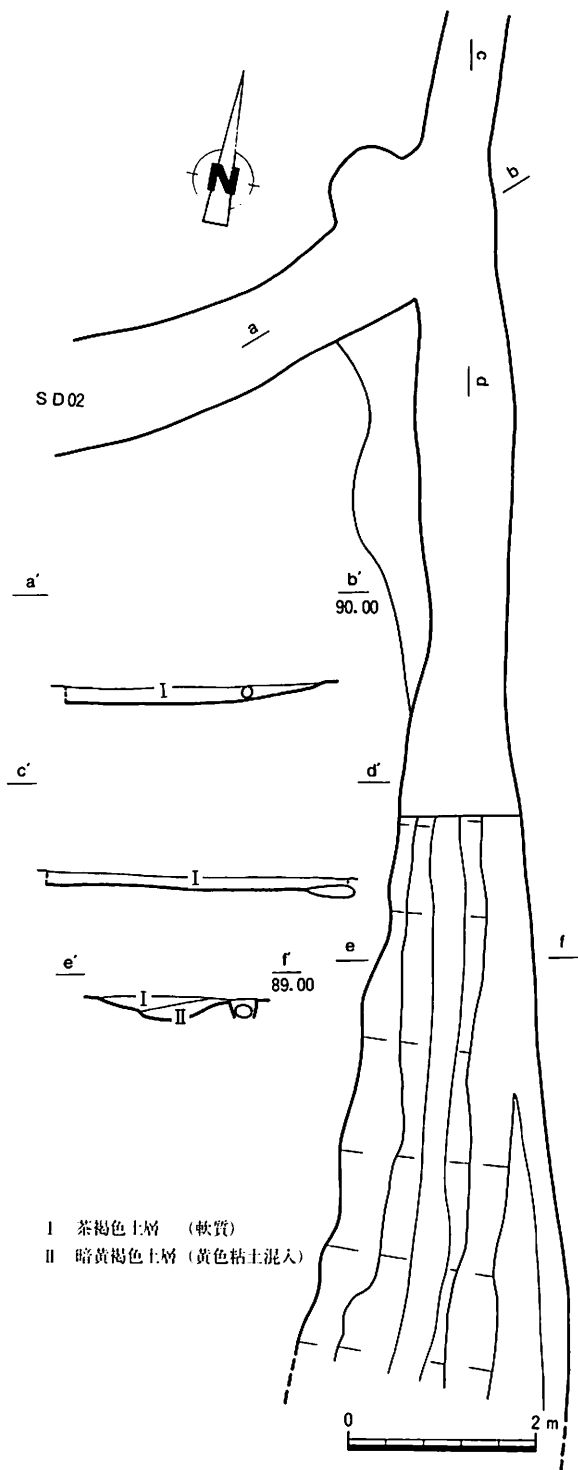


第11図 SD02 平面・断面実測図 (1/80)

SD 03 (第12図)

調査区中央部よりやや西よりに南北方向に走る溝状遺構である。検出長は、30mにおよび、南北共に調査区外に延びいる。南側には、SD03の埋没後、南北に幅30cmあまり、深さ20cmあまりの掘り方に土管を埋設した遺構が検出されている。ちょうどSD02とSD03との交わった所にコンクリートで作られた長径1m、短径50cmの丸底のマスを配し、これに流れ込んだ排水が土管の中を通り南の方へと流れるようになって

いる。
SD03の掘り方は、逆台形を呈するもので、南側の壁面には床からの立ち上がった所で溝に沿って一段のテラスが見られる。深さは検出面から床面まで10cmあまりである。埋土は、上層に茶褐色でパサパサした軟らかい層を成しており、下層は暗黄色褐色層を成す。



第12図 SB 03平面・断面実測図 (1/80)

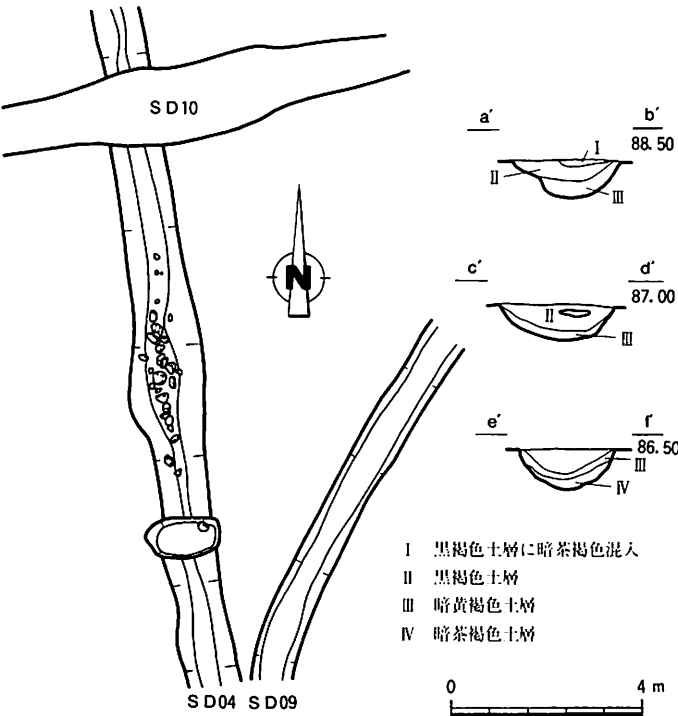
SD04 (第12・13図)

SD04は、調査区の東側を北から東南に向かって横断し、南側斜面へと下がっている。

検出長は、南側調査区で50m、北側調査区で15mを有する。幅は、北側で最大を計る事ができ、1.2mを有し、南側に向かって幅を減じ、狭い所では50cmであった。幅の違いは、おそらく南側面の方が後世の造成によって遺構上面が削平されたものと考えられよう。

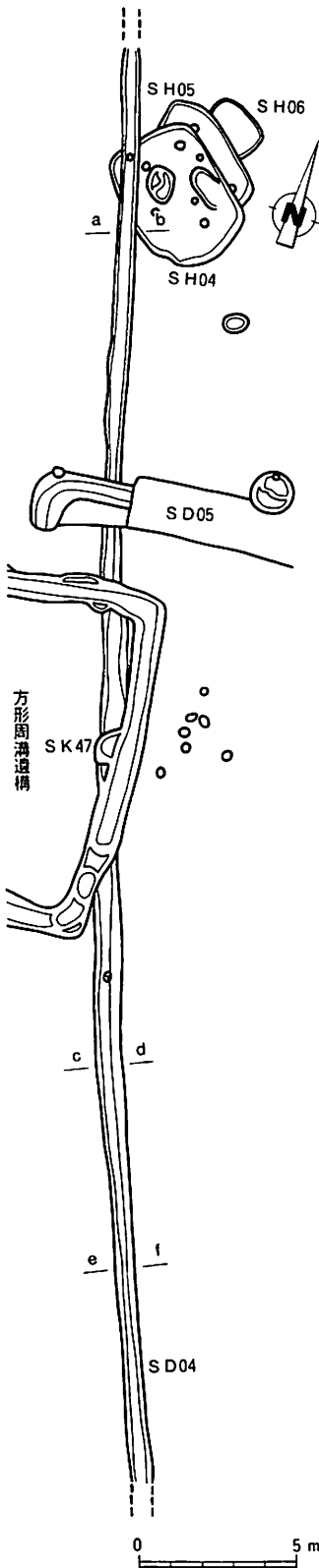
掘り方は、丸底状に掘削しており、検出面から底面までの深さは、15～20cm程である。埋土はおおよそ2層に分かれ、上層に黒褐色土層が入り、下層に暗黄褐色土層がレンズ状に堆積している。

なお、SD04には他の遺構との切り合いが多く見られる。南側より切り合いを見ると、方形周溝遺構とSK47とを切り、SD05に切られ、さらにSH04を切り、北側調査区においてSD10に切られている。



第13図 北側調査区 (G区)

SD04 平面・断面実測図(1/160)



第14図 南側調査区 (C区)

SD04 平面実測図(1/250)

S D 0 5 (第15図)

調査区東側を東西方向と更に南北方向にL型に屈曲して走っている。L型に曲がる屈曲部は方形周溝遺構のちょうど北側にあたり、それより東側は緩やかに下り、南側は方形周溝遺構を切っ

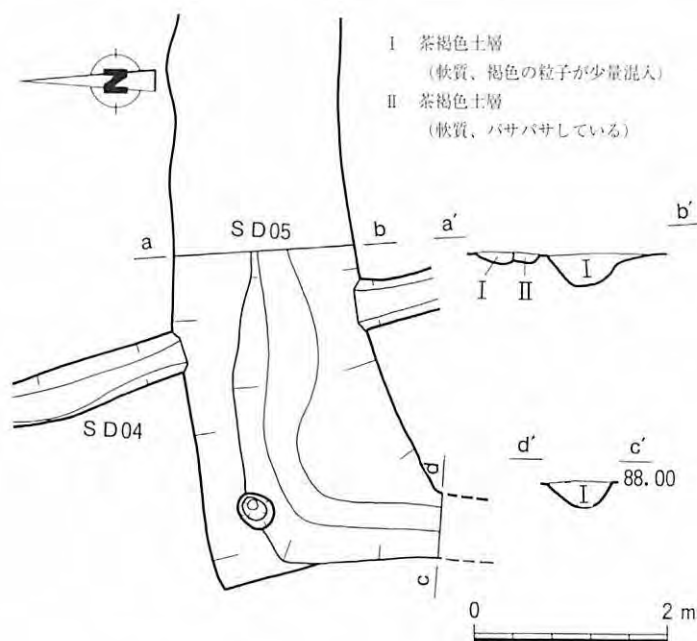
て調査区外へと走っていく。東西方向に走るそれは、3本の溝遺構から成り、一番北側に走る幅40cmの溝状遺構は他の2本の溝状遺構が埋没した後に掘り変えられたものと思われる。この南側の溝状遺構は幅80cm、深さが検出面より30cmを成し、掘り方が逆台形を呈する。この遺構のみが東西方向から南側へと屈曲

して走っている。底面は幅20cmほど平らで壁面はなだらかに立ち上がっている。

埋土は、茶褐色土の軟質層のみであるため、短期間に埋まったものと考えられる。

なお、遺物は出土しておらず、時期の判明はできなかった。

切り合い関係は、方形周溝遺構とS D 04を切っている。



第15図 S D 05 平面・断面実測図(1/80)



写真② S D 05 遠景 (左下)

SD06 (第16図)

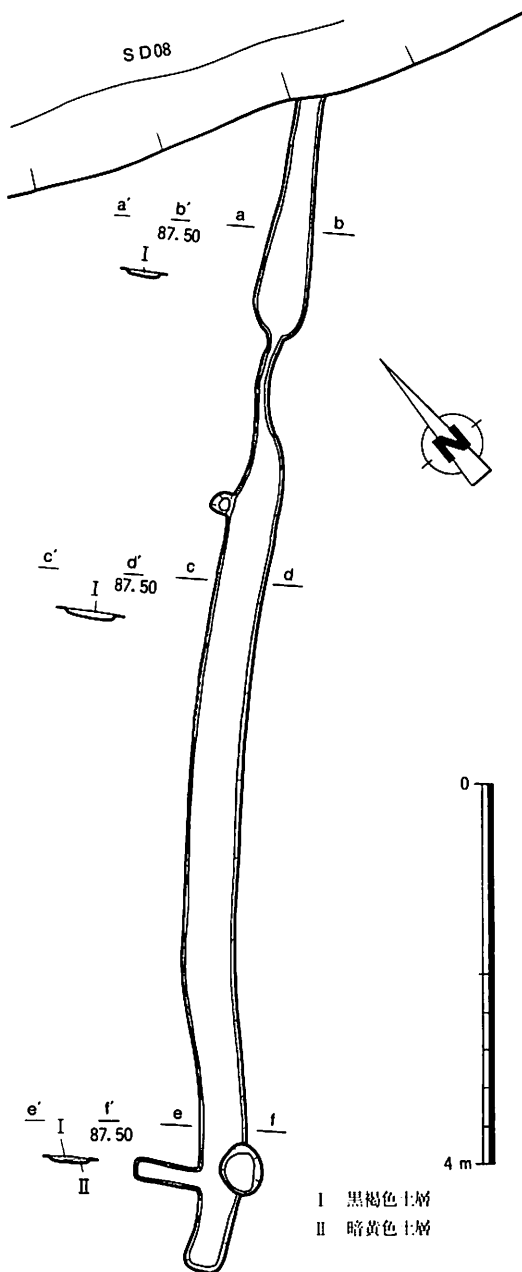
調査区東側を南西から北東方向に直進する溝状遺構である。検出長は、12m程であり北東側は、東西方向に走るSD08と切り合っている。溝の幅は、最大で50cmあまり、深さは検出面より6～8cmと浅いものであった。遺構の掘り方は、底面が広いU字形を成し、埋土は上部に黒褐色土層が堆積し、下部に暗黄褐色土もしくは暗茶褐色の粘質土層が堆積している。遺物は確認されなかった。

この遺構の性格として、溝の機能を考えた場合、遺構が浅く、幅が50cm程で狭いことや位置的に必要性がないことを考慮すれば、別の機能を考える必要があろう。

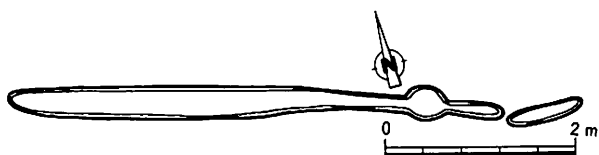
そうして考えた場合、位置的に見ると掘立柱建物のSB01とSB02とのほぼ真ん中に延び、その先には円形周溝遺構が位置していることから、これらの遺構と関係するものと推測できる。こうしたことから、SD06の性格を道状遺構とすることも考えられよう。

SD07 (第17図)

調査区東側を東西方向に走る溝状遺構である。検出長は、6m程、幅30cmを有する。深さは5～8cmであり、非常に浅いものである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第16図 SD06 平面・断面実測図 (1/80)



第17図 SD07 平面実測図 (1/80)

SD08 (第18図)

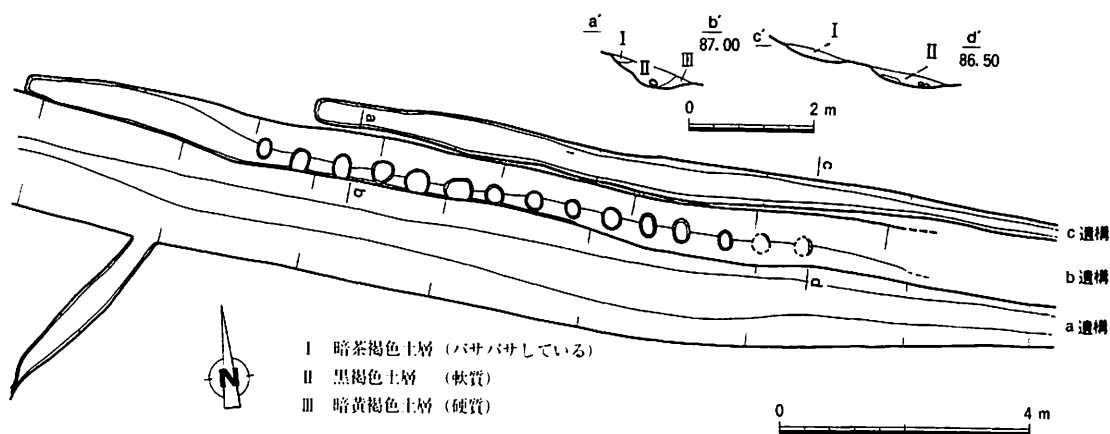
調査区東側を東西方向に直進する溝状遺構である。東側では溝状遺構が3条になっており、南からa、b、cと遺構が細分される。

この内、最も規模の大きいa遺構は、検出長さが30mあまりで西側は調査区外に延び、東側は地面が谷間に向かって下降するに従い、しだいに消滅していく。遺構の最大幅は1.6mあり、深さは検出面より20cmであった。

b遺構は、検出長が15mあまりで東側に行くに従い消滅していく。遺構は幅80cmあまり、浅い掘り込みである。この溝条遺構の底には直径20～25cmあまり、深さ10～15cmのほぼ円形の浅い掘り込みが60cm間隔に一直線上に15穴確認できた。柱穴や柵列を考えたが、掘り込みが浅い事、東側下がりになっている事、浅い掘り込みのならぶ所が溝条に掘り窪まれている点からすれば、遺構の性格を別のものに考える必要があろう。

c遺構は、検出長25mにおよび、幅50cm、深さは検出面より10cmあまりと規模の小さい遺構である。

なお、a、b、cのそれぞれは切り合いが見られないが、同時期の所産であるかどうかは、断定はできない。



第18図 SD08 平面・断面実測図 (1/120)

SD09

北側調査区(G区)を北北東から南南西に直進する溝条遺構である。検出長は、12mあまりで、南側は調査区外に向かい、北側はしだいに消滅していく。幅は80cm程で、深さは検出面から10cm強である。なお、遺物は出土していない。

SD10

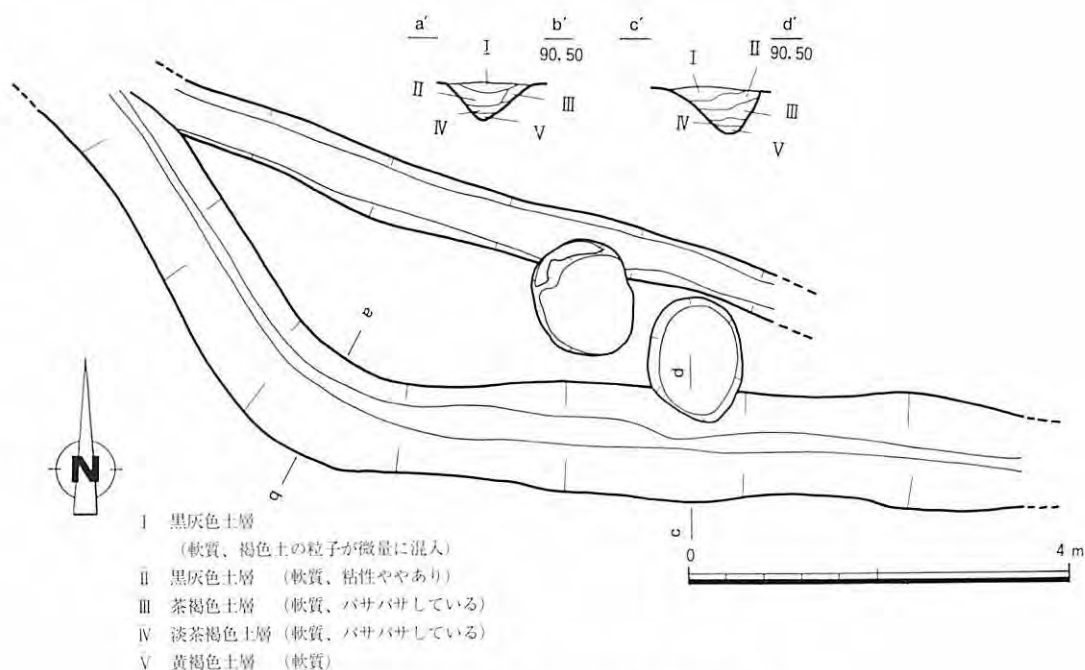
北側調査区（G区）を東西に直進する溝状遺構である。検出長は35mにおよび、東西共に調査区外に延びている。なお、SD04を切るように掘られている事や、埋土が非常に新しい事から、調査では遺構の掘り下げは行わなかった。幅は最大で1.8mにおよんでいる。

SD11（第19図）

調査区中央の北側に位置し、北西から東南にかけて直進し、途中でくの字に屈曲し、東側に走る。幅は90cmあまり、深さは検出面から40cmほどである。掘り方はV字状に近い形態を成す。また、遺構はSK59を切っている。



写真③ SD11 遠景



第19図 SD11 平面・断面実測図 (1/80)

3. 住居跡（SH）

本遺跡からは、弥生時代中期から後期にかけての大小合わせて10基の竪穴住居跡が確認された。住居跡の形態は大きいものが円形を呈し、小型のものは隅丸長方形を呈している。

住居跡は、B区・D区・H区に分布しており、B区の南側斜面にある住居跡のSH01・02は特に後世の削平を著しく受けている。よって、その他の場所でも住居跡が削平を受けて消滅している所もあるだろう。しかしながら、削平された住居跡があったとしても柱穴は残るため、柱穴の配置から住居跡を推測することが可能であり、検出できなかった住居跡が数基あるものと思われる。

SH01（第20図）

SH01は調査区の中央に位置する竪穴住居跡である。形状は、ほぼ円形を成し、東西に6.5m、南北に6.3mの規模をもち、主柱穴は円弧状に6ヶ所見られ、南北に対称に補助柱穴が2ヶ所認められる。主柱穴の径は、30～34cmの円形で、深さは床面より50～71cmにおよぶ。また、補助柱穴の径は25cm程であり、深さは床面よりそれぞれ20cmと33cmを有する。

竪穴の掘り込みにおいて、検出面から床面までの深さは、北側が最も遺存状態が良く、30cmあまり、南東側が最も遺存状態が悪く10cmあまりである。堆積土は、流れ込みの状態を示している。また、壁面の3分の2程度に溝が巡っている。南側と南西側の一部には溝が確認されなかった。溝の幅は約10～15cm程で、深さは床面より8cmである。北側と東側には、壁面と溝との間に幅5～20cm程のテラスが巡っている。床面はほぼ平らに造られており、中央部分に径約40cmの焼土が見られ、北東部分にも確認された。

また、床面中央よりやや南よりに、土壌が検出された。平面形は長軸が東西に1.6m、短軸が南北に0.8m、床面からの深さが0.2mの隅丸長方形を呈する灰溜土壌である。土壌の堆積土は、2層に分かれ、流れ込みの状態を呈する。

出土遺物（第21図）

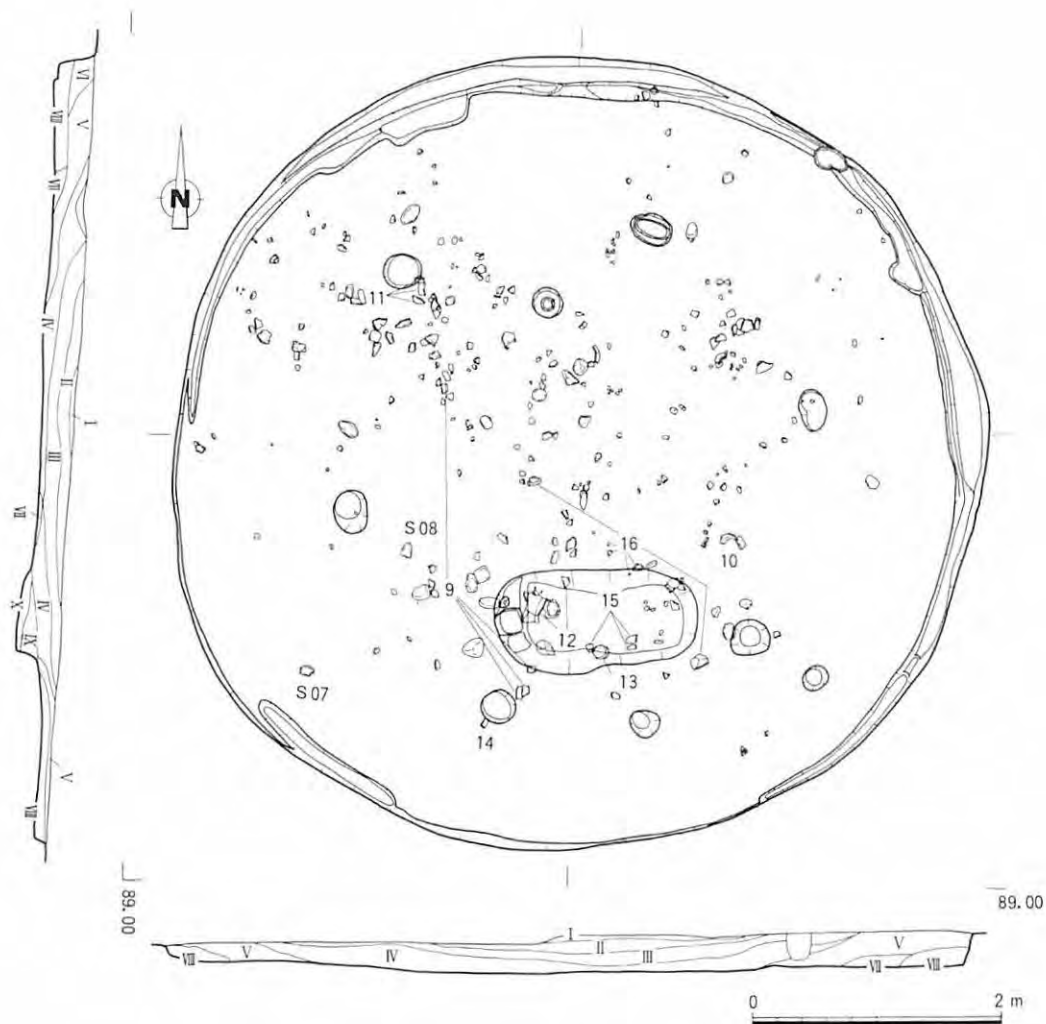
出土遺物には、弥生時代の壺形土器や甕形土器である。比率からすれば、壺形土器より甕形土器の方が多い。

甕形土器（8～12）の形態はほぼ同じ様な特徴を示している。つまり、肩部から口縁部とのくびれ部は明瞭でしまっており、口縁部は大きく外反している。厚さは胴部上半から口縁部にかけて一定しており、くびれの部分がやや厚くなっている。

壺形土器(15)は、複合口縁を成すもので、口縁の立ち上がりはほぼ垂直である。また、複合口縁部に施紋される櫛描波状文は認められない。

土器の底部も出土しているが、甕形土器もしくは壺形土器であるかは定かではない。形態には底部を窪ませることによる上げ底ぎみのもの(16)、丸味を帯びている平底を呈するもの(14)、丸底を呈するもの(13)が分類される。

なお磨石（S07・S08）の2点が出土している。

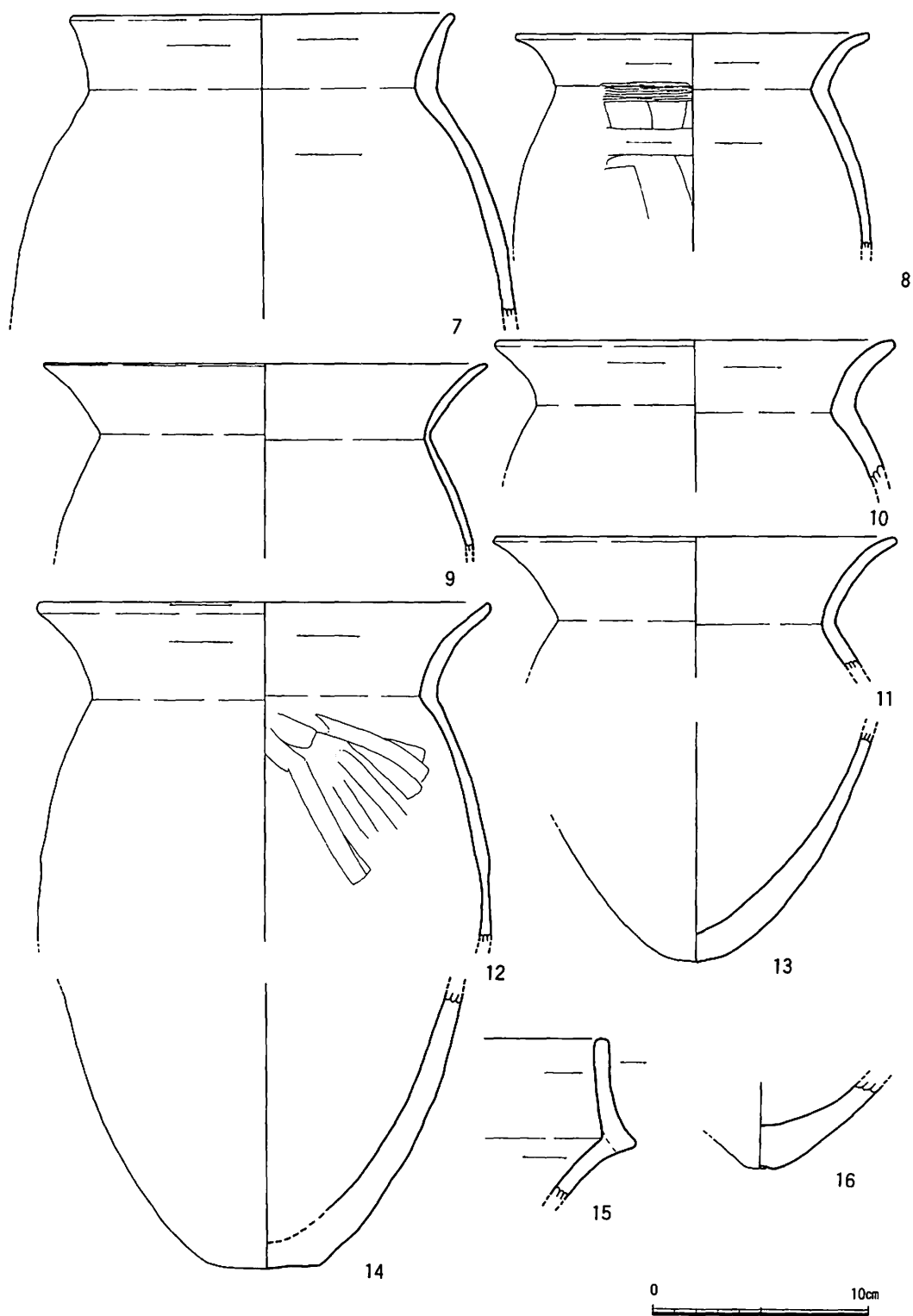


第20図 SH01 平面・断面実測図 (1/60)

- | | | |
|------|--------|---------------|
| I | 茶褐色土層 | (硬質) |
| II | 黒褐色土層 | (硬質、茶褐色粒子混入) |
| III | 黒色土層 | (軟質、茶褐色粒子混入) |
| IV | 暗黒褐色土層 | (軟質、粘性あり) |
| V | 茶褐色土層 | (硬質) |
| VI | 黄茶褐色土層 | (硬質、黄色粘土混入) |
| VII | 黄色土層 | (粘性あり) |
| VIII | 暗黄褐色土層 | (黄褐色と黄色の粘土混入) |
| IX | 黒色土層 | |
| X | 明黄色土層 | (粘性あり) |



写真④ SH01 全景



第21図 SH01 出土遺物実測図 (1/3)

SH02 (第22図)

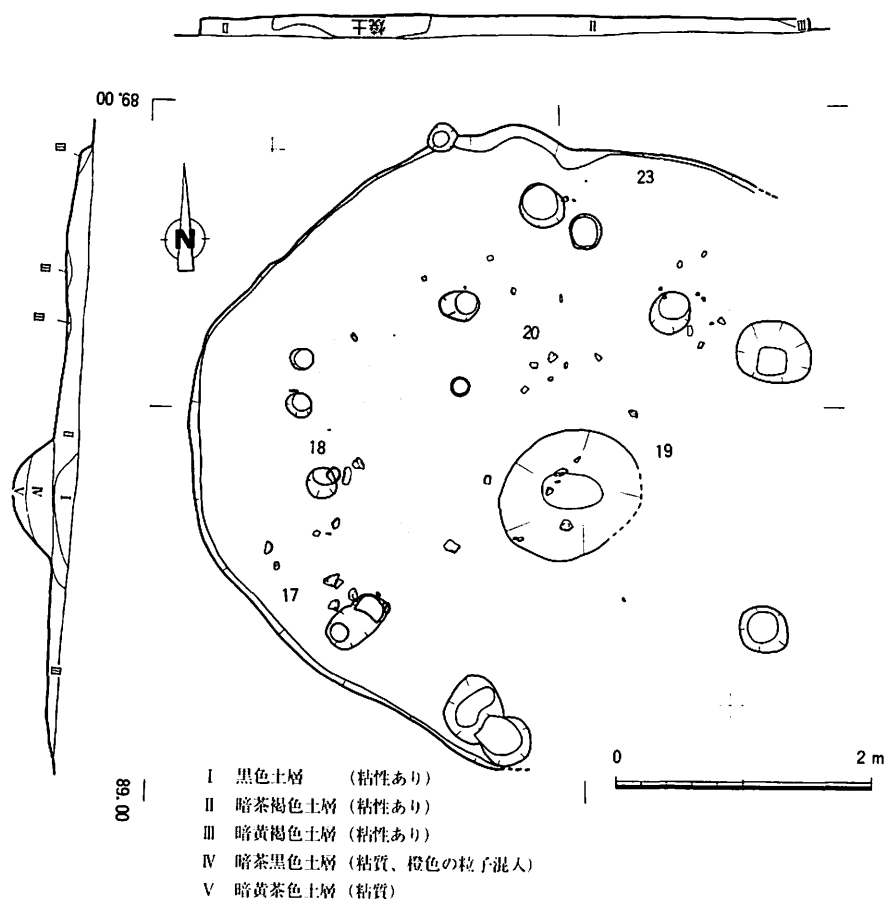
SH02は調査区の中央に位置し、SH01とはほぼ並存して存在する竪穴住居跡である。形状は、ほぼ円形を成し、東西に約5m、南北も約5mの規模をもつ。

主柱穴は円弧状に6ヶ所見られる。主柱穴の径は30～60cmの円形ないし楕円形を呈し、深さは床面より53～61cmを有する。

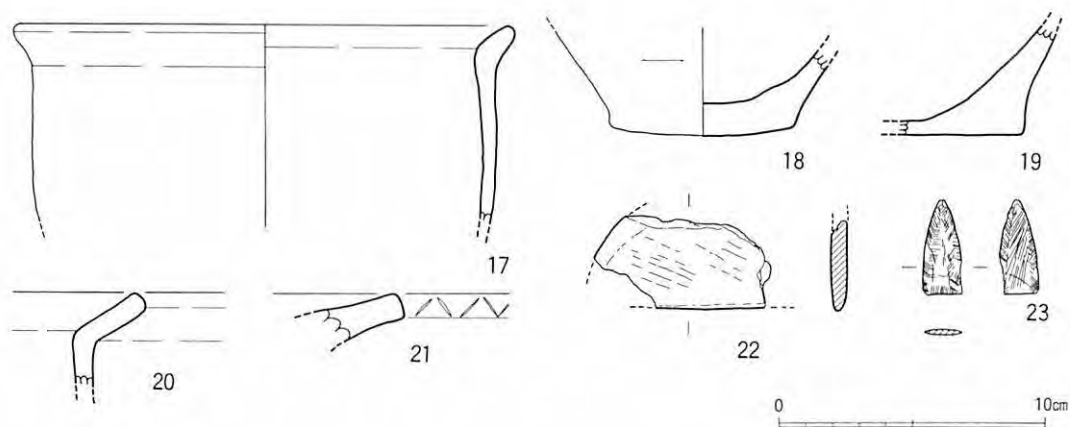
竪穴の掘り込まれた場所は、北西側から南東側に緩やかに傾斜した地形であり、後世の削平を受けているため、東南側の壁面の遺存状態は良くない。西側壁面は遺存状態が一番良く、深さは12cm程であった。壁面を取り巻く溝状の遺構は確認されていない。堆積土層は、暗茶褐色土の粘土質層である。

また、床面に焼土が6ヶ所確認されており、最も大きい焼土塊は、北西側で確認され、広がりには1.5×1m程である。

さらに中央よりやや南側に長径1.15m×短径0.95m、深さが床面より0.36mの土壙が検出され、平面形は丸に近い楕円形を呈し、掘り方は摺鉢状である。土壙内の堆積層は、上部に暗茶黒色土の粘土質層、その下部に暗黄茶色土の粘土質層が見られる。



第22図 SH02平面・断面実測図 (1/60)



第23図 SH02 出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第23図）

遺物は床面に弥生土器の破片が点在する状況である。

(17)の甕形土器は、口縁端部が短く外反し、厚くなっている。

(20)の甕形土器は、口縁部が「く」の字に屈折し、同じ厚さで伸びている。

(21)は鋤先状口縁を呈するもので、口唇部には鋸歯状文が施されている。

(22)は石砲丁と思われる。

(23)は平基式の磨製石鏃で、長さ3.6cmである。

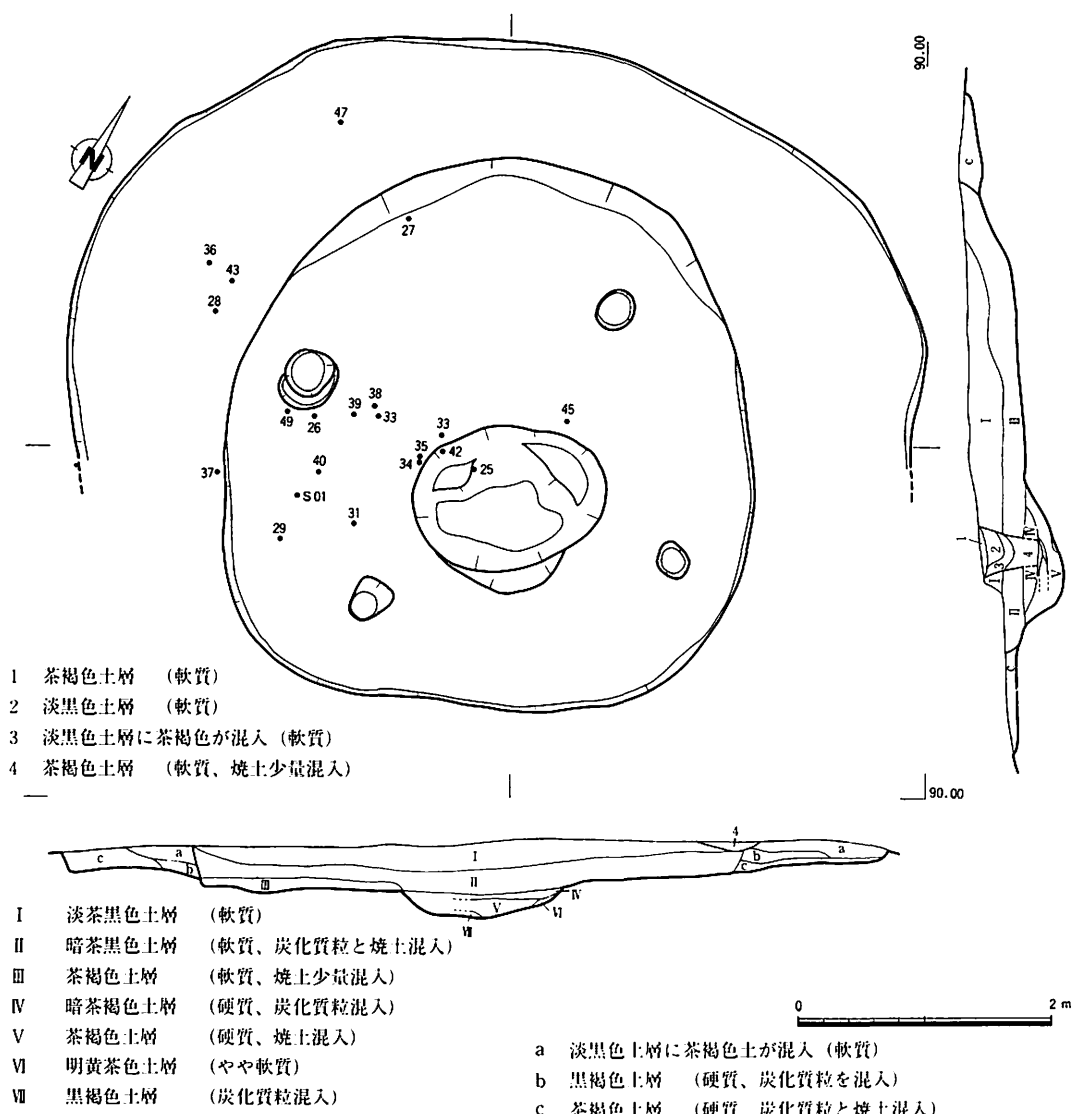


写真⑤ SH02 全景

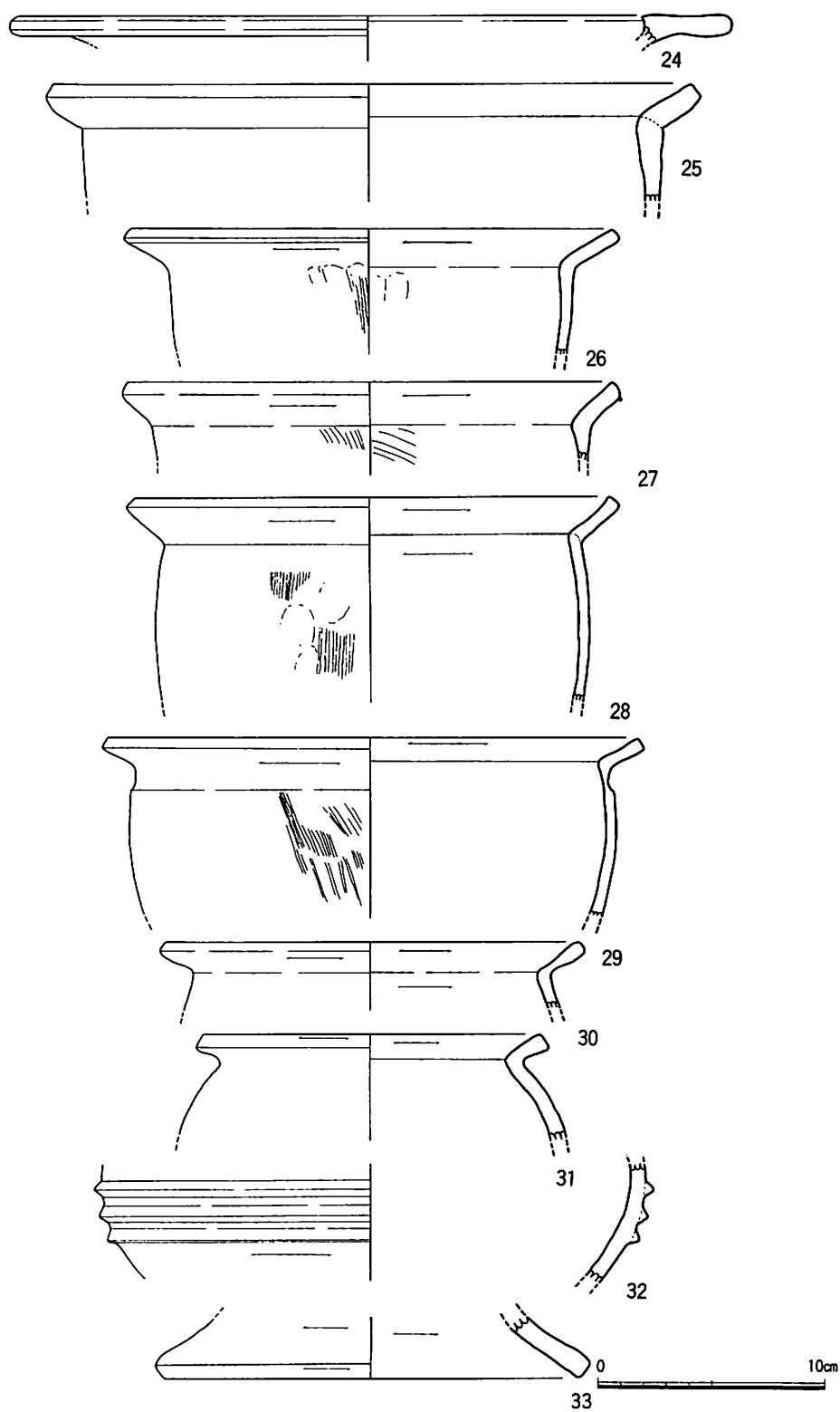
SH03 (第24図)

SH03は調査区中央付近に位置する竪穴住居跡である。SH08の竪穴住居跡の内側にあり、規模は一回り小さい。土層の切り合いから見れば、SH08が埋まった後、遺構を切るようにSH03が掘り込まれている。このため、SH03の床面はSH08よりも低くなっている。平面の形状は、円形を呈しており、径が4.2m前後である。

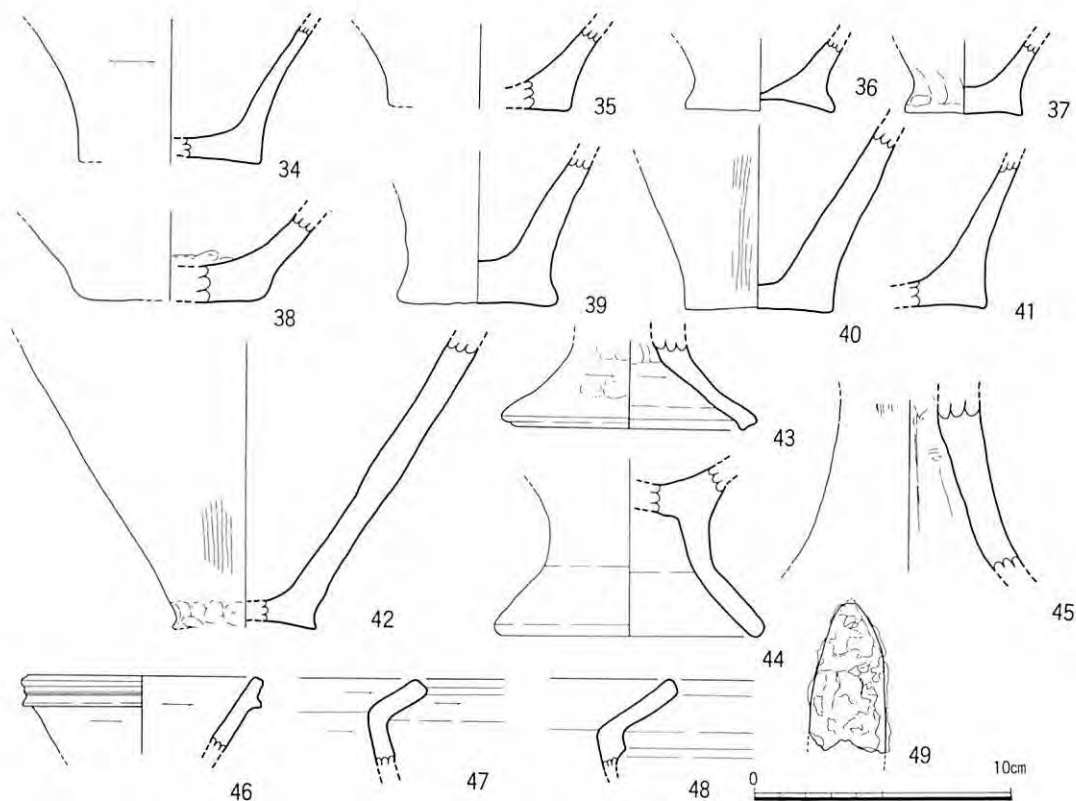
主柱穴は、方形状に4本見られる。主柱穴の径は30cm前後の楕円形である。深さは床面より50～70cmを有する。竪穴の堆積土層は大きく3層に分けられ、上部は淡黒色土の軟質層、中部は暗茶黒色の軟質層、下部は茶褐色土の軟質層となっている。また、床面北西側に焼土塊があり、ほぼ中央に長径1.3m、短径1.2mの土壙が検出されている。堆積層は何層にも分けられるが、大きく見れば、上部に暗茶褐色の硬質土層、下部に暗茶褐色土に明黄茶褐色のブロックを含んだ硬質土層が見られる。



第24図 SH03 平面・断面実測図 (1/60)



第25図 SH 0 3 出土遺物実測図① (1/3)



第26図 S H03 出土遺物実測図② (1/3)

出土遺物 (第25・26図)

遺物の出土状況は弥生中期の土器の破片が散在する程度である。器種を見れば、甕形土器の口縁、壺形土器の口縁、甕形土器及び壺形土器の底部、脚付鉢形土器の脚部、鋤先口縁の高坏等が見られる。なお石皿 (S09) が1点出土している。

(24)は、鋤先状口縁を呈する高坏である。

(25)～(29)・(47)は甕形土器であり、口縁部が「く」の字状に屈曲し、外面は縦方向に刷毛目を施し、内面はナデを施す。

(30・31)は、やや小型の壺であり、頸部から口縁部まで短く、「く」の字状に外反し、口唇がやや厚くなっている。

(32)は壺形土器の胴部であり、断面三角形の突帯が3条巡っている。

(43・44)は鉢の脚部と思われる。



写真⑥ S H03・08 全景

(45)は高坏の脚部である。

(48)は頸部に断面三角形の突帯が巡る甕形土器である。

(49)は鉄鏃である。

SH04・05・06 (第27図)

SH04・05・06は調査区東側に位置する竪穴遺構である。遺構はSH06→SH05→SH04の順で切っており、規模はそれぞれ異なっている。

SH04は、長軸4m、短軸3.2mを有する。平面形は隅丸長方形を呈する。遺構内には柱穴が多数見られるが、支柱は判断することはできない。

床面までの深さは、東西側で4cm、南側で8cmとなっており、遺存状態は良くない。

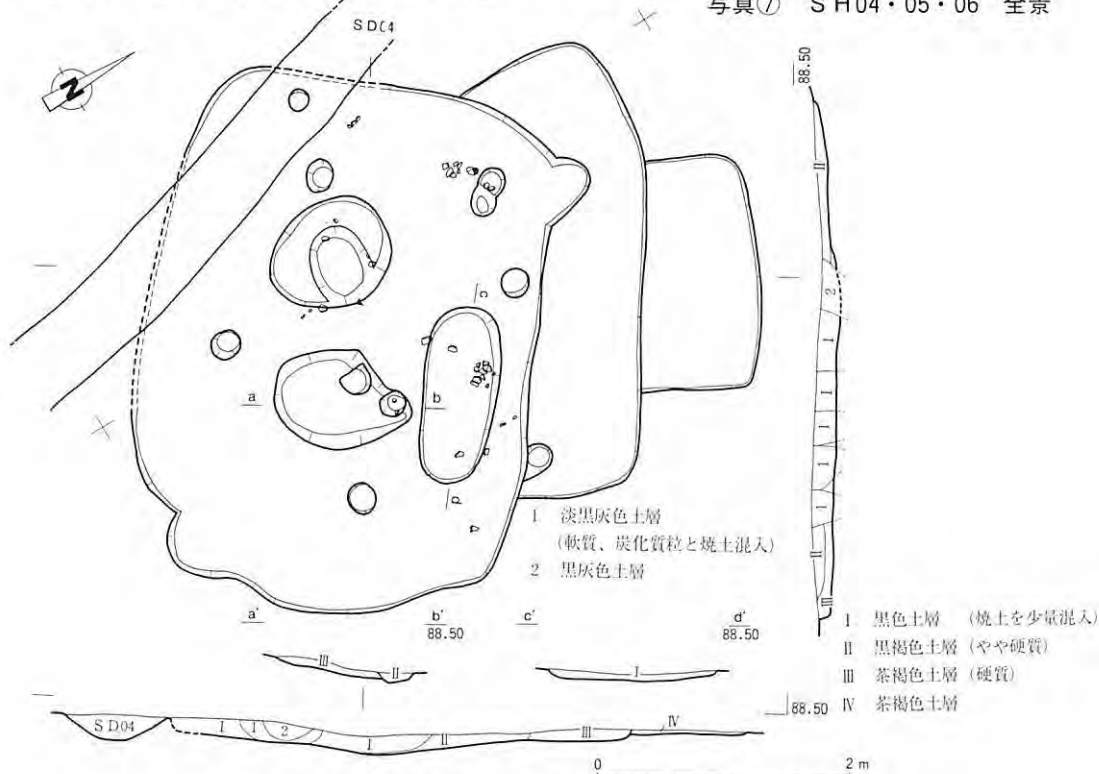
遺物は少なからず出土しているものの、時期を判断しうる土器は出土していない。

SH05は、SH04の北側に重なった状態で見られ、東西の長さは3.5mを有するが、規模や形態ははっきりしない。

SH06は、さらにSH05の北側で確認されているが、建物跡であるかは疑わしい。東西の長さは1.8m、検出面からの深さは3～4cmである。



写真⑦ SH04・05・06 全景



第27図 SH04・05・06 平面・断面実測図 (1/60)

S H 0 7 (第28図)

S H 07は調査区東側、S H 04・05・06の北側に位置する。

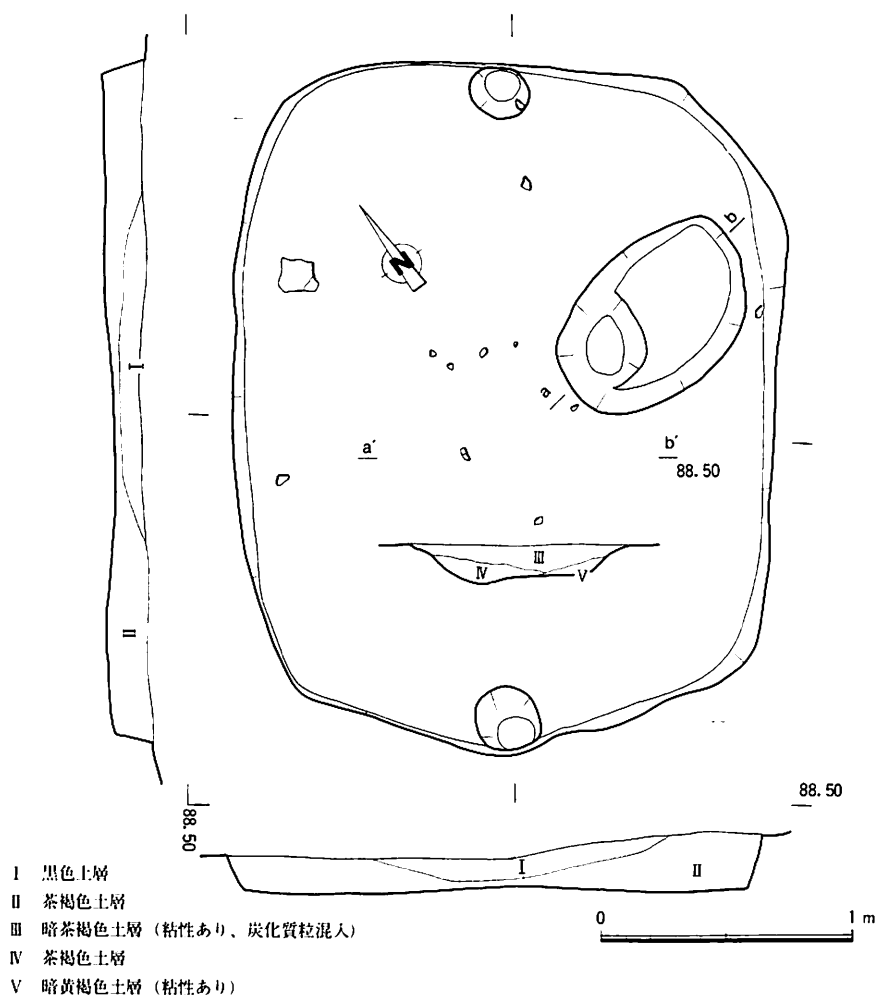
規模は、長辺2.7m、短辺2.2mを有し、平面形態は隅丸長方形を呈する。

遺構内には、北東と南西の短辺中央の壁際にそれぞれ円形の柱穴が掘られている。

柱穴の直径は23～25cm、深さは床面から27cmと45cmを有している。他に柱穴が見られないことから、2本柱の竪穴遺構がある事が判断できる。さらに、遺構内の東よりには長軸0.82m、短軸0.60mの楕円形の土坑が見られる。土層観察からこの土坑と竪穴遺構が同時期に埋まった事が窺える。

竪穴遺構の埋土は、下層に茶褐色の土層、上層に黒色土の土層の2層が堆積していた。

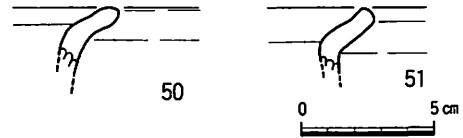
遺物には目立ったものがなく、時期は判断できなかった。



S H 0 8 （第24・29図）

S H08は調査区中央付近に位置し、S H03と切り合い関係をもった円形の竪穴住居跡である。

遺構の南側は、近年の開墾の削平により遺構は消滅しており半分のみが現存し、直径は、6.8mを有する。



第29図 S H08 出土遺物実測図（1/3）

S H 0 9 （第30図）

S H09は調査区中央よりやや西よりに位置する竪穴住居跡である。形状は、ほぼ円形を呈し、径6.3mの規模をもつ。主柱穴は、方形状に4ヶ所見られ、主柱穴は円形を呈し、直径は、20～60cm、深さは床面より、56～70cmを有する。柱間隔は、一辺1.8～2.2mである。

竪穴の掘り込みは、検出面から床面まで北側で30cm、南側で8cmであった。

壁面と接して、3ヶ所に直径90cm～110cmの円形の掘り込みが見られるが、これは後世に掘られた攪乱である。また北東部分に一段高くなったテラスが三日月状に見られる。

遺構床面中央には、長軸1.8m、短軸1.9mの楕円形を呈する土壌が見られる。

土壌の掘り形は、播鉢状の丸底を呈し、3層に分かれて堆積している。それぞれに炭化物と焼土が混入した軟らかい埋土であった。竪穴遺構の堆積層と異なっている事や、この土壌が早く埋まっている事から、灰留めに利用されたものと考えられる。

なお、竪穴遺構の埋土は大きく2層が見られ、上層に軟質の黒色土層が、下層に硬質の暗茶褐色土層が堆積している。

出土遺物（第31図）

遺物は、弥生土器の甕形土器・壺形土器・器台の他、砥石・凹石・磨石が出土している。

(52)～(54)は甕形土器の口縁で、「く」の字状に短く外反する。

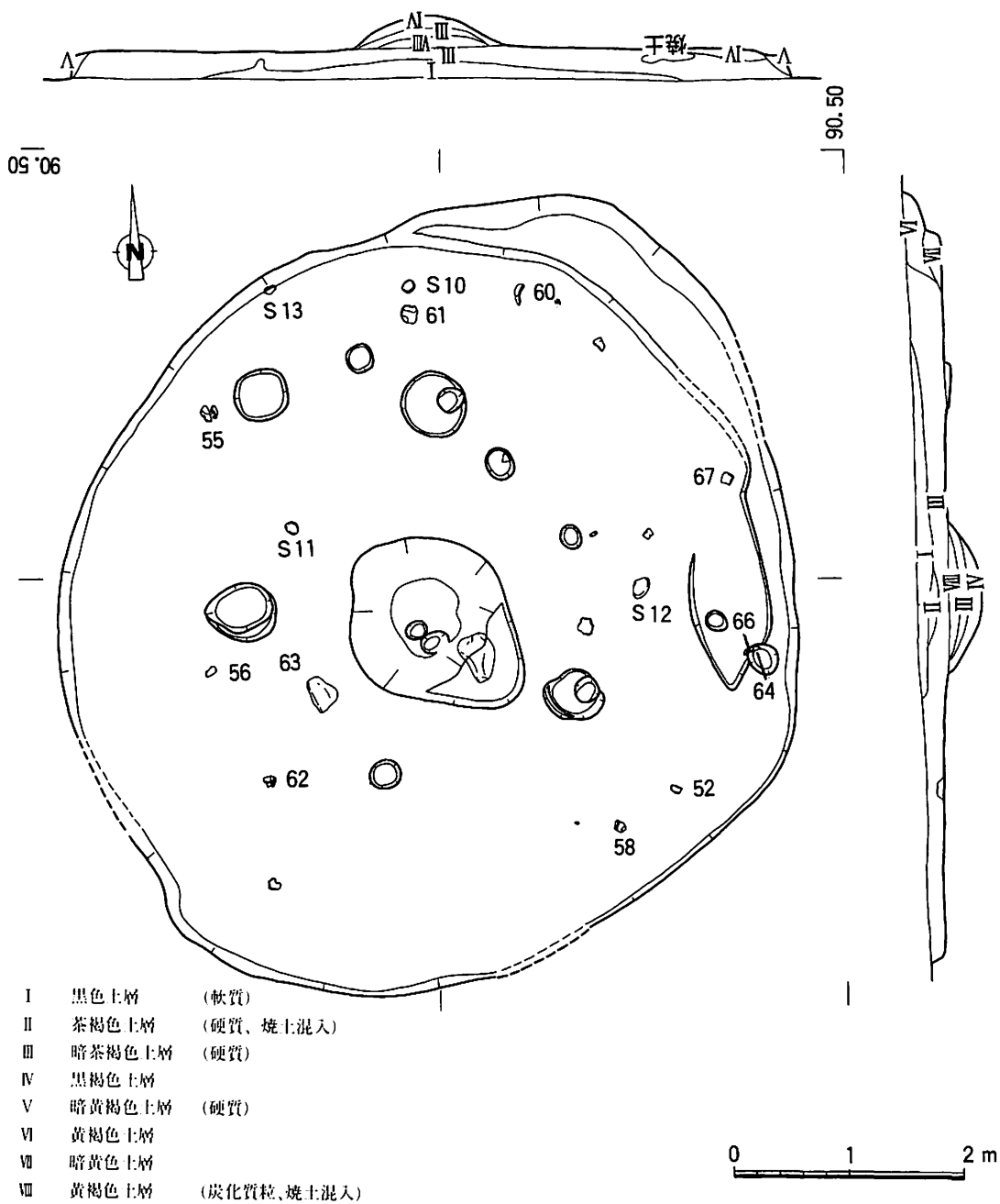
(55)の口縁部は壺形土器であろう。

(56)～(57)は鋤先状口縁を呈する高坏の坏部片である。

(58)は壺形土器の肩部であり、断面三角状の突帯が巡る。

(59)は壺形土器の底部。

(60)は甕形土器の底部。



第30図 SH09 平面・断面実測図 (1/60)

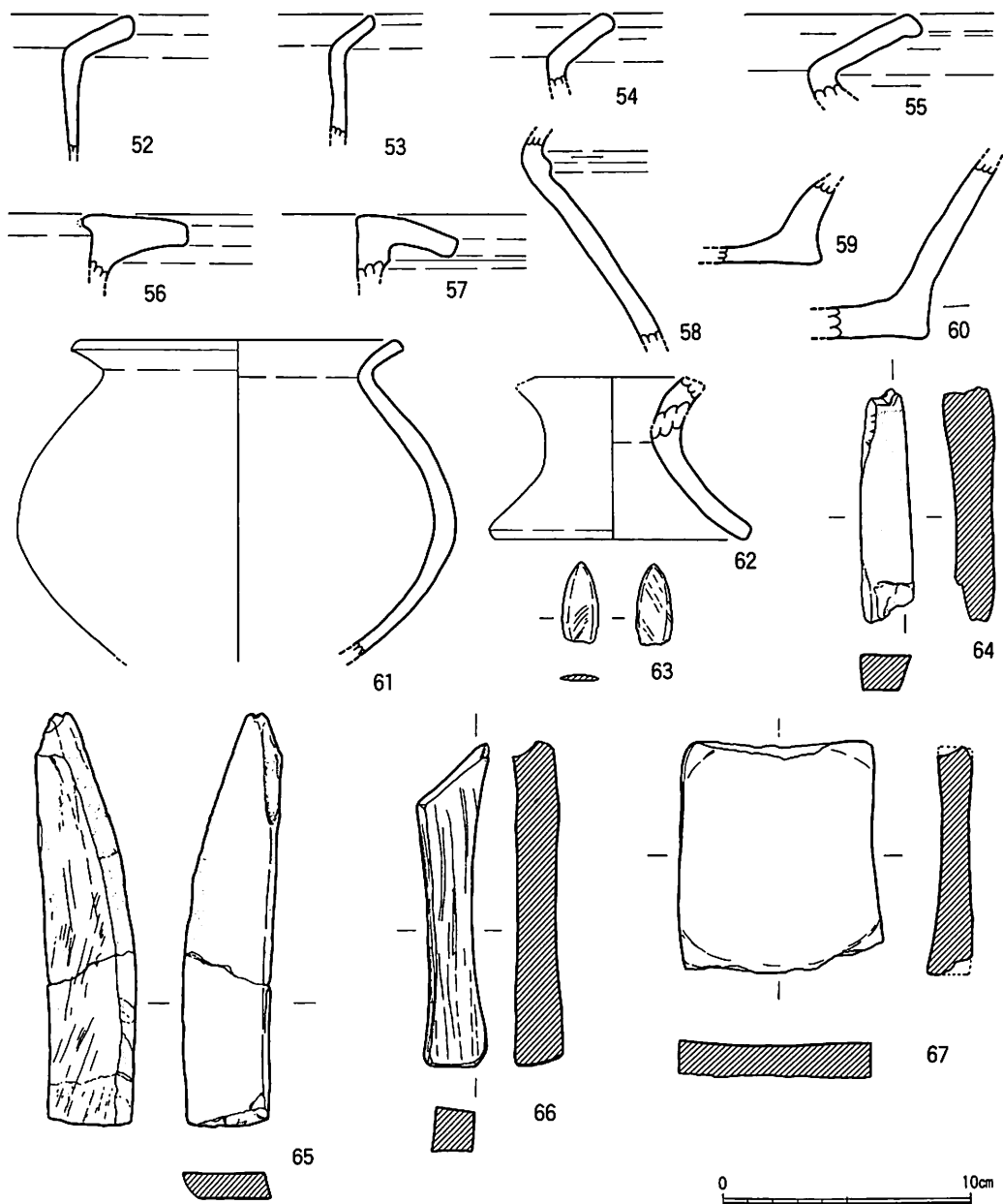
(61)は壺形土器で、底部は欠損している。

胴部中央で大きく膨らみ、口縁部は「く」の字に、短く外反する。

(62)は器台である。

(63)は側辺がややふくらむ凸基無茎式の磨製石鏃であり、長さ3.2cm程である。

(64)～(67)は砥石である。



第31図 S H09 出土遺物実測図 (1/3)

SH10 (第32図)

SH10は調査区中央の北西側に位置する竪穴住居跡である。形状は北東-南西方向に長軸4.5m、短軸4mを有する隅丸長方形である。

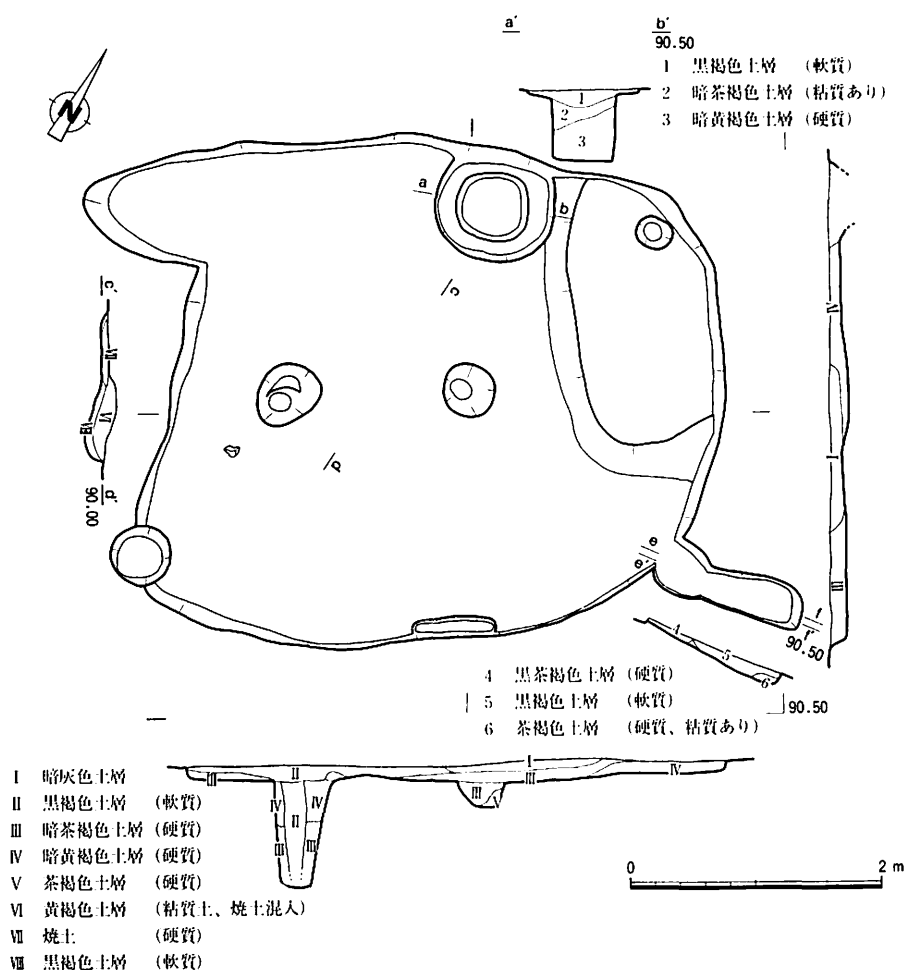
主柱穴は、中心の長軸方向に2本見られる。主柱穴の直径は40~50cm、深さは床面から74cmと90cmである。なお、補助柱穴は見られない。

竪穴の掘り込みは、検出面から床面まで10~12cm程である。床面中央には長軸1.3m、短軸0.7mの土塋が見られ、埋土に焼土が埋まっていた。

土層断面を見ると、3度に渡って焼土を埋めた事が窺える。

北東側には、長さ2m、幅1m程の一段高くなったベット状の施設が見られる。

さらに、SK54・56の土塋が、この遺構と切り合って見られる。SK54はSH10を切っている。北側の径90cmの柱穴は、SH10が埋まった後に掘り込まれている。



第32図 SH10 平面・断面実測図 (1/60)

4. 土壙 (SK)

本遺跡からは、土壙が60数基検出された。時期は弥生時代中期から後期、そして平安時代と鎌倉時代の土壙墓も確認されている。

土壙の分布には、調査区北西側、中央、東側に大きく散在している。特に注目すべき土壙は、調査区東側に位置するSK42である。平面形は長方形を呈する土壙であり、中から平安時代の土師器坏が出土しており、その中の1点に墨書で「西」と書かれたものが出土している。

SK03 (第33図)

SK03は調査区東側に位置する隅丸方形状の土壙である。土壙は、長軸95cm、短軸90cm、深さは検出面から40～45cmである。土壙の壁面の立ち上がりはきつく直線状に延びている。床面はほぼ平らで平面は円形を成す。

土壙の堆積層はレンズ状に2層分けられ、遺物もレンズ状に堆積している。なお、石皿(S01)が出土しているが、SH03から出土している石皿(S01)と接合する。

出土土器 (第34図)

(71)～(75)は甕形土器であり、口縁部が「く」の字状に屈曲し、口唇部の先端が跳ね上げ状を呈する。

(76)は壺形土器の口縁部である。肩部から口縁部にかけて大きく外反し、頸部に細い刷毛目を施し、その他はナデが見られる。

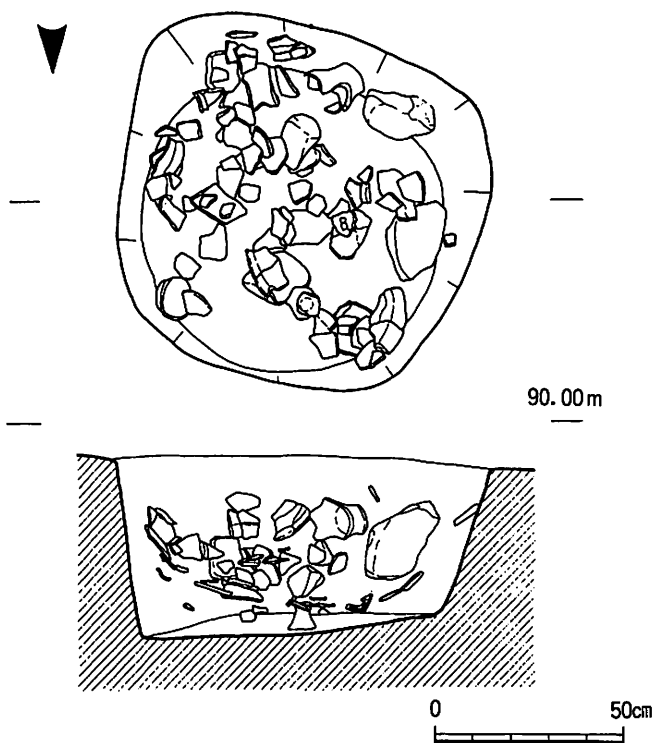
(77)は甕形土器の底部である。

(78～79)は高坏の脚部であろう。

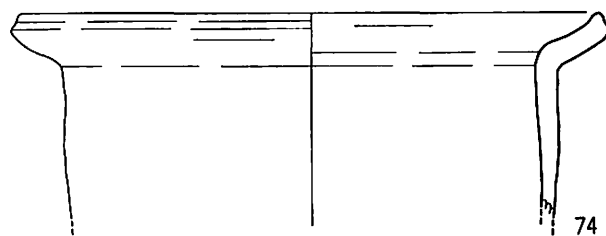
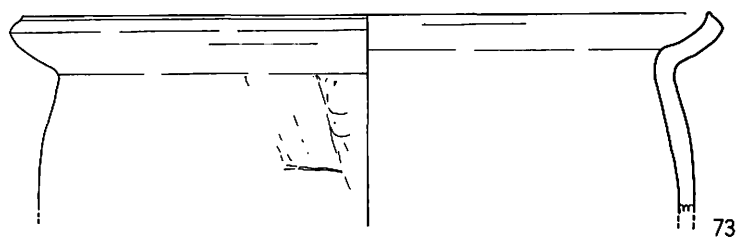
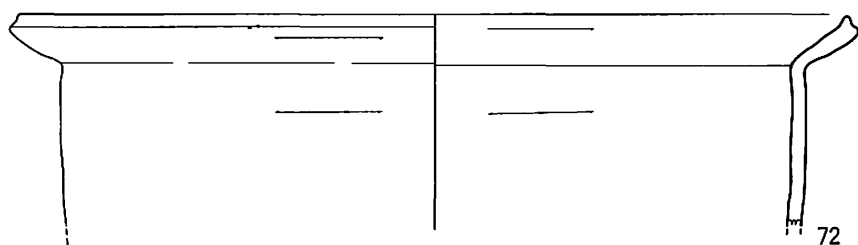
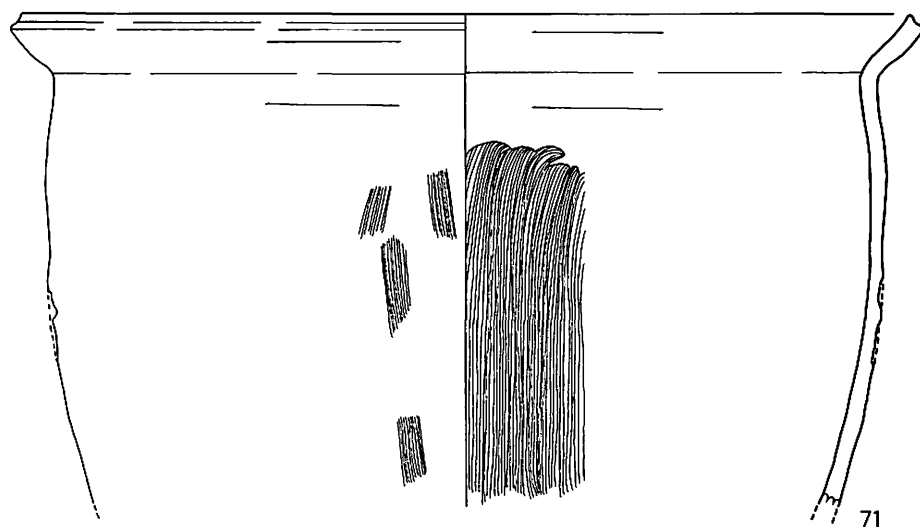
(80)は長頸壺の頸部である。口縁下に1条の断面三角条突帯を巡らす。

(81)は壺形土器の底部である。

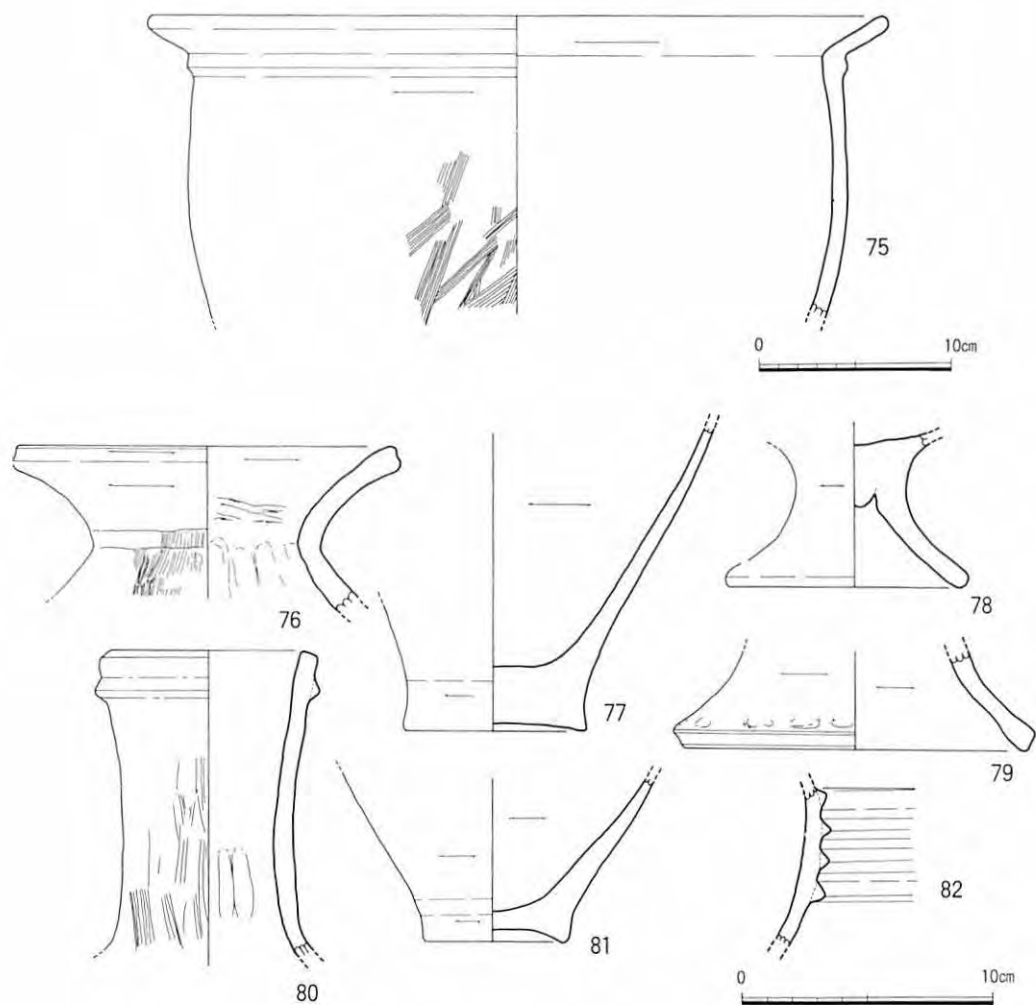
(82)は壺形土器の胴部であり、断面三角形の突帯が4条巡り、表面には丹が施されている。



第33図 SK03 平面・断面実測図 (1/20)



第34図 SK03 出土遺物実測図① (1/3)



第35図 SK03 出土遺物実測図② (1/3)



写真⑧ SK03 土層堆積状況



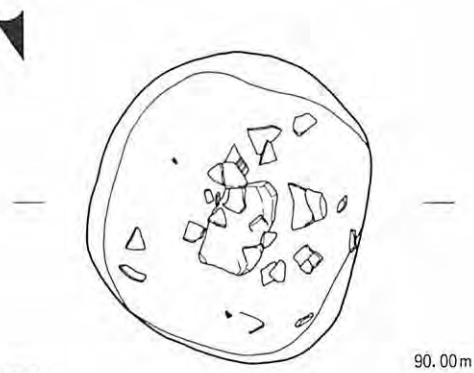
写真⑨ SK03 遺物出土状況

SK13 (第36図)

SK13は調査区中央北側に位置する隅丸方形の土坑である。

土坑は、長軸80cm、短軸70cm、深さは検出面から65cmを有する。壁面の立ち上がりはほぼ垂直になっている。床面は平らになっており、平面は隅丸方形である。

堆積土層は何層にも分かれ、レンズ状に堆積する。遺物は中層から上層に多く見られる。



出土遺物 (第37図)

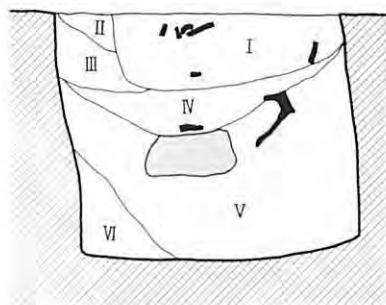
土坑からは弥生土器の甕形土器・鉢形土器・磨製石鏃が出土している。

(85)は甕形土器の口縁部であり、口縁が「く」の字状に外反する。

(86)は平底の底部片である。

(87)は鉢形土器であり、外面は縦方向に刷毛目が見られ、内面はヘラ工具による削りが見られる。

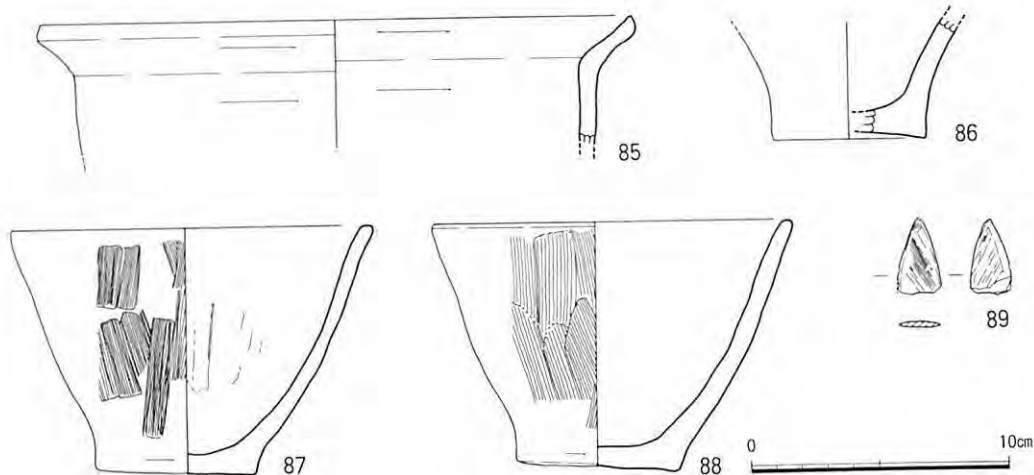
(89)は平基式の磨製石鏃で、長さ2.8cmである。



- I 黒褐色土層 (粘質、炭化物混入)
- II 黄色土層 (粘質)
- III 暗黒褐色土層
- IV 黄褐色土層 (粘質)
- V 黒色土層 (粘質、炭化物混入)
- VI 暗黒色土層



第36図 SK13 平面・断面実測図 (1/20)

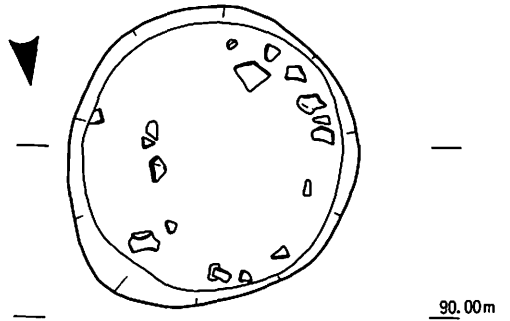


第37図 SK13 出土遺物実測図 (1/3)

SK14 (第38図)

SK14は調査区中央北側に位置する円形状の土塋である。

土塋は、直径80cmを有する。壁面の立ち上がりはやや内傾しながら直線状に延びる。堆積土層は4層に分けられ、レンズ状に堆積している。土器は中層から下層にかけて弥生土器が混入している。

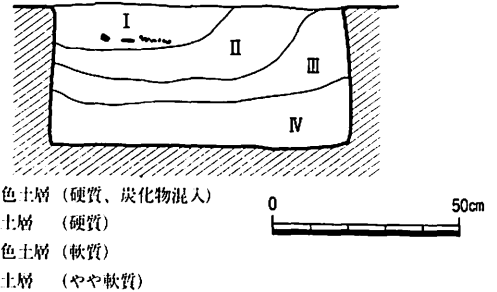


出土遺物 (第39図)

ほとんど破片であり、唯一2点のみ図化することができた。

(90)は「く」の字状に外反する口縁部である。

(91)は平底の底部片である。

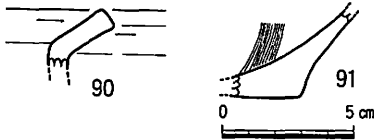


I 暗黒褐色土層 (硬質、炭化物混入)

II 黄褐色土層 (硬質)

III 暗茶褐色土層 (軟質)

IV 黒褐色土層 (やや軟質)



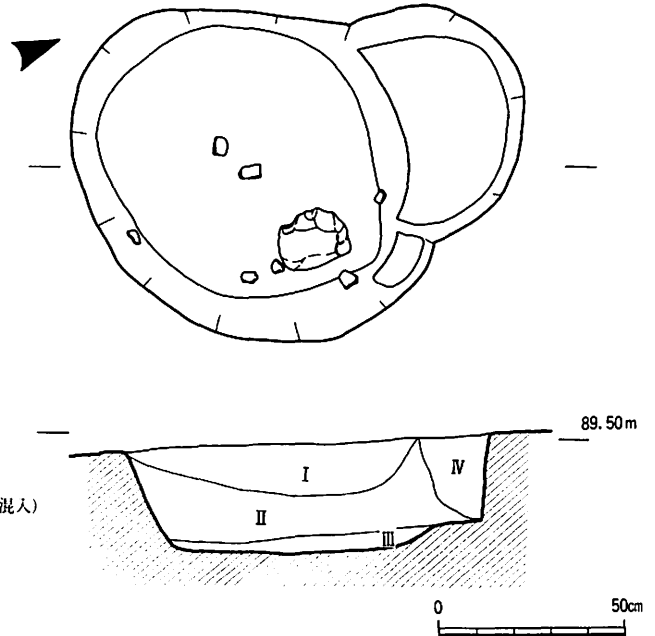
第38図 SK14 平面・断面実測図 (1/20)

第39図 SK14 出土遺物実測図 (1/3)

SK15 (第40図)

SK15は調査区中央北側のSK14と近接する土塋である。

土塋の平面は不整形をなしているが、これは他の遺構と切り合っているためであり、切り合っているが、もとは楕円形を成していたものである。長軸は1m、短軸は80cm、深さは検出面から30cmを有する。遺構内からは、土器片が出土しているが特に目立ったものは見当たらない。



I 暗黄褐色土層 (硬質、黄色粘土混入)

II 黒褐色土層 (硬質)

III 暗茶褐色土層 (粘質)

IV 黄褐色土層

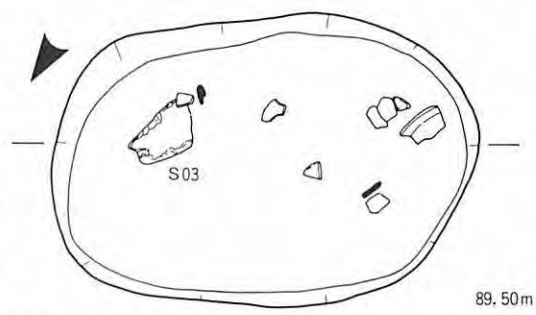
第40図 SK15 平面・断面実測図 (1/20)

S K 2 3 (第41図)

S K 23は調査区中央よりやや東に位置する隅丸長方形の土坑である。

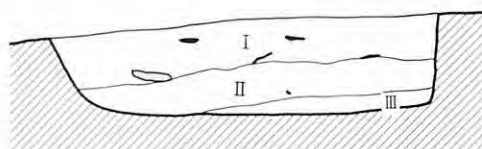
土坑は、長軸110cm、短軸75cm、深さは検出面より20cmを有する。

堆積土は、2層に分けられ、炭が各所に混入する。土器は上層に多く見られ、弥生時代の高坏等が出土している。またI層から打製石鍬(S 03)が出土している。



出土遺物 (第42図)

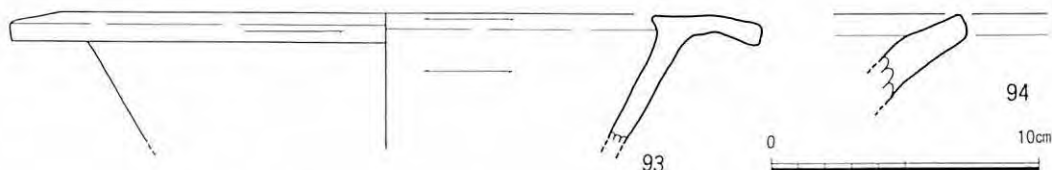
(93)は鋤先状口縁の高坏である。



- I 黒褐色土層 (軟質)
- II 黒色土層 (軟質)
- III (地山)



第41図 S K 23 平面・断面実測図 (1 / 20)



第42図 S K 23 出土遺物実測図 (1 / 3)



写真⑩ S K 23 遺物出土状況

S K 2 8（第43図）

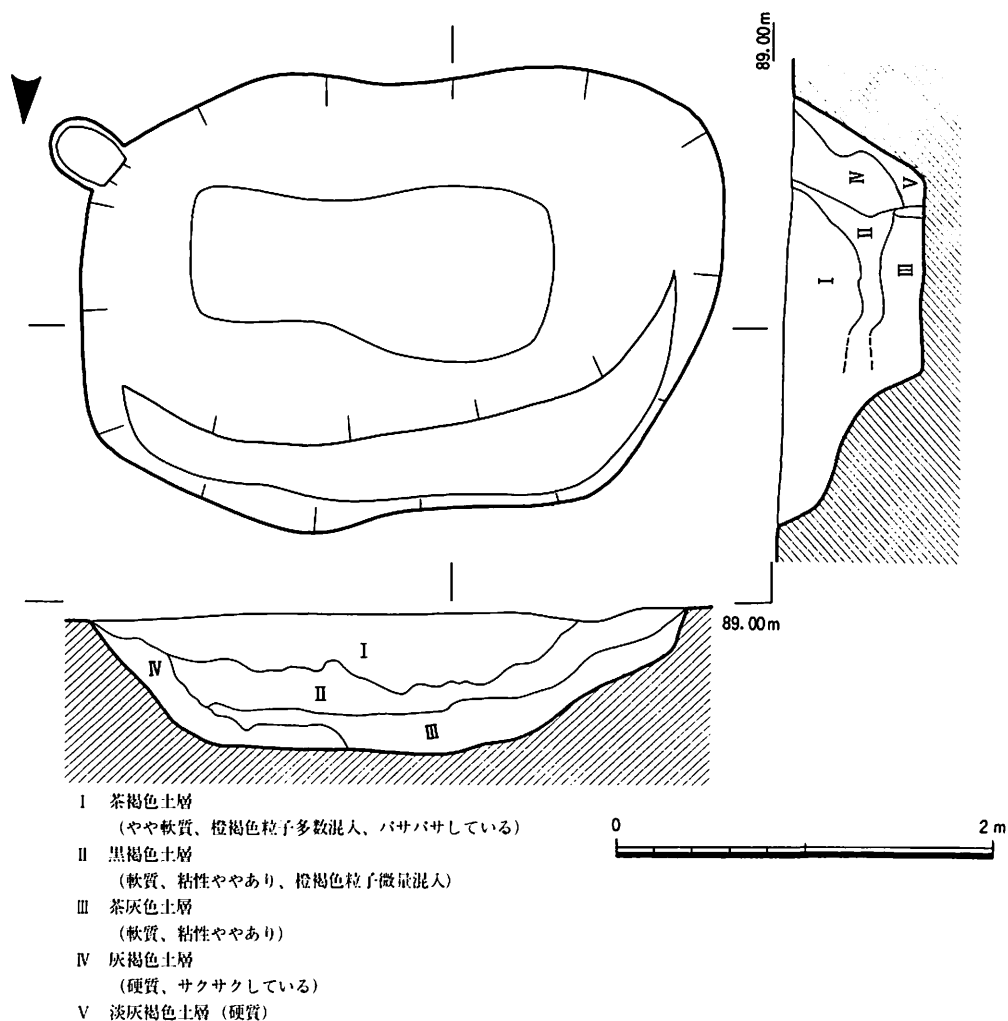
S K 28は調査区中央に位置する隅丸長方形の大型の土塋である。

土塋は長軸を東西方向に3.4m、短軸を南北方向に2.3mを有する。深さは検出面より70cmを有する。

土塋内の北側の壁面には三日月状のテラスが見られ、南側壁面にはテラスが見られず、少しきつい角度で壁面が立ち上がっている。

堆積土層は4層に分けられ、壁面に張り付くように堅い層（Ⅴ層）が取り巻いている。床面部分にはやや粘質を有する層（Ⅲ層）が覆っている。中層（Ⅱ層）と上層（Ⅰ層）には、土が焼けてバサバサになったような小粒が混入している。

土塋からは遺物が1点も出土しておらず時期は不明である。また、遺構の性格についても、落とし穴に見られる柱穴痕が見当たらないこと、墓としては土層観察から痕跡が窺えないことから判断することはできなかった。



第43図 S K 28 平面・断面実測図（1/40）

SK38 (第44図)

SK38は調査区中央東側に位置する隅丸長形状の土塋である。

土塋は長軸を南北方向に1.75m、短軸を東西方向に1.3mを有する。深さは、検出面より30cmで、壁面の立ち上がりはややきつい角度で延びている。

堆積土層は2層に分けられ、上層には黒褐色層が見られ多くの土器がこの層に混在している。そして下層の茶褐色層には土器が混入していない。

出土遺物 (第45・46図)

上層から十数点におよぶ弥生土器が出土しており、器種は甕形土器・壺形土器・高坏・鉢形土器・砥石等が見られる。

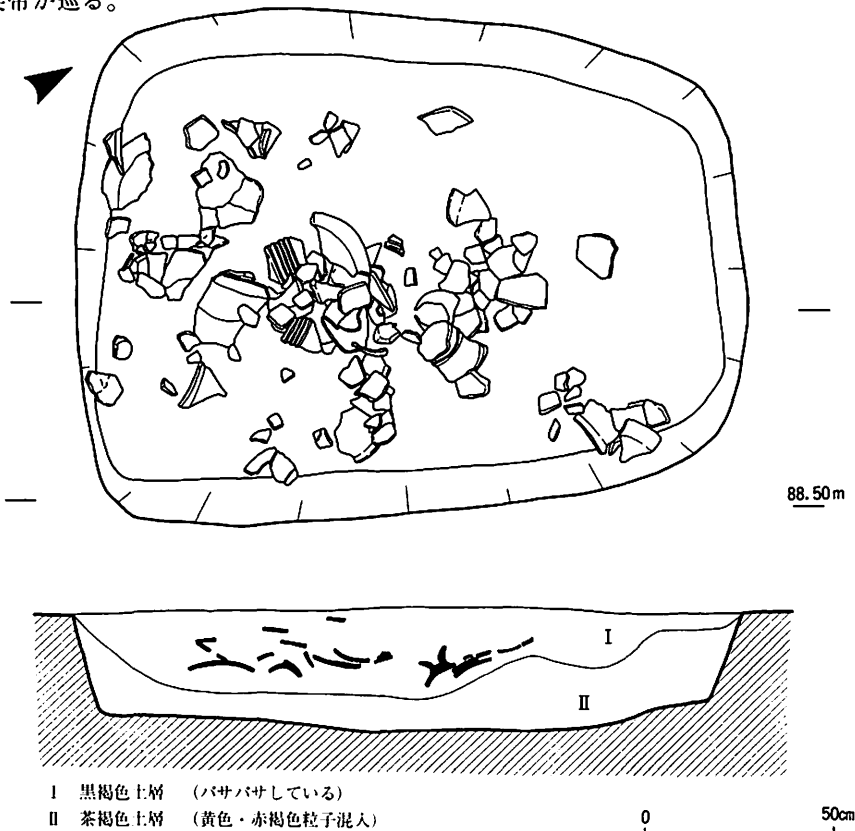
(95~96)は甕形土器の胴部から口縁部にかけてのものである。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部での跳ね上げは見られない。

(97)は甕形土器であり、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部が跳ね上がり状を呈する。

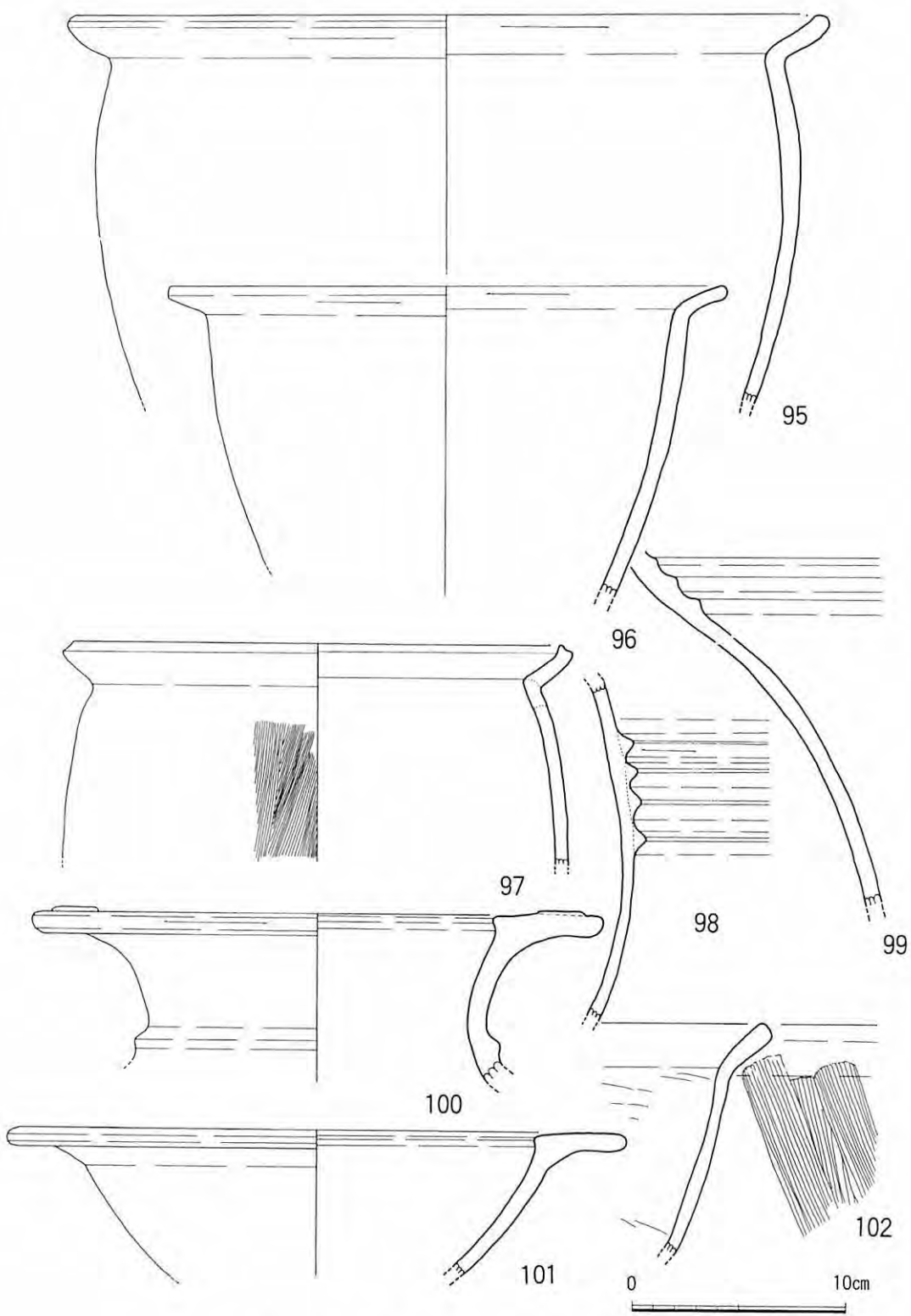
(98)は壺形土器の胴部であり、4条の突帯が巡る。

(99)は壺形土器の肩部から胴部にかけてのもので、肩部に3条の突帯が残存している。

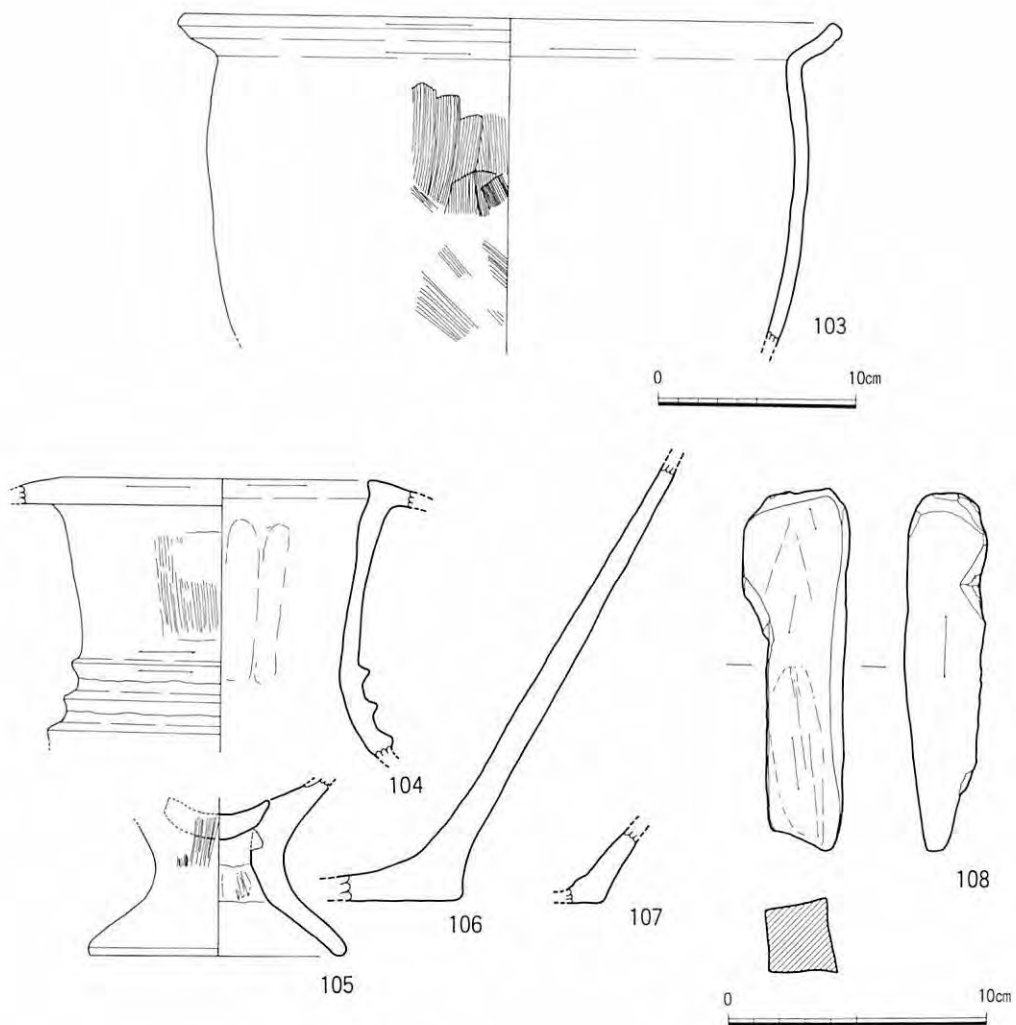
(100)は壺形土器の口縁部である。鋤先状口縁を呈し、円形貼付文を持っている。頸部には断面三角形の突帯が巡る。



第44図 SK38 平面・断面実測図 (1/20)



第45図 SK38 出土遺物実測図① (1/3)



第46図 SK 38 出土遺物実測図② (1/3)

(101)は高坏であり、鋤先状口縁を呈する。

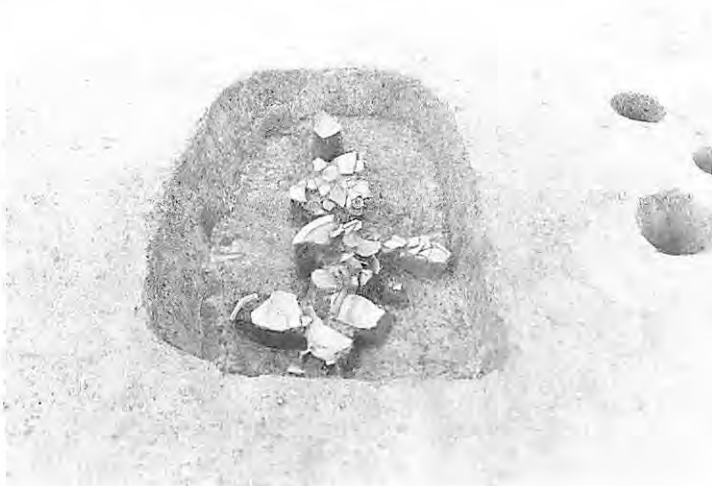
(102)は鉢形土器であり、口縁部はゆるく外反する。

(104)は壺形土器の頸部から口縁部にかけてのものである。垂下口縁を呈し、頸部に断面三角形の突帯が3条残存する。

(105)は脚付鉢である。

(106)は甕形土器の底部である。

(108)は砥石である。



写真⑪ SK 38 遺物出土状況

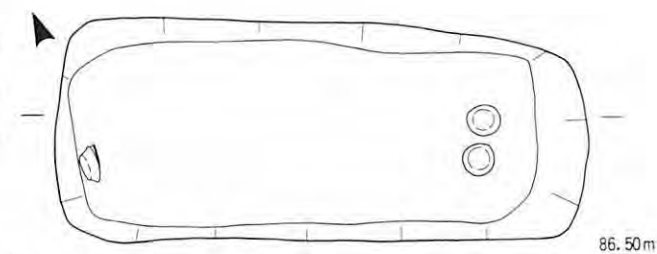
S K 4 2 （第47図）

S K 42は調査区東端に位置する隅丸長方形の土塋である。

土塋は、長軸をほぼ東西方向にとり、長さ2.0mを有し、短軸は南北に長さ0.8mを有する。深さは検出面より、東側で35cm、西側で40cmを有する。床面はほぼ平らに仕上げられ、平面も隅丸長方形を呈する。床面からの立ち上がりは東側でやや緩く、西側ではきつい傾斜で延びている。

堆積土層は3層に分けられ、上層には黒褐色、中層には暗茶褐色層、下層には茶褐色が見られる。堆積層の厚さはほぼ三等分されている。遺構からは土師器の坏の完形品が4点出土しており、いずれも下層に位置する。坏の(109)と(111)の出土地点は東側の床面直上に俯せ並列して置かれている。一方、坏の(110)と(112)は西側の壁際に2枚重ねて立った状態で出土している。下に被された(110)の坏の外周底部には墨書で『西』と書かれている。

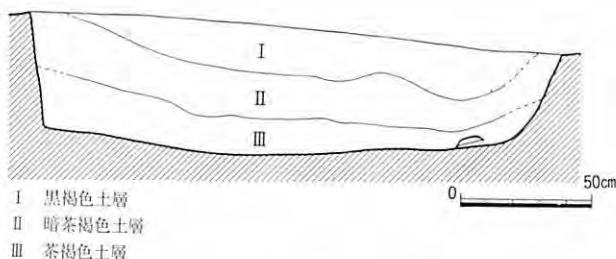
以上のように土塋の規模が身長ほどに及ぶ事、土師器が完全な状態で出土、供献された状態を示している事、墨書で『西』と書かれた坏が埋葬思想とつながる事から土塋墓であることは間違いなからう。



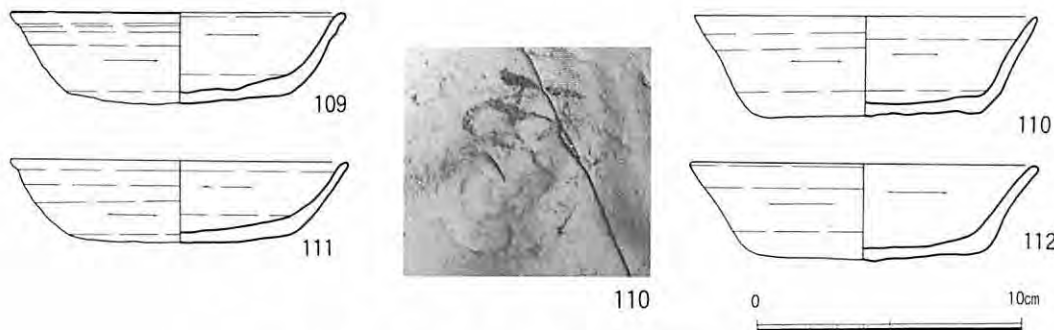
出土遺物（第48図）

(109)と(111)の坏は底部がやや丸味を帯び、口縁部の立ち上がりが緩やかであり、口唇部においてやや外反している。

(110)と(112)の坏は底部が平らになっており、立ち上がりは直線的に延びて口唇部に至っている。



第47図 S K 42 平面・断面実測図（1/30）



第48図 S K 42 出土遺物実測図（1/3）

S K 4 7 (第49図)

S K 47は調査区中央東側に位置し、方形周溝遺構とS D 04と切り合った土壙である。切り合い関係は古い方から方形周溝遺構→S K 47→S D 04の順である。

土壙は、長軸を東西方向に1.1m、短軸を南北方向に1 mを有し、平面は隅丸方形を呈する。床面はほぼ平らになっており、壁面の立ち上がりはすこし緩やかに成っている。

堆積土層は大きく3層に分けられ、このうち、土器は最下部より出土している。

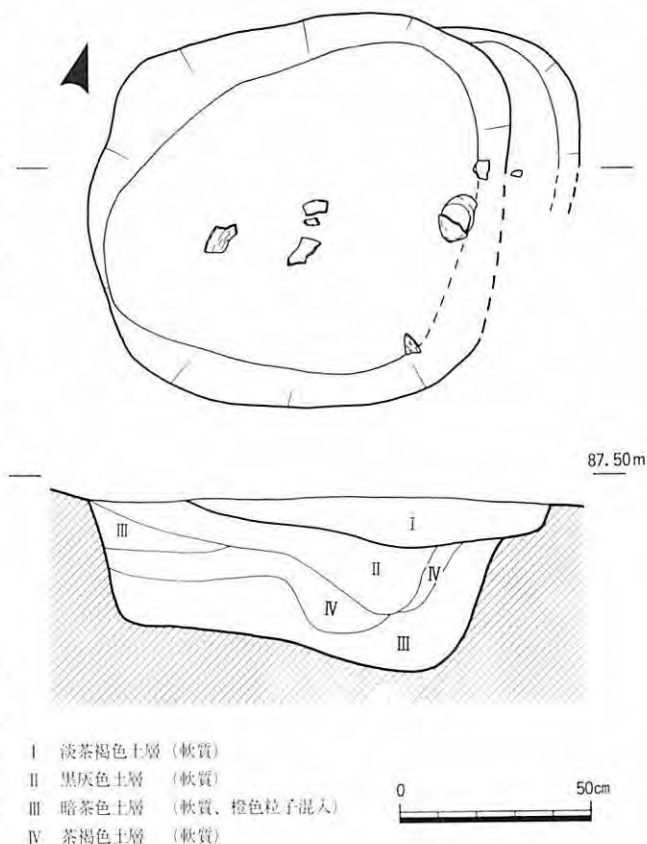
土壙の性格は、形態的特徴や供献土器と見られる坏(115)から土壙墓と推定される。

出土遺物 (第50図)

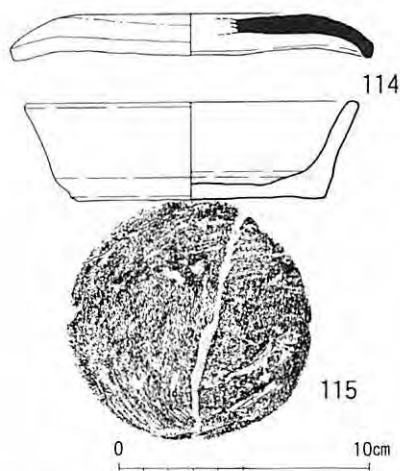
土壙は、方形周溝遺構を掘り下げて造られていることから、この時期の須恵器の蓋(114)やその他の須恵器片が埋設時に混在している。(115)の坏は床面直上に俯せになった状態で出土しており、この土器が土壙に伴うものである。底部は糸切り後、手持ちでナデ消しを行っている。



写真⑫ S K 47 遺物出土状況



第49図 S K 47 平面・断面実測図 (1 / 20)



第50図 S K 47 出土遺物実測図 (1 / 3)

S K 4 8 (第51図)

S K 48は調査区の北西側に位置する円形状の土坑である。

土坑の直径は1.25～1.3mを有し、深さは検出面から50cmである。

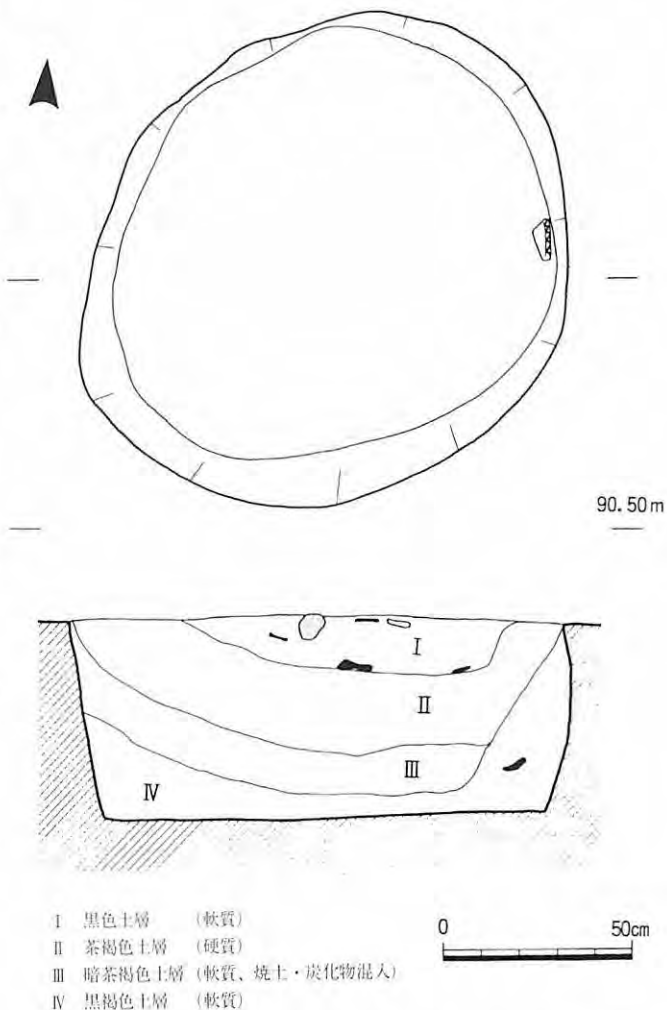
床面はほぼ平らになっており、床面の形状は円形を呈する。壁面の立ち上がりはきつく垂直に近い。

堆積土層は4層に分けられ、最下層より(116)の土器が出土している。

出土遺物 (第52図)

(116)は壺形土器の口縁部である。口縁部には円形の貼文を有し、口唇部には山形文が巡る。

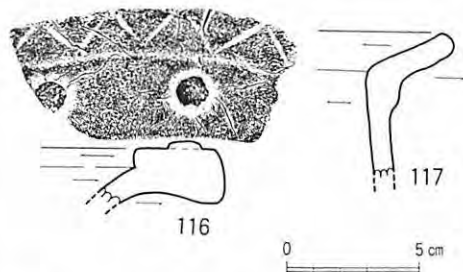
(117)は甕形土器の口縁部であり、「く」の字状に外反し、頸部に1条の突帯が巡る。



第51図 S K 48 平面・断面実測図 (1/20)



写真⑬ S K 48 遺物出土状況



第52図 S K 48 出土遺物実測図 (1/3)

S K 4 9（第53図）

S K 49は調査区西側に位置する隅丸方形形状の土坑である。

土坑は長軸1.2m、短軸1.05mを有し、深さは検出面より60cmである。

床面はほぼ平らに為し、壁面の立ち上がりは垂直あるいはやや内傾しながら延びている。

堆積土層は幾重にも分かれ、人為的に埋めたような状態であった。土器は下層から上層まで多量に破棄した状態で混在している。なお、V層から敲石（S04）と石皿（S06）が出土している。

出土遺物（第54・55図）

(118)と(119)は甕形土器の口縁部であり、「く」の字状に外反し口唇部に至る。頸部には1条の突帯が巡る。

(120)は壺形土器の口縁部であり、鋤先状口縁に円形の貼文を持つ。

(121)は壺形土器の口縁部であり、口縁部には3個のボタン状の貼文を1単位に円弧状に巡る。さらに側面の口唇部には山形文が刻まれている。

(122～125)は甕形土器であり、「く」の字状に口縁部が外反する。頸部には突帯は見られない。

(126)は鉢形土器であろう。

(127)は甕形土器であり、口縁部はきつく外反する。

(128)は「L」字状の口縁に刻目を持ち、その下に2状の刻目突帯が巡る。

(129)は刻目突帯が巡る下城式の甕形土器である。

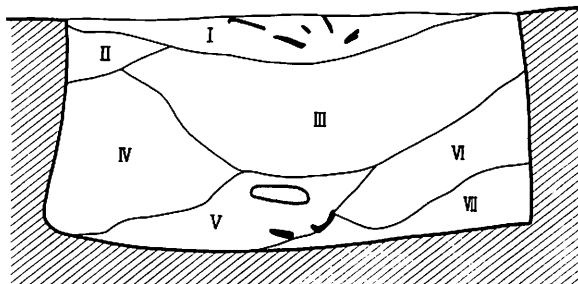
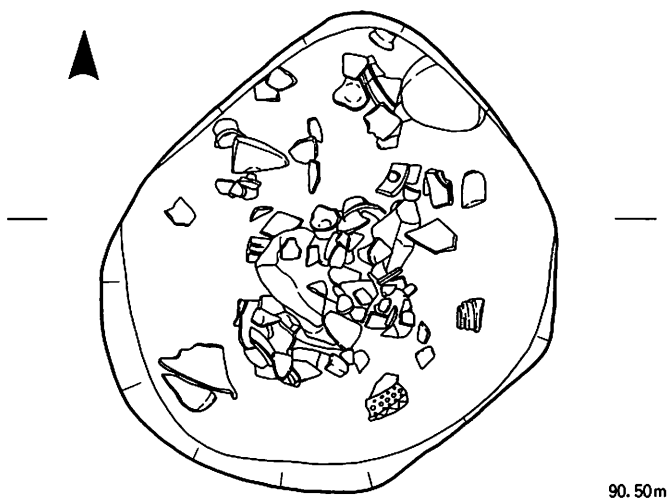
(130～131)は壺形土器の肩部であり、三角形突帯が巡る。

(132～133・135・136)は脚付鉢であろう。

(134)は長頸壺であり、口唇部に断面「M」字突帯が巡る。

(137・138・141・142)は壺形土器の底部であろう。

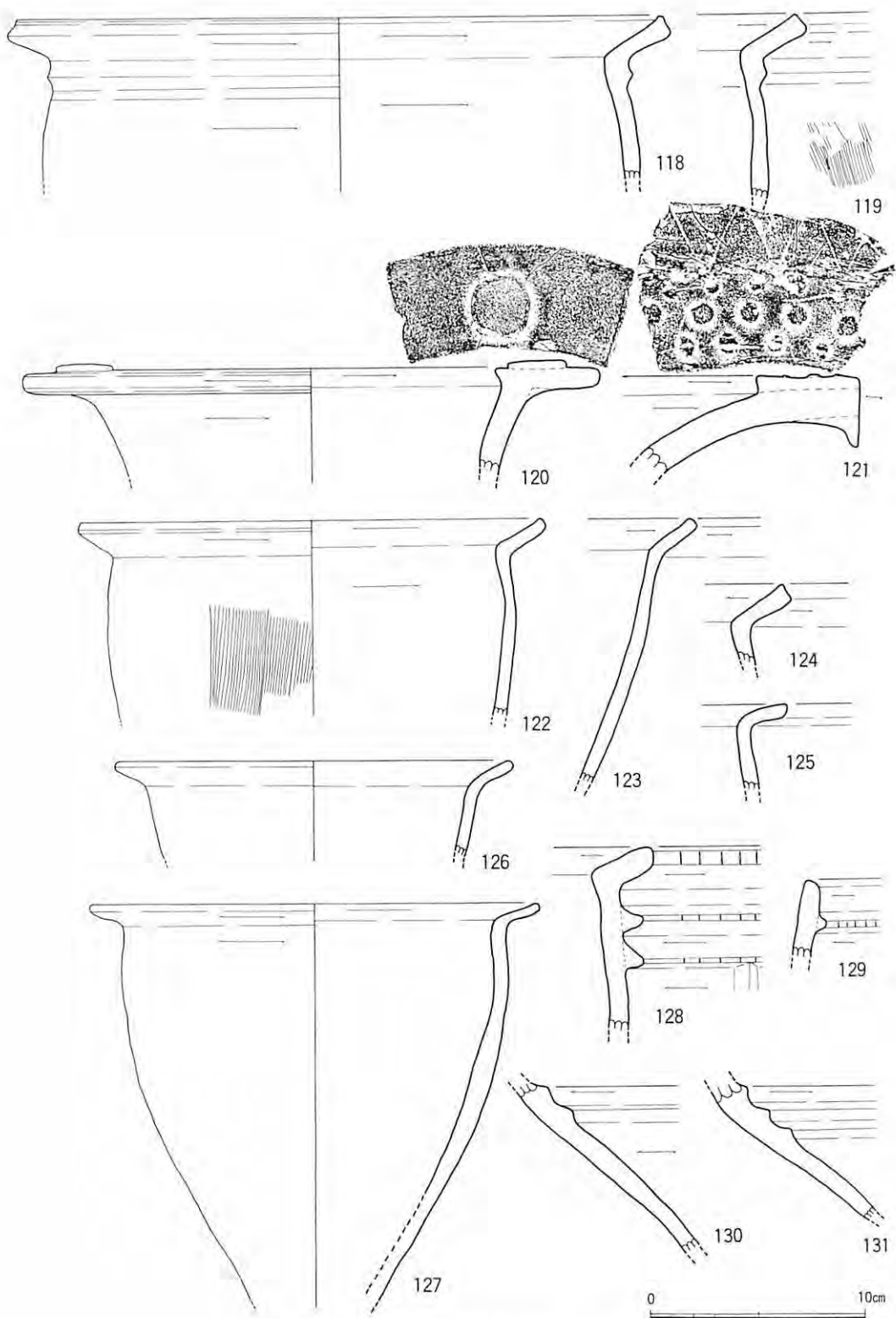
(139・140)は甕形土器の底部であろう。



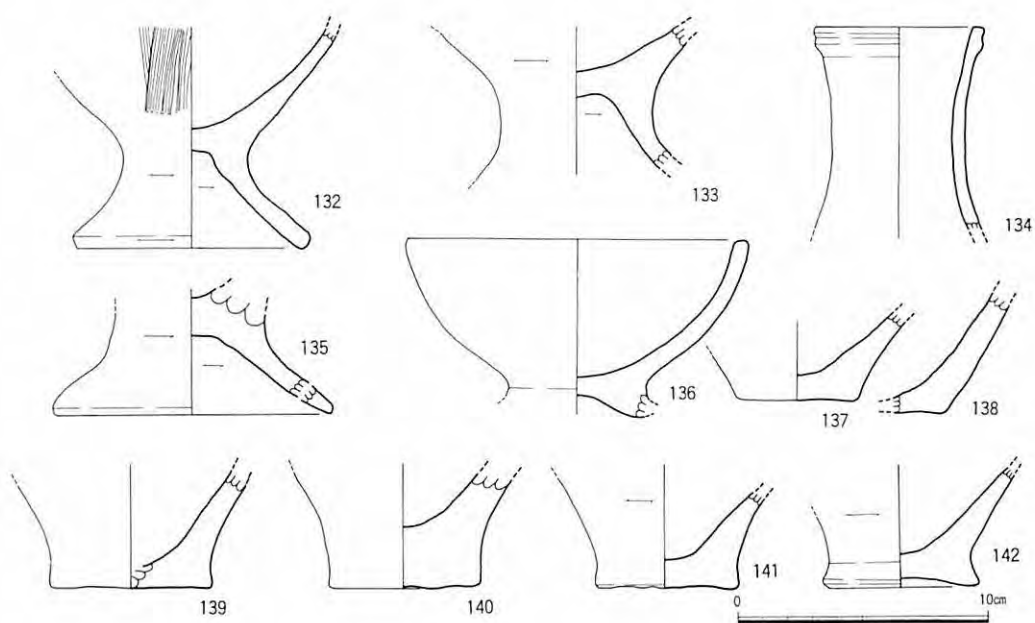
- I 黒褐色土層（軟質、焼土混入）
- II 茶褐色土層（硬質）
- III 暗茶褐色土層（軟質、焼土混入）
- IV 茶褐色土層（軟質）
- V 暗黄色土層（粘質土）
- VI 暗茶褐色土層
- VII 暗黄褐色土層（粘質土）



第53図 S K 49 平面・断面実測図（1/20）



第54図 SK 49 出土遺物実測図① (1/3)



第55図 S K 49 出土遺物実測図② (1 / 3)



写真⑭ S K 49 遺物出土状況

SK50 (第56図)

SK50は調査区西側に位置する土坑である。

土坑は東南部分が他の土坑に切られている。遺構の平面形態はほぼ円形状を呈し、直径60cm、深さは検出面より10～20cmを有する。

堆積土層は1層のみで、甕形土器が出土している。

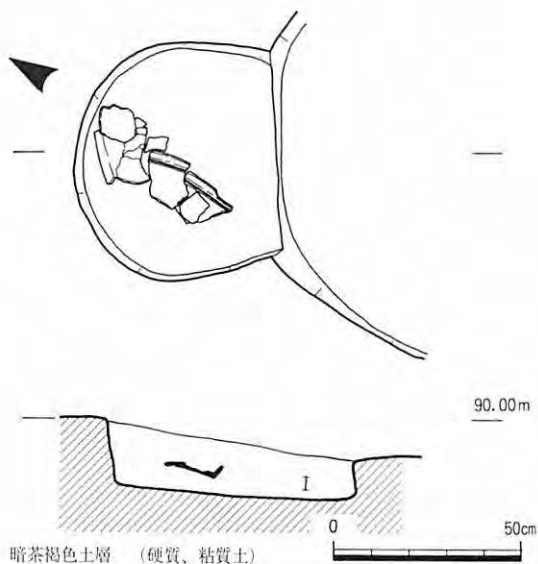
出土遺物 (第57図)

(143)は甕形土器であり、口縁部は「く」の字状に外反する。頸部には1条の三角形突帯が巡る。

(144)は甕形土器であり、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部においてわずかに跳ね上げ状を呈する。

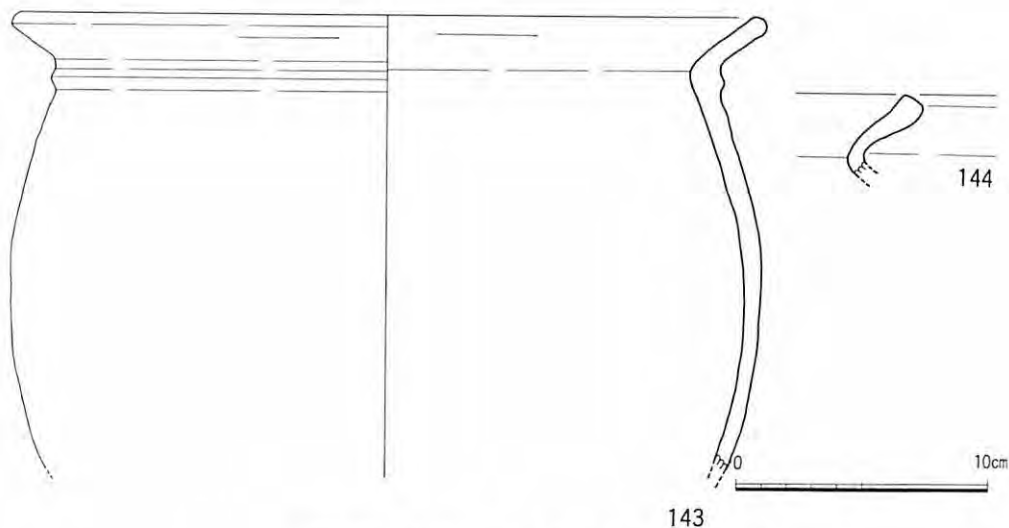


写真⑮ 遺物出土状況



I 暗茶褐色土層 (硬質、粘質土)

第56図 SK50 平面・断面実測図 (1/20)



第57図 SK50 出土遺物実測図 (1/3)

S K 5 1 (第58図)

S K 51は調査区西側に位置し、S K 50と近接した土壙である。

遺構の北西側は他の土壙によって切られている。さらに中心には南北方向に走る幅80cm、深さ15cmの溝が上部を切っている。

土壙は長軸を1.7m、短軸を1.0mを有し、平面形態は楕円形を呈する。深さは30cmを有し、壁面の立ち上がりは緩やかである。

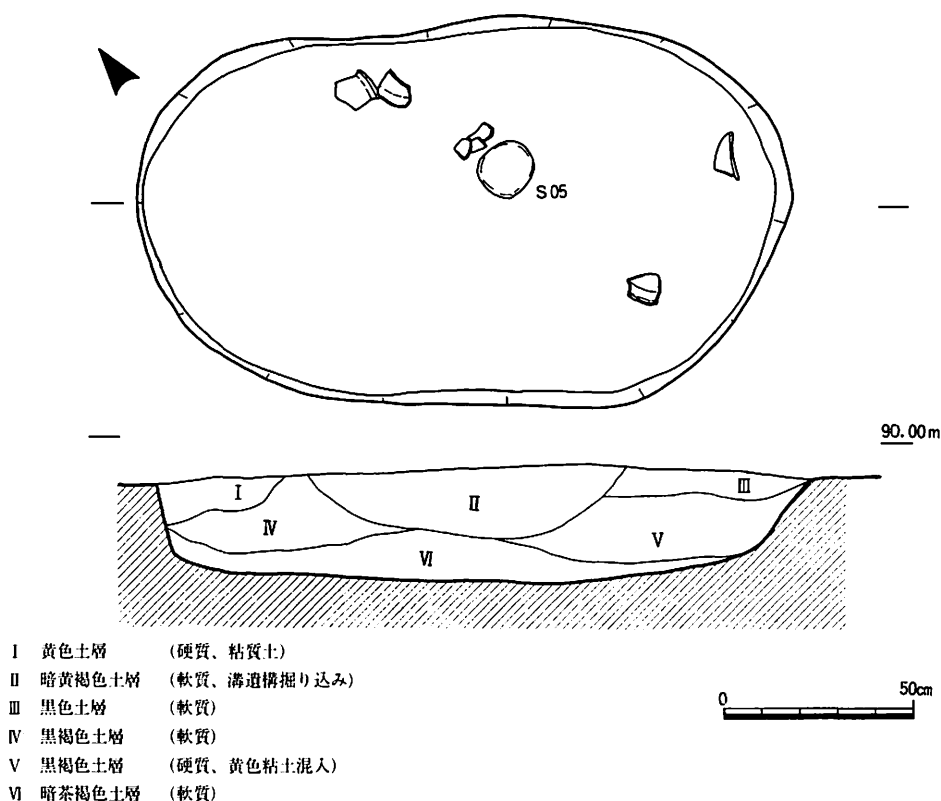
堆積土層は大きく3層に分けられ、中央上部には溝状遺構の埋土が「U」字状に見られる。

遺物は中層から下層にかけて弥生土器の甕形土器・高坏・磨石 (S 05) が混在する。

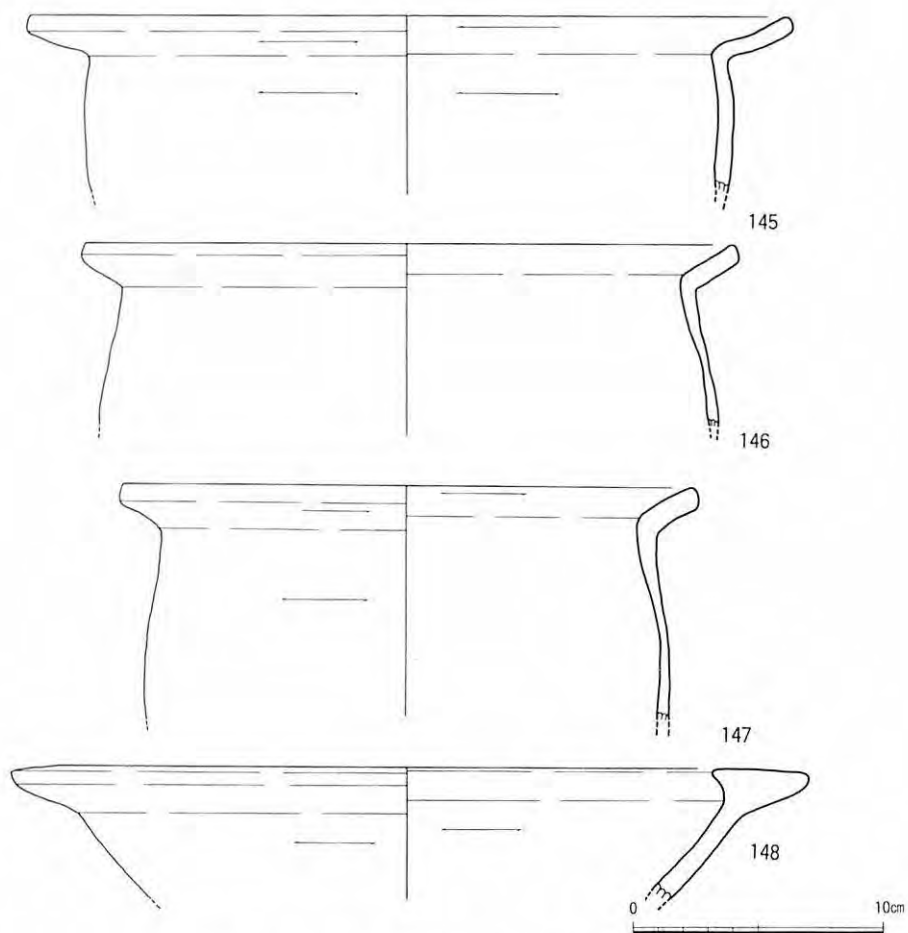
出土遺物 (第59図)

(145～147)は甕形土器であり、口縁部は「く」の字状に外反する。

(148)は高坏の口縁部分であり、鋤先状の口縁を呈する。



第58図 S K 51 平面・断面実測図 (1/20)



第59図 SK 51 出土遺物実測図 (1/3)



写真⑩ SK 51 遺物出土状況 (東より)

S K 5 2 (第60図)

S K 52は調査区西側に位置する隅丸方形状の土壇である。

土壇は、長軸を1.1m、短軸0.9mを有し、深さは検出面から20cmである。

床面は平らになっており、壁面の立ち上がりは垂直である。

堆積土層は1層のみであり上面に焼土の層が見られる程度である。

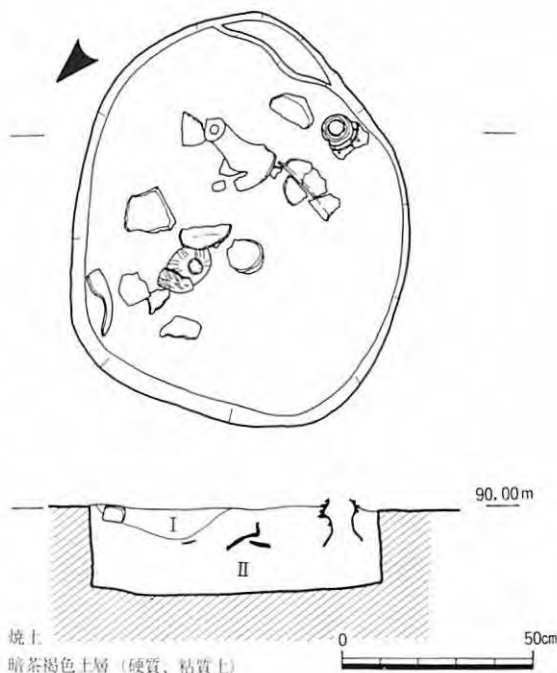
出土遺物 (第61図)

遺物の器種には弥生時代の壺形土器・高坏・器台・蓋・甕形土器等が見られる。

(149)は小型の壺形土器であり、頸部がかなり縮まり、口縁部は「く」の字状に短く外反する。

(150)は高坏の脚部であり、体部との境界に三角突帯が巡る。脚部はラッパ状に開いている。体部の部分はS K 53から出土したもので、接合することができた。

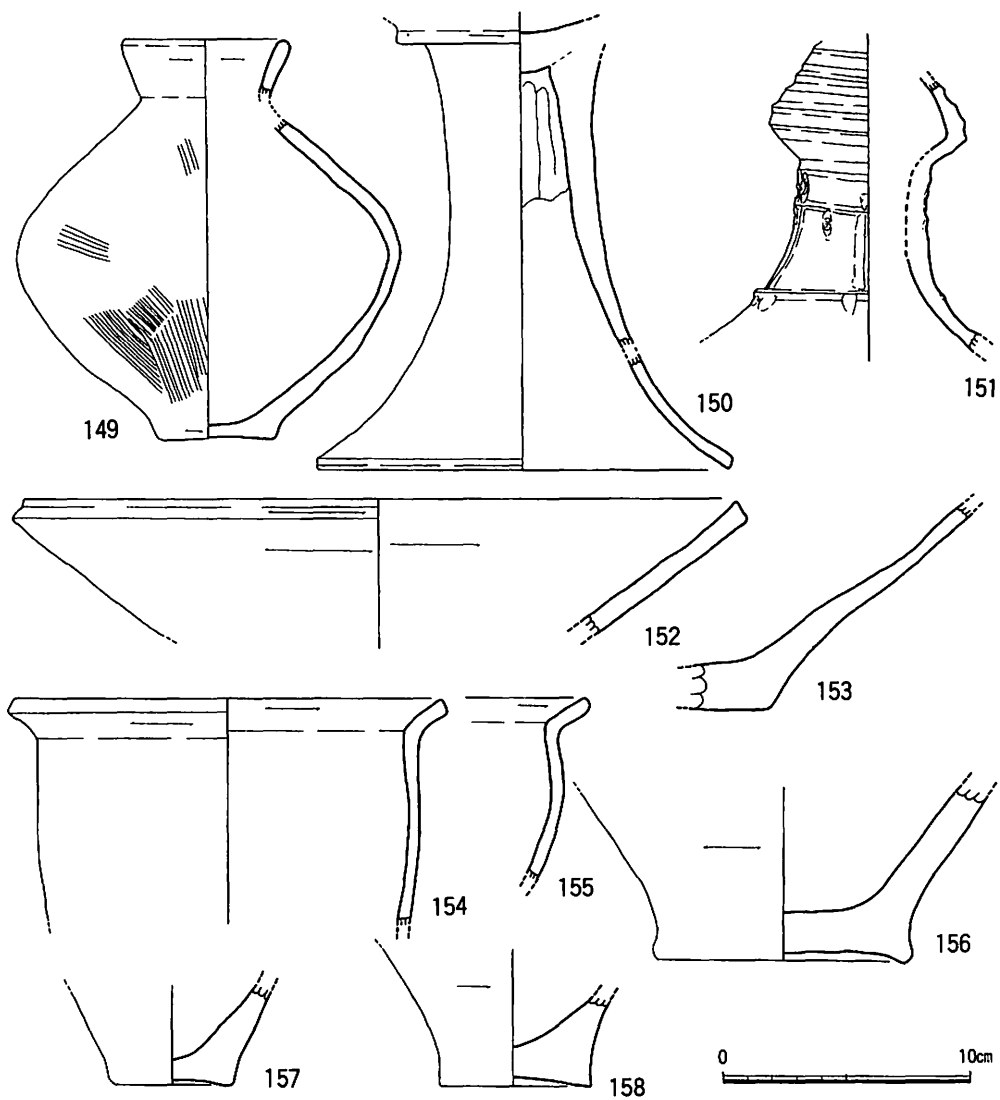
(151)は器台であろうか。体部は数条の三角形突帯が連なり、ラッパ状に開く脚部につながる。脚部には3条の三角形突帯が巡り、さらに縦方向にも三角形突帯がつながる。この突帯に付設して曲玉状の貼文が見られる。外面には赤色塗彩が施され、祭祠用の土器と思われる。



第60図 S K 52 平面・断面実測図 (1/20)



写真⑰ S K 52 遺物出土状況



第61図 SK52 出土遺物実測図 (1/3)

(152)は蓋と思われる。

(153)は壺形土器の底部である。

(154)は甕形土器であり、口縁は「く」の字状に外反し、口唇部は少し跳ね上げ状と為っている。

(155)は甕形土器であり、口縁は「く」の字状に短く外反する。

(156～158)はやや上げ底ぎみの底部である。

S K 5 3 (第62図)

S K 53は調査区西側に位置する円形状の土
墳である。

土墳は長軸1.15m、短軸1.05mを有し、深
さは検出面より35～45cmである。

床面は平らになっており、壁面の立ち上が
りは垂直に近い。

堆積土層は3層に分けられ、中層と上層に
は炭が混入している。

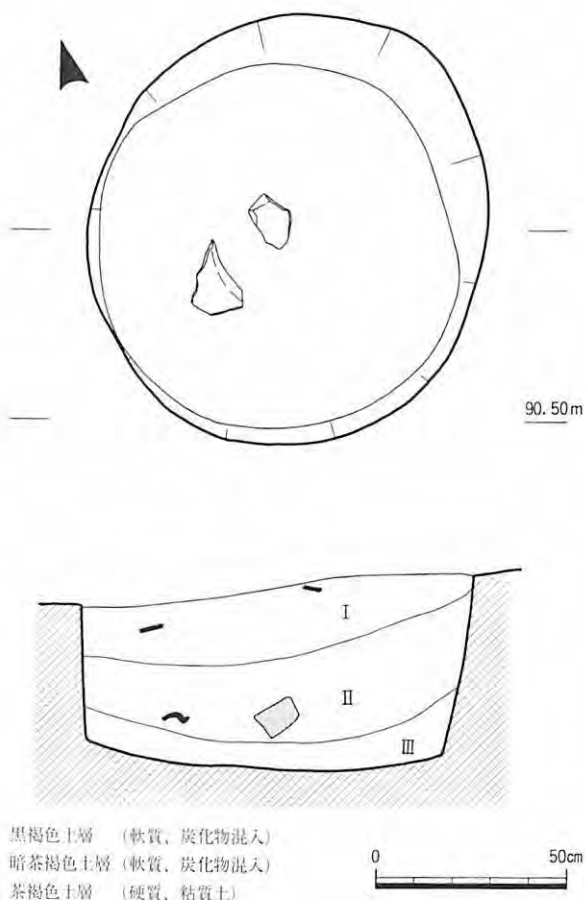
出土遺物 (第63図)

遺物は弥生時代の甕形土器・高坏が出土し
ている。

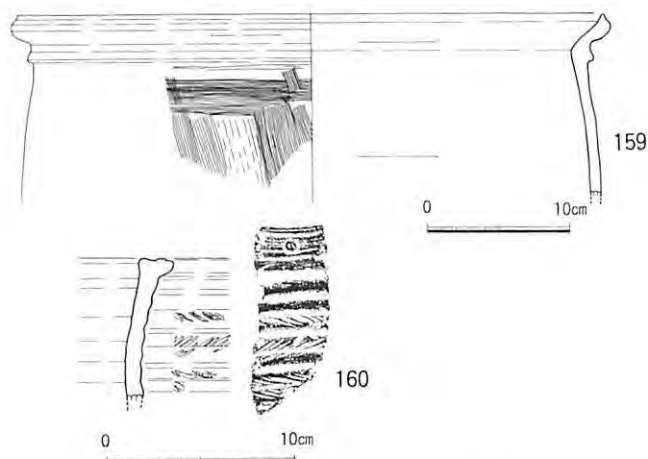
なお、高坏はS K 52から出土した高坏の脚
部(150)と接合する。

(159)は甕形土器であり、口縁部は「く」
の字状に外反し口唇部においてシャープな跳
ね上げ状を呈する。頸部には1条の三角形状
突帯が巡る。

(160)は口縁部が「L」字状を呈し、小さ
い円形の貼文が巡る。外面には凹線紋が施さ
れ、さらに刺突鋸歯紋が見られる。



第62図 S K 53 平面・断面実測図 (1/20)



第63図 S K 53 出土遺物実測図 (1/4)

S K 5 4 (第64図)

S K 54は調査区の北西側に位置し、S H10と北西側で切りあった不整楕円形状の土壌である。

土壌は長軸を東西方向に1.7m、短軸を南北方向に1.1m、深さは検出面から10cmを有する。床面は平らになっており、壁面の立ち上がりはややきつい傾斜である。

堆積土層は1層からなり、S H10を切っている。

遺物は、土壌中心の床上より弥生時代の壺形土器と高杯の2点が出土している。

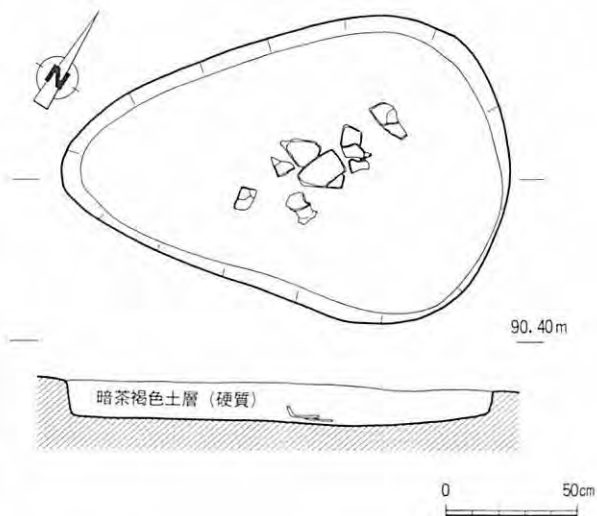
出土遺物 (第65図)

(161)は壺形土器の胴部から底部であり、胴部下半部に2条の三角形突帯が巡る。

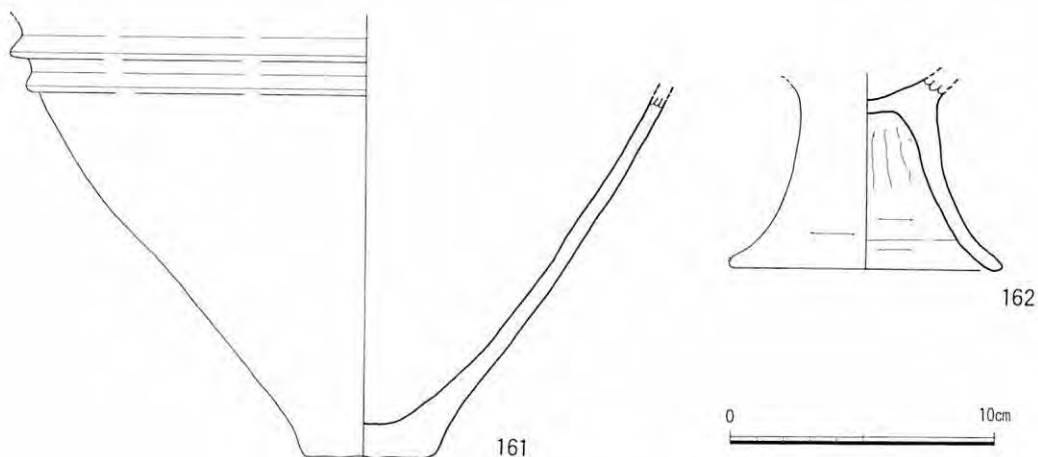
(162)は高杯の脚部であろう。



写真⑬ S K 54 遺物出土状況



第64図 S K 54 平面・断面実測図 (1/30)



第65図 S K 54 出土遺物実測図 (1/3)

S K 5 7 (第66図)

S K 57は調査区中央よりやや北側に位置する円形状の土坑である。

土坑は長軸1 m、短軸0.9 m、深さは検出面から60～65 cmを有する。

床面は平らになっており、平面形は円形状を呈する。壁面の立ち上がりは殆ど垂直に近い角度で延びている。

堆積土層は4層に分けられ、遺物は最下層の床面直上から出土している。

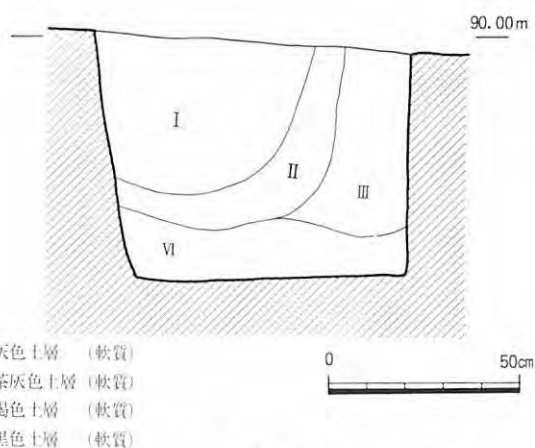
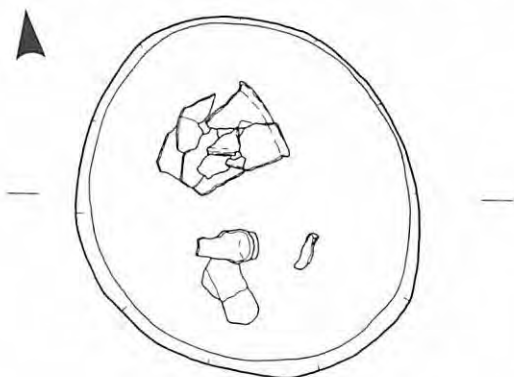
出土遺物 (第67図)

遺物には弥生土器の甕形土器・鉢形土器が見られる。

(163)は甕形土器であり、「く」の字状に口縁部が外反している。

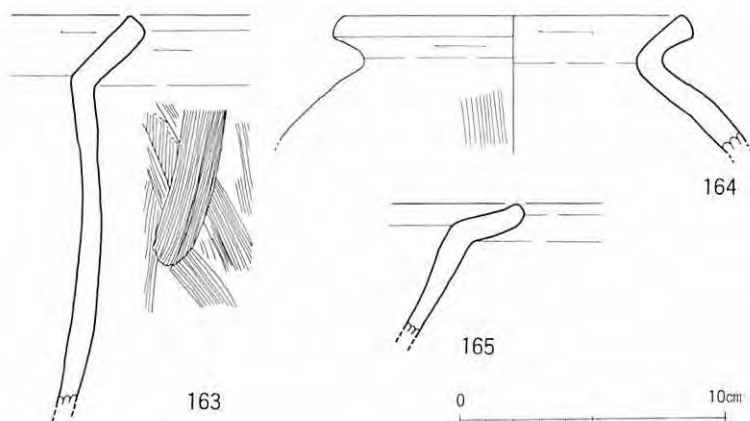
(164)は口縁部がややきつく「く」の字状に外反し、胴部が丸く膨らむ。

(165)は鉢形土器であろう。



写真⑱ S K 57 遺物出土状況

第66図 S K 57 平面・断面実測図 (1/20)



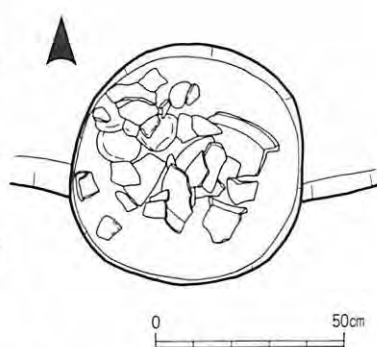
第67図 S K 57 出土遺物実測図 (1/3)

S K 6 1 (第68図)

S K 61は調査区南側に位置し、S D 01の遺構に切られた土壌である。

土壌は円形を呈し、直径60cmであり、深さは検出面から30cmを有する。

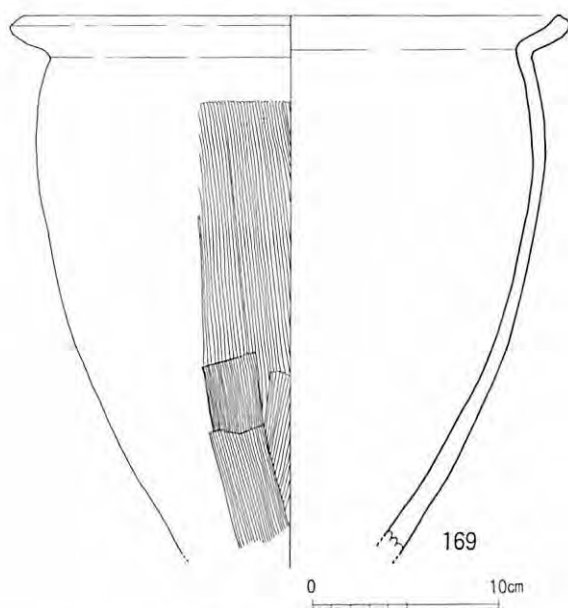
床面は平らで、壁面は垂直に掘られている。遺構の中より甕形土器の半個体が出土している。



第68図 S K 61 平面実測図 (1/20)

出土遺物 (第69図)

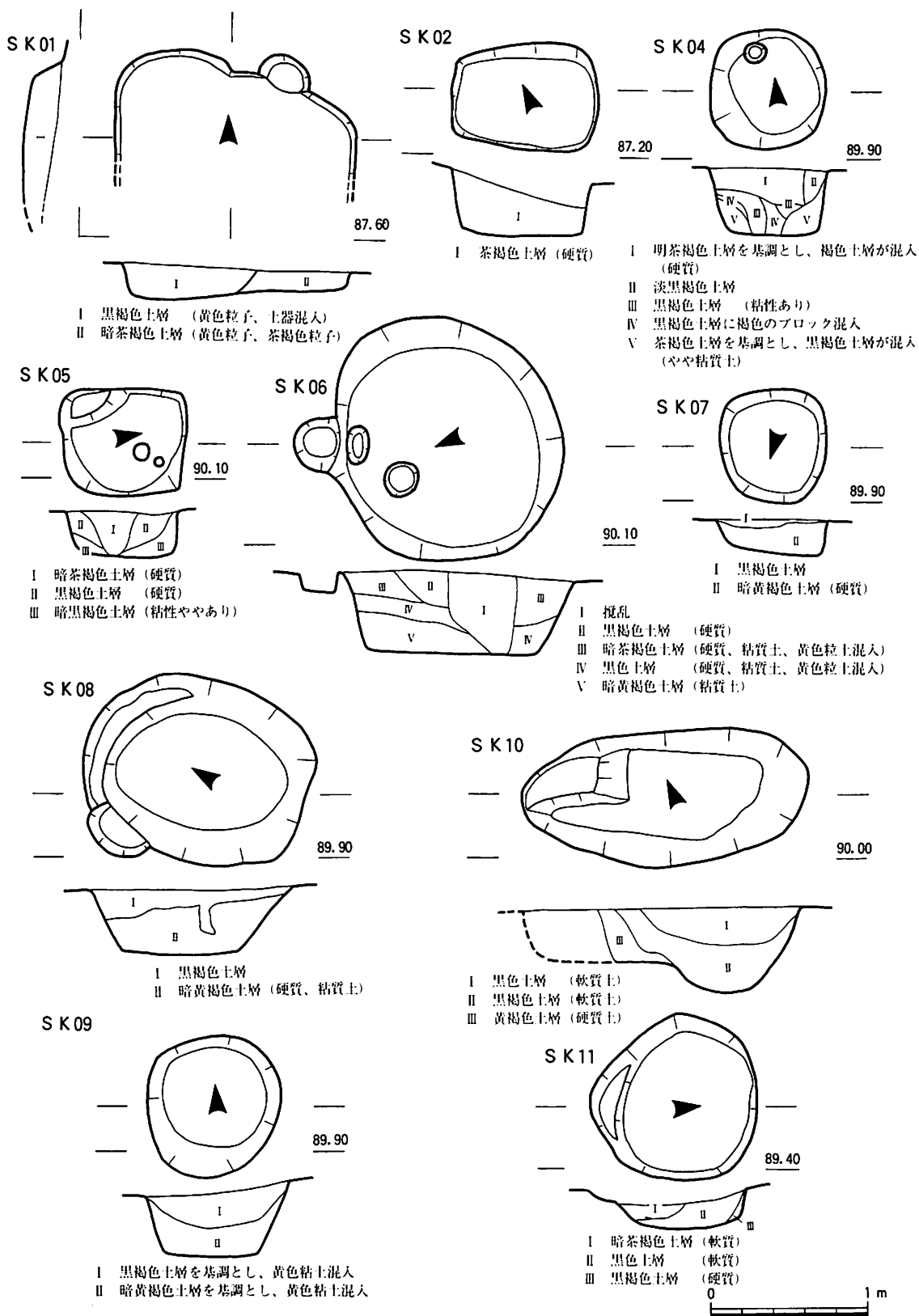
(169)は甕形土器であり、底部は見られない。口縁部は「く」の字状に外反し、短く延びている。さらに、口唇部では跳ね上げ状を呈する。



第69図 S K 61 出土遺物実測図 (1/4)

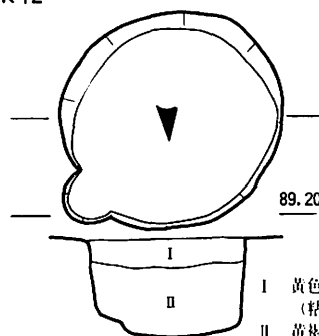


写真⑳ S K 61 遺物出土状況

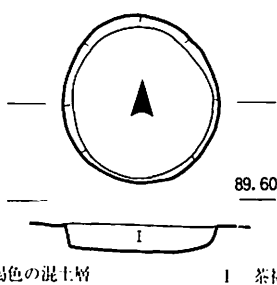


第70図 S K 01・02・04・05・06・07・08・09・10・11 平面・断面実測図 (1/40)

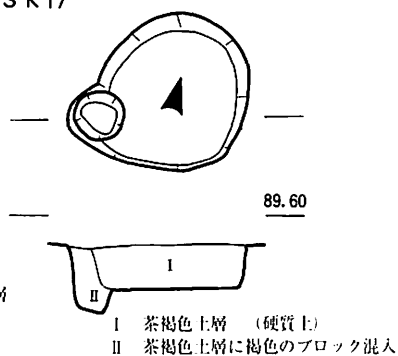
S K 12



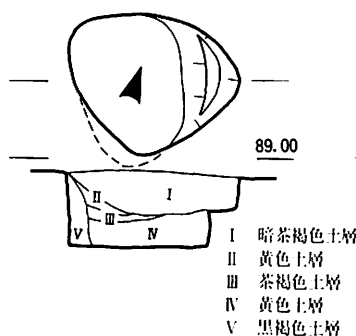
S K 16



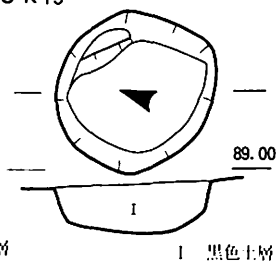
S K 17



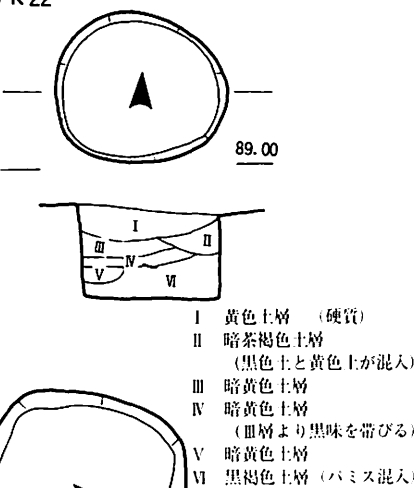
S K 18



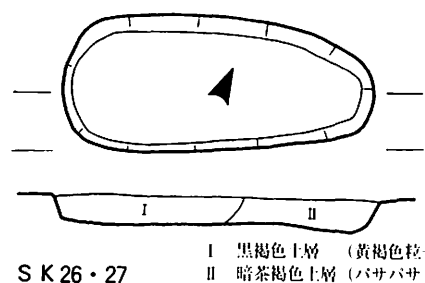
S K 19



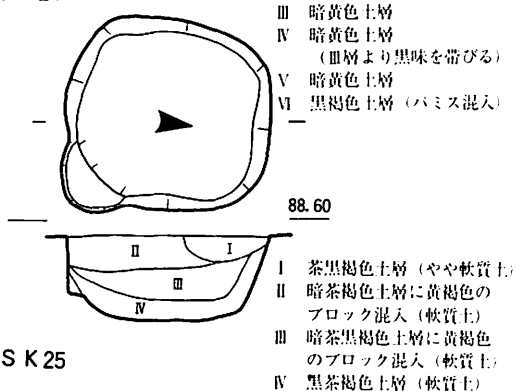
S K 22



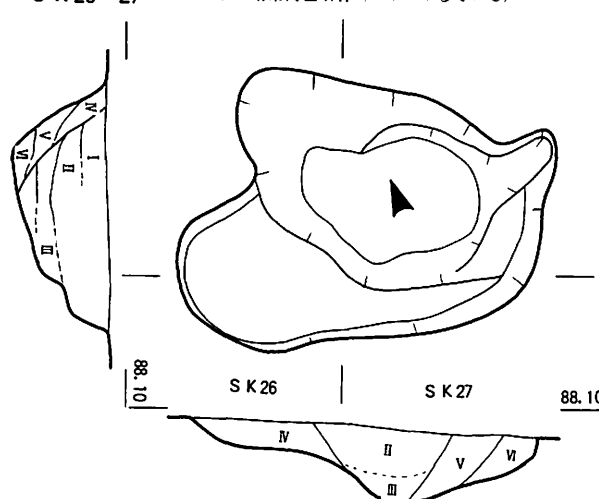
S K 20・21



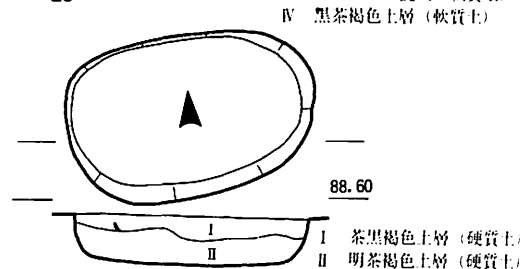
S K 24



S K 26・27



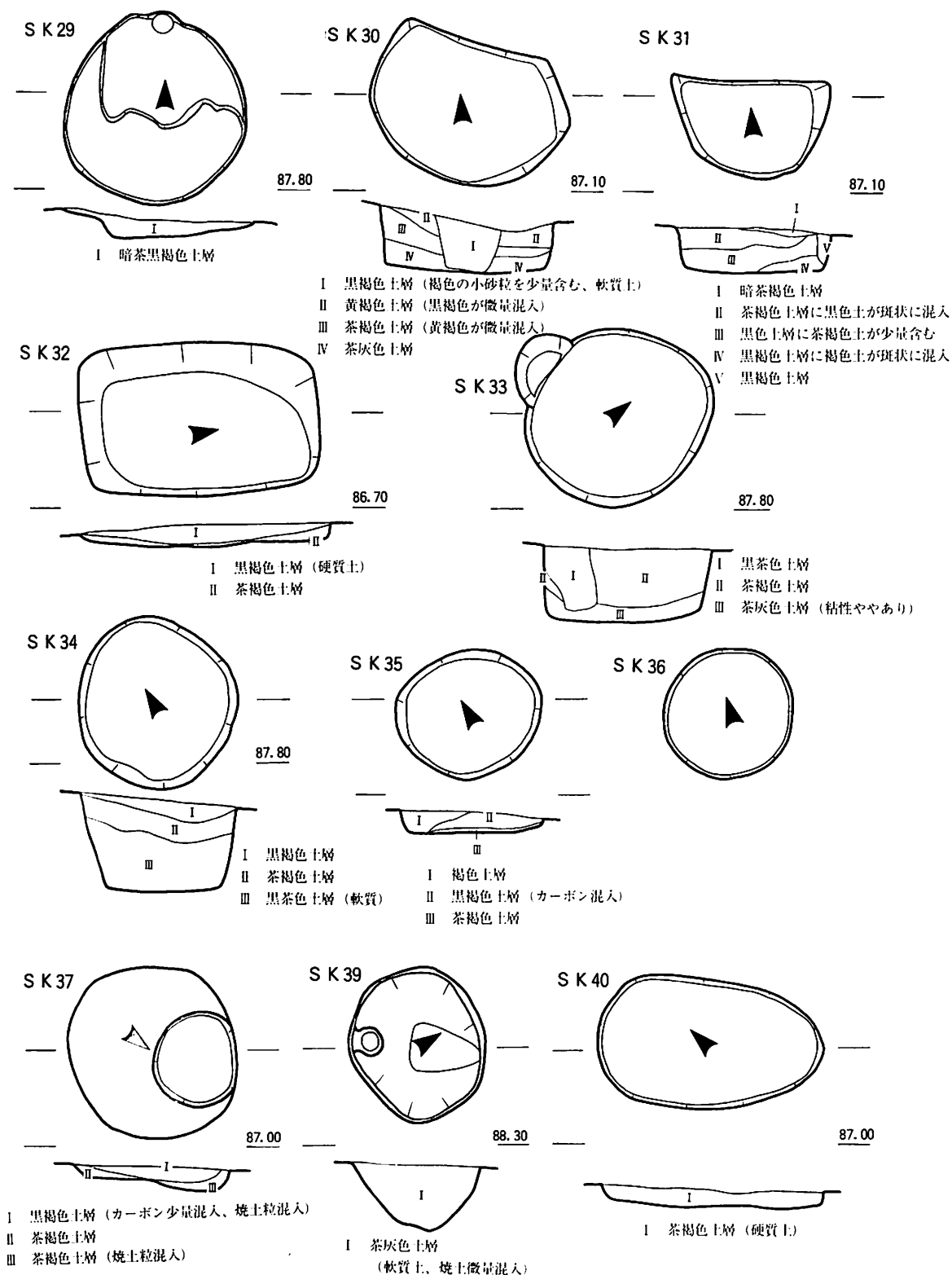
S K 25



- I 黄茶褐色土層 (硬質土)
 II 明茶褐色土層 (やや硬質土、淡黒褐色土の微量混入)
 III 明茶褐色土層 (橙褐色の小砂礫微量混入)
 IV 灰茶褐色土層 (やや軟質土)
 V 黄茶色土層 (やや軟質土)
 VI 暗灰黒色土層 (やや軟質土)

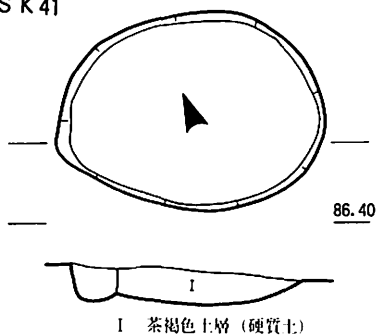
0 1 m

第71図 S K 12・16・17・18・19・20・21・22・24・25・26・27 平面・断面実測図 (1/40)

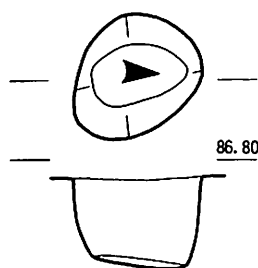


第72図 SK 29・30・31・32・33・34・35・36・37・39・40 平面・断面実測図 (1/40)

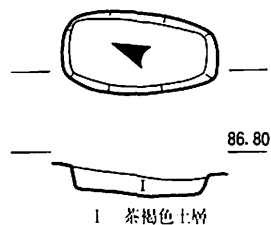
S K 41



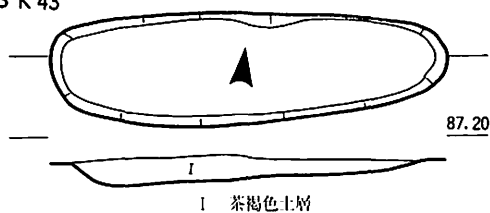
S K 44



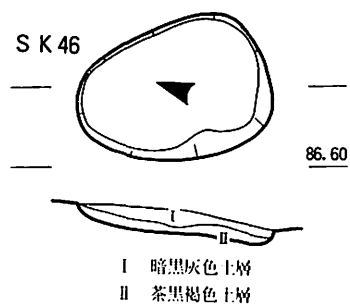
S K 45



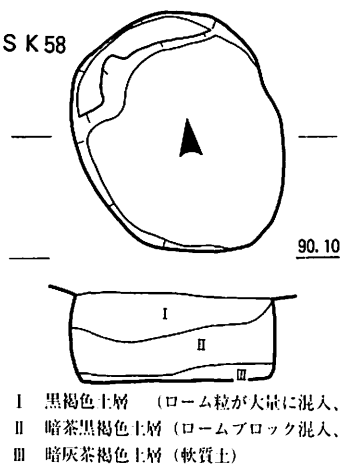
S K 43



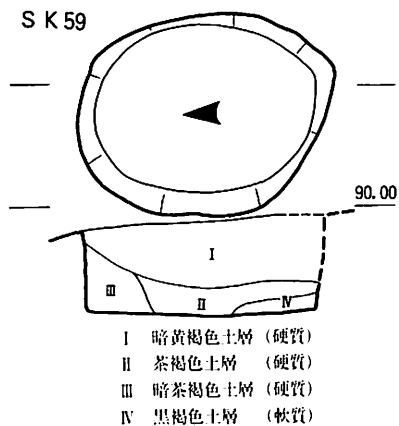
S K 46



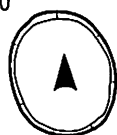
S K 58



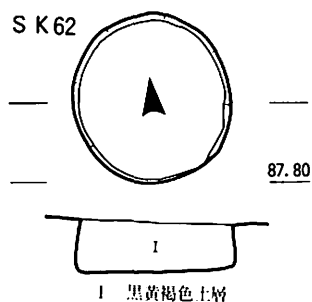
S K 59



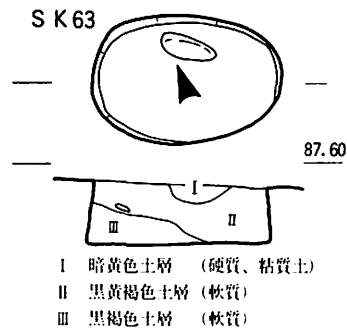
S K 60



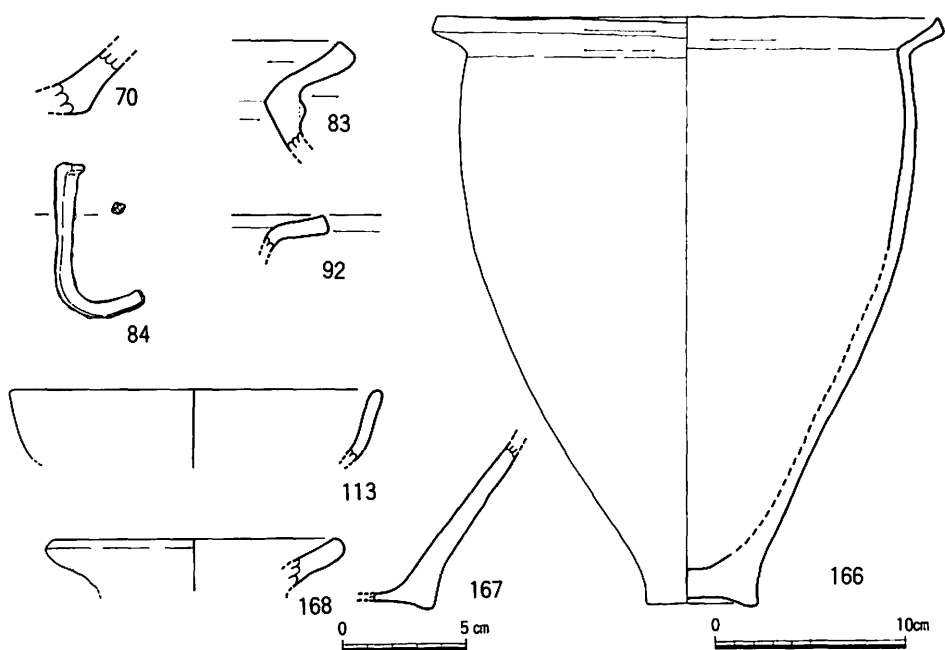
S K 62



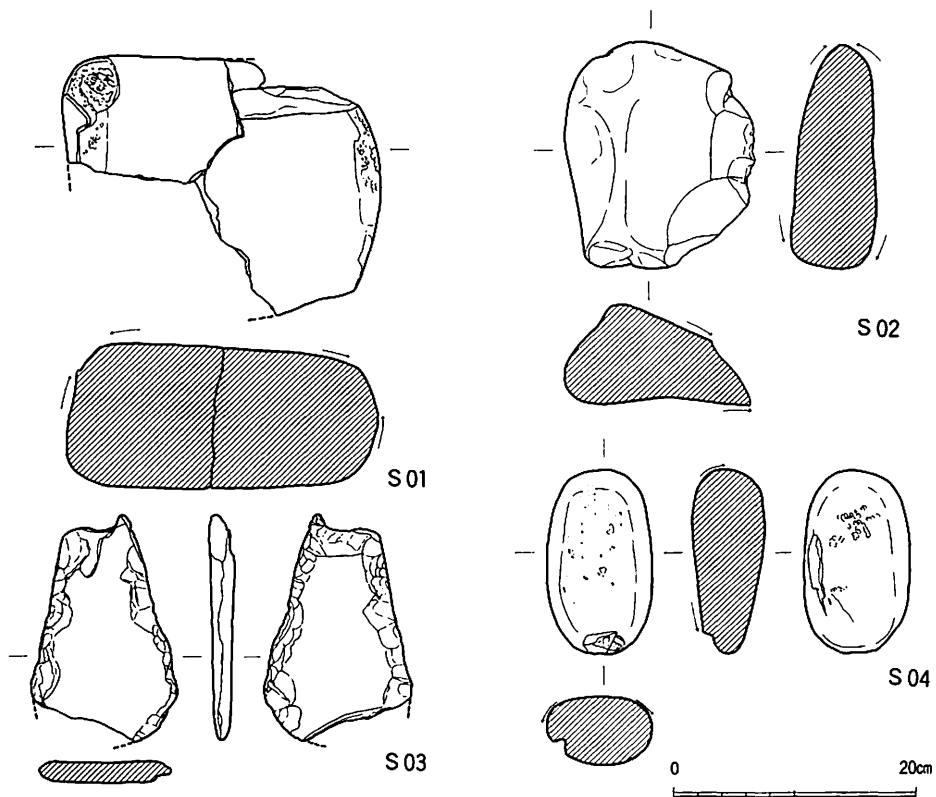
S K 63



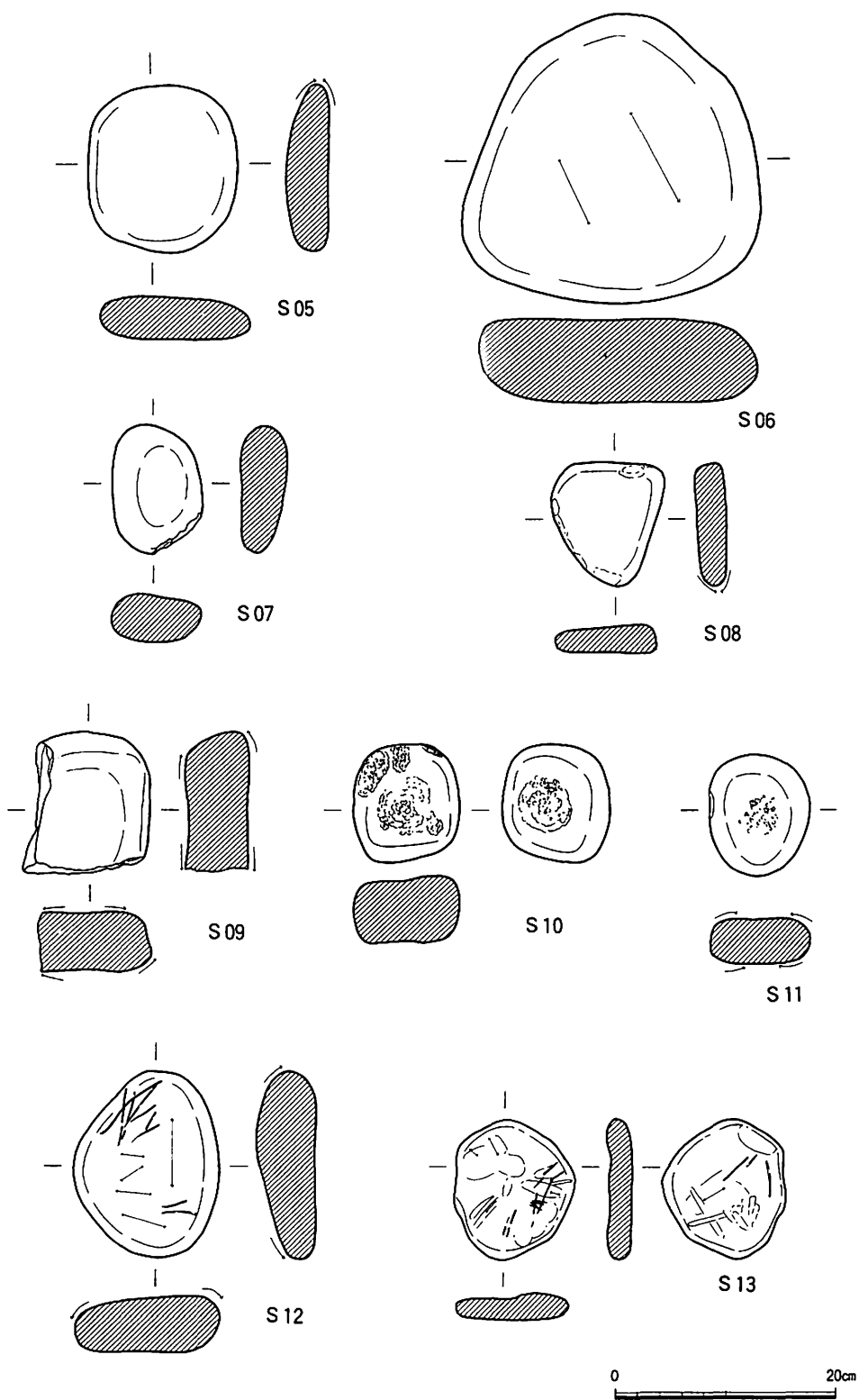
第73図 S K 41・43・44・45・46・58・59・60・62・63 平面・断面実測図 (1/40)



第74図 SK出土遺物実測図 (1/3・1/4)



第75図 SK出土遺物実測図 (1/6)



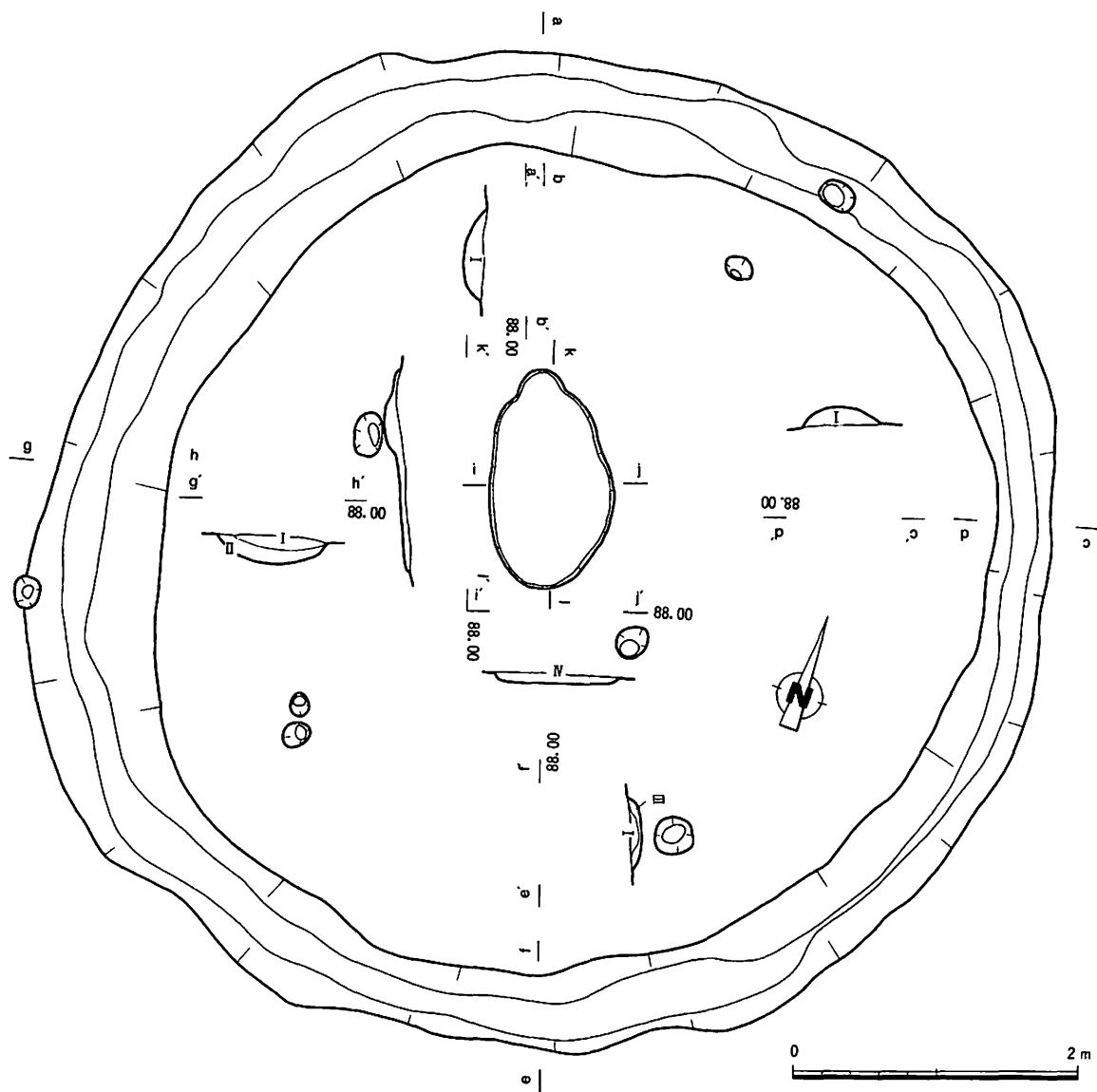
第76図 S K出土遺物実測図 (1/6)

第2表 土墳（SK）遺構一覽表

土墳 番号	図版 番号	平面形	規 模 (m) 長軸×矩径×深さ	土墳 番号	図版 番号	平面形	規 模 (m) 長軸×矩径×深さ
01	70	隅丸長方形	1.50×1.00×0.24	33	72	円 形	1.10×1.10×0.48
02	70	方 形	0.95×0.65×0.28	34	72	円 形	1.00×1.00×0.59
03	33	円 形	2.15×2.05×0.47	35	72	円 形	0.90×0.80×0.37
04	70	円 形	0.80×0.70×0.43	36	72	円 形	0.80×0.80×0.05
05	70	方 形	0.80×0.70×0.32	37	72	円 形	1.10×1.10×0.15
06	70	円 形	1.60×1.50×0.51	38	44	隅丸長方形	1.80×1.35×0.34
07	70	円 形	0.70×0.70×0.22	39	72	円 形	1.00×0.85×0.54
08	70	円 形	1.50×1.20×0.42	40	72	長 楕 円 形	1.50×1.00×0.16
09	70	円 形	0.90×0.85×0.43	41	73	楕 円 形	1.30×1.00×0.21
10	70	楕 円 形	1.90×0.95×0.45	42	73	隅丸長方形	2.00×0.80×0.43
11	70	円 形	1.08×1.03×0.25	43	73	長 楕 円 形	1.90×0.50×0.13
12	71	円 形	1.16×1.10×0.50	44	73	長 楕 円 形	2.00×0.60×0.15
13	36	隅丸方形	0.80×0.70×0.64	45	73	隅丸長方形	0.80×0.40×0.11
14	38	円 形	0.77×0.73×0.38	46	73	方 形	0.90×0.90×0.09
15	40	円 形	1.18×0.85×0.28	47	49	方 形	1.10×1.00×0.37
16	71	円 形	0.90×0.80×0.10	48	51	円 形	1.30×1.20×0.54
17	71	円 形	0.90×0.60×0.25	49	53	隅丸方形	1.20×1.05×0.59
18	71	円 形	0.90×0.70×0.18	50	56	円 形	0.63×0.52×0.17
19	71	円 形	0.90×0.90×0.25	51	58	楕 円 形	1.70×1.00×0.26
20	71	—	0.70× — ×0.13	52	60	円 形	1.03×0.97×0.19
21	71	—	0.50× — ×0.14	53	62	円 形	1.10×1.10×0.55
22	71	円 形	0.90×0.80×0.46	54	64	楕 円 形	1.70×1.15×0.15
23	41	長 楕 円 形	1.15×0.75×0.24	55	—	円 形	—
24	71	隅丸方形	1.00×1.00×0.40	56	—	隅丸長方形	1.20×0.50×0.13
25	71	隅丸方形	1.30×0.80×0.23	57	66	円 形	1.00×0.90×0.69
26	71	楕 円 形	1.90×0.90×0.21	58	73	円 形	1.20×1.00×0.44
27	71	不整長方形	1.70×1.00×0.43	59	73	円 形	1.30×1.00×0.50
28	43	長 楕 円 形	3.35×2.20×0.77	60	73	円 形	0.60×0.60×0.11
29	72	円 形	1.20×1.10×0.07	61	68	円 形	0.63×0.60×0.37
30	72	円 形	1.30×0.90×0.35	62	73	円 形	0.80×0.80×0.30
31	72	円 形	0.90×0.60×0.25	63	73	楕 円 形	1.00×0.65×0.30
32	72	隅丸長方形	1.50×0.95×0.15				

5. 円形周溝遺構（第77図）

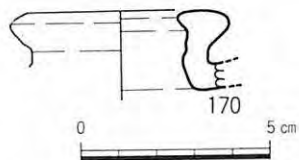
調査区中央のやや東よりに位置する円形状に溝が巡る遺構である。直径7 mのほぼ円形を呈する形態であり、円形状に巡る溝の幅は約80cm、床面の幅20cmの規模である。溝の内側には、直径約20cm大の柱穴がいくつか見られるが、不規則であるためこの遺構と関連性は薄いと思われる。また、中心付近に長径1.5m、短径0.9mの楕円形を呈する土壌が検出されているが、遺物が伴っておらず、遺存状態も良くないことから円形周溝遺構との関係も分からなかった。



第77図 円形周溝遺構 平面・断面実測図（1/50）

出土遺物（第78図）

円形周溝遺構の溝の埋土上層から瓶の口縁と思われる遺物が出土している。施釉陶器で灰釉を施し、器形や特徴から中世の年代が考えられる。しかし、遺構の年代がこの時期になるかは、出土状態からして言えない。



第78図 円形周溝遺構 出土遺物実測図

(1/2)



写真⑪ 円形周溝遺構 遠景（西より）



写真⑫ 円形周溝遺構 全景（南より）

6. 方形周溝遺構（第79・80図）

調査区の中心に位置する方形に溝を巡らした遺構である。溝の方向はそれぞれ東西、南北を指している。遺構の東を南北方向にS D 04・05の2条の溝状遺構が走り、方形周溝遺構を切っている。また、方形溝状遺構の東側のS D 04と交わった所から土壙（S K 47）が検出された。構築した序列は、切り合いから見て方形溝状遺構→土壙（S K 47）→溝状遺構（S D 04）の順と成っている。なお、土壙からは中世の土師器の坏が出土していることからこの時期の所産と考えられる。S D 04の溝状遺構からは年代を想定できる遺物は出土していないが、遺構の形態や堆積している土層の状態から近世に相当されるものと思われる。

遺構の検出面は西側が高く、東半分は東側に向かって段々と低くなっている。これは、東側において近世の開墾時の造成によるものと考えられる。よって、現状では溝の幅は西側で広く、そして深く残っており、東側では狭く浅くなっている。

遺構の規模は東西、南北共に一辺約12mを有する正方形の平面形を呈する。そして12m四方の内側に、最大幅約2mの溝が巡っている。溝の深さは検出面より70cmを有するが、上面が削平されているため構築時は更に深かったことが予想される。溝の掘り形はほぼ逆台形を為し、地山に綿密に掘削し、溝の壁面は平滑に仕上がっている。床面を見ると、所々にテラス状の段があり、東側に向かって下がっているようである。そして、東側の溝内に幅1mほどのブリッジが床面よりやや高くなって造り出されており、溝を渡る施設と考えられる。なお、溝の堆積状況から溝の内側には台形状の盛土があった可能性が強いと考えられる。

溝内の壁面には柱穴が数箇所みられるが、この遺構に伴うものであるか不明である。さらに、方形周溝遺構の中心部には直径1.2m程、深さ10cmの不整形の土壙が検出された。遺物が出土しておらず、上面がかなり削平されたものと見られる。この土壙が方形溝状遺構に伴うかどうかは判断することはできなかった。この外には柱穴などの遺構は確認されなかった。

調査時当初の遺構検出を行った際、方形の溝状に土質の異なった形状が見られたことから、これを弥生時代の方形周溝墓ではないかと考えていた。しかしながら、溝状の遺構を掘り下げることに従い、予想に反して須恵器や土師器が出土したことから当初の考えを変えざるを得なかった。

出土遺物は総て溝の覆土からのもので、須恵器の蓋・碗がやや多く、土師器の蓋・坏がやや少ない比率であった。なお、遺物は完形品のものと破碎されたものとに分けることができる。これら土器の投棄は、溝内のローム床面直上から出土した土器は無く、やや浮いた状態にあった。

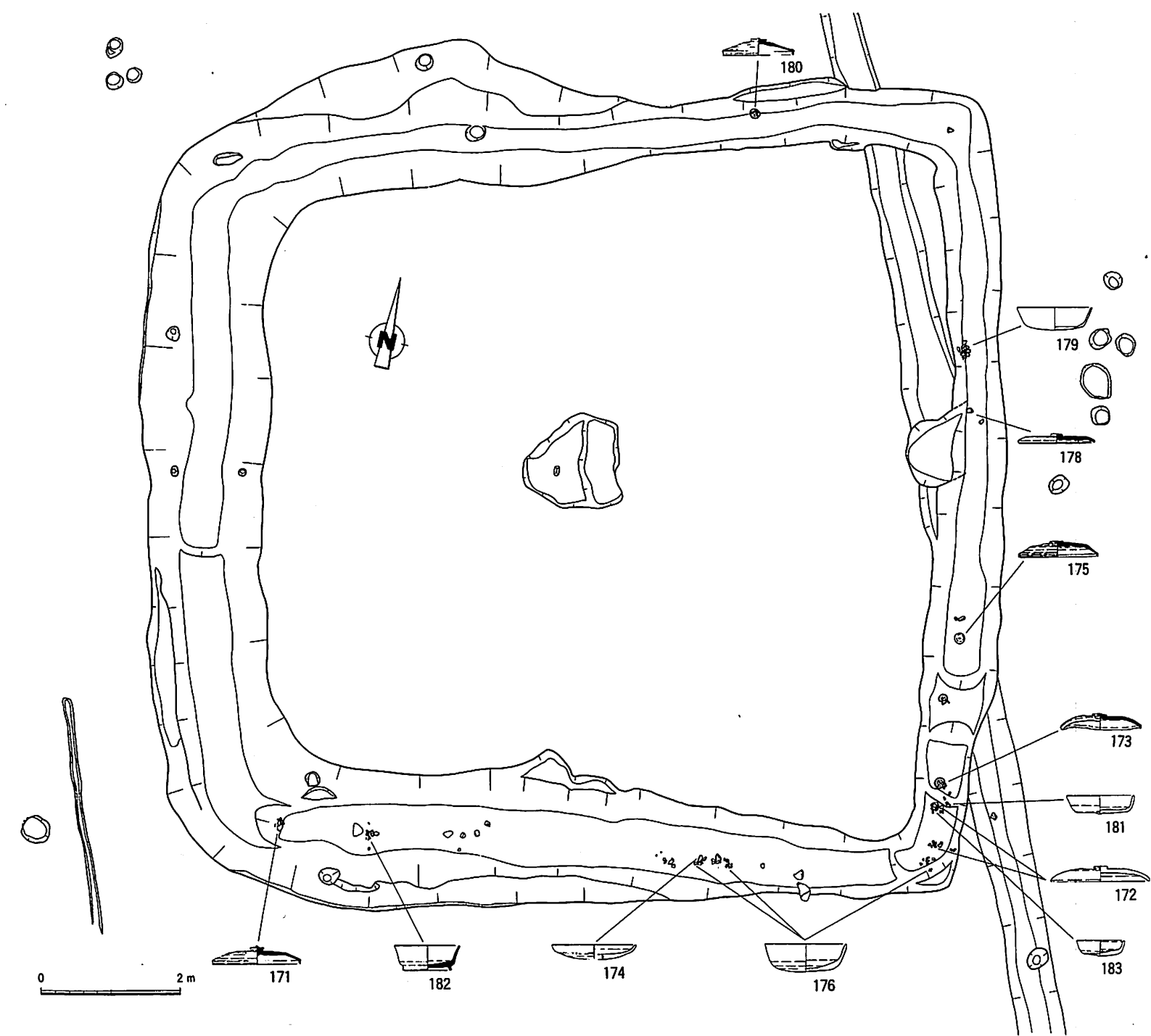
出土遺物（第81図）

（171・173・175・177・180）は、天井部に偏平な擬宝珠状のつまみを有し、口縁端部において内側に屈曲し、かえりは見られない。器高は高い。

（178）は、天井部にボタン状のつまみが付き、口縁端部は丸味を帯びて仕上げられている。器高は低く偏平である。

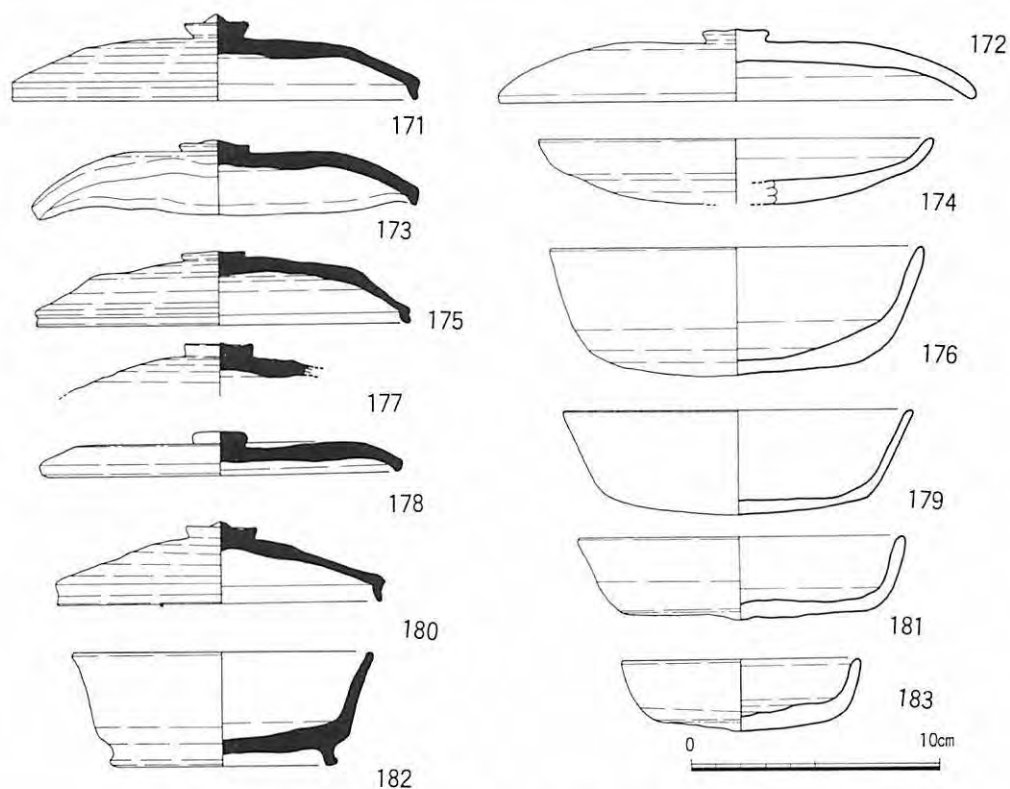
（182）は須恵器の埴である。底部から緩やかに外反し、口縁部に至る。高台は断面が台形を成し、ハの字に開く。口径からすれば（180）の蓋とセットになろう。

（172・174）は土師器の蓋である。天井部から丸みを帯びて口縁端部に至る。



第79図 方形周溝遺構 平面・断面実測図 (1/80)

(176・179) は土師器の坏である。底部付近は丸くやや外反しながら直線的に口縁部に至る。
 (181・183) は土師器の坏である。底部は平たくヘラ切りがおこなわれており、口縁部に向かって大きく内側に屈曲し、まっすぐに伸びている。



第81図 方形周溝遺構 出土遺物実測図 (1/3)



写真23 方形周溝遺構 全景 (北より)

7. 柱穴 (Pit)

城南遺跡全体より無数の柱穴状の円形の掘り込みが見られ、これらを柱穴として扱った。柱穴は、不規則に点在し、性格は不明である。なお、遺物が出土しているものは少なく、Pit 107のみの照会に留めたい。

Pit 107

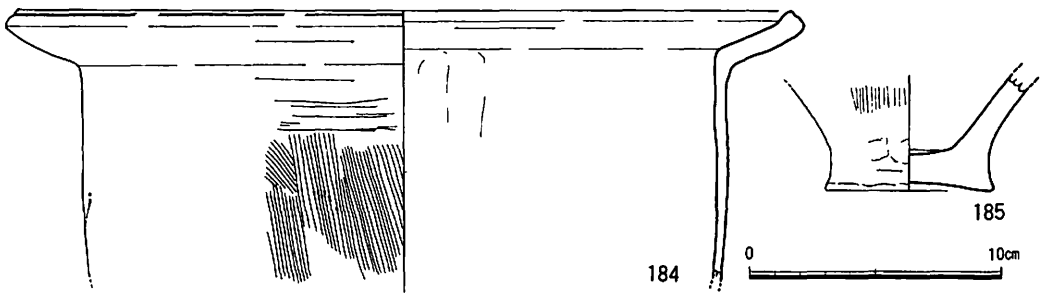
Pit 107は調査区南側に位置する。

遺構は長軸30cm、短軸20cm、深さ50cm程である。

出土遺物 (第82図)

(184)と(185)は同一個体の甕形土器である。

口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部が跳ね上がり状を呈している。胴部下部は欠損しているが、底部はやや上げ底気味を成す。



第82図 Pit 107 出土遺物実測図 (1/3)

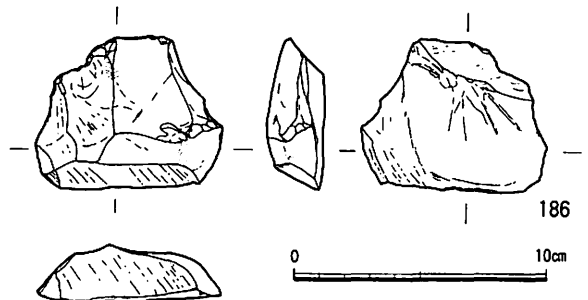
8. その他

表採により以下の遺物を採集した。

A地区採集遺物 (第83図)

石核石器 (186)

片面を大きく打撃して打ち割り、つづいて逆面を剝離して、加工している。一部に自然面が残っている。



第83図 A地区 出土遺物実測図 (1/3)

C地区採集遺物 (第84図)

石鏃 (187)

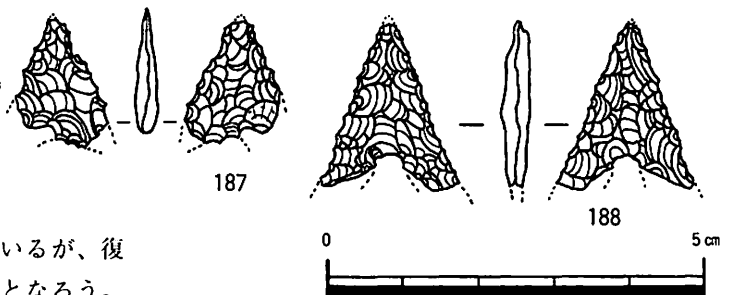
比較的小型で基部の抉りが浅い、凹基式の石鏃である。石材は姫島産黒曜石である。

G地区採集遺物 (第84図)

石鏃 (188)

やや大型であり、基端が欠けているが、復元すれば抉りの深い凹基式の石鏃となろう。

石材は姫島産黒曜石である。



第84図 C地区・G地区 出土遺物実測図 (1/1)

第3表 遺物観察表(1)

遺物 番号	庫 番号	出土 遺構	器 種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	最大径	底径	
1	8	S B03	土師器 坏	金ウンモ	微粒	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	13.2				反転復元
2	10	S D01	須恵器 長頸壺?		微粒	灰白色	青灰色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ					
3	10	S D01	須恵器 長頸壺?		微粒	灰白色	灰白色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ					
4	10	S D01	石砲丁				淡黄灰色							結晶片岩 重量12g
5	10	S D01		長石 黒ウンモ	微粒	赤褐色	淡黒褐色	ナデ	ナデ					
6	10	S D01	土師器 坏		微粒	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ				8.2	
7	21	S H01	弥生土器 壺	角閃石 黒ウンモ	微粒	淡黄白色	淡赤黄色	ヨコナデ	ヘラ工具による タテナデ ヨコナデ					
8	21	S H01	弥生土器 壺	黒ウンモ	微粒	淡黄灰色	淡黄灰色	ヨコナデ	タテ方向ナデ ヨコナデ	16.4				
9	21	S H01	弥生土器 壺	長石 黒ウンモ	小粒	淡褐色	淡褐色	ナデ	タテ方向ハケ ナデ	20.6				
10	21	S H01	弥生土器 壺	石英 黒ウンモ	小粒	淡黄色	明黄色	ナデ ヨコナデ	ヘラ工具による タテ方向のナデ ヨコナデ	18.6				
11	21	S H01	弥生土器 壺 口縁部	長石 黒ウンモ	微粒	淡黄白色	淡黄白色			18.8				
12	21	S H01	弥生土器 壺	長石 黒ウンモ 赤色酸化土粒	細粒	明黄色	淡黄灰色	ハケ目調整 ヨコナデ	タテナデ ヨコナデ	21.2				
13	21	S H01	弥生土器 壺 底部	長石 黒ウンモ	細粒	淡黄灰色	淡茶褐色	ヘラ工具による タテナデ	ヘラ工具による タテナデ					
14	21	S H01	弥生土器 壺	長石	微粒	淡黄色	淡黄灰色	ナデ	タテ方向ナデ					底部、ナデ
15	21	S H01	弥生土器 壺 口縁部	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	淡黄灰色	明黄白色	ヨコナデ	ヘラ工具による タテ方向ナデ ヨコナデ					
16	21	S H01	弥生土器 壺	角閃石 黒ウンモ	細粒	淡黄灰色	淡黄灰色	ナデ	タテ方向ナデ					
17	23	S H02	弥生土器 壺	長石、石英 角閃石 黒ウンモ	小粒	明黄色	淡灰茶色	ナデ	ナデ	19.0				
18	23	S H02	弥生土器	長石、角閃石、 黒ウンモ、赤色 酸化土粒	微粒	淡黒色	淡黄灰色	ヘラケズリ	ヘラ工具による ヨコナデ				7.0	底部、ヘラ工具によるナデ
19	23	S H02	弥生土器	長石、角閃石 黒ウンモ	細粒	淡褐色	淡茶色	ナデ	ナデ					
20	23	S H02	弥生土器	長石、角閃石	細粒	淡茶褐色	淡黒色	ナデ	ナデ					
21	23	S H02	弥生土器	石英、角閃石	小粒	淡赤黄色	淡黄茶色	ナデ	ヘラ工具による ハの字状波線 ナデ					
22	23	S H02	石砲丁											結晶片岩 重量30g

第4表 遺物観察表(2)

遺物 番号	掘 番号	出土区 出土 遺構	器 種	胎土		色調		器面調整		法量(cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴部 最大径	底径	
23	23	S H02	磨製石皿				淡黒色							千枚岩 重量2g
24	25	S H03	弥生土器 高坏?	長石、黒ウンモ	微粒	淡黒褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	32.0				
25	25	S H03	弥生土器 甕	長石、石英 角四石	細粒	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	29.0				
26	25	S H03	弥生土器 甕 口縁部	石英	細粒	淡黄褐色	淡赤褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ後ナデ ヨコナデ	22.0				
27	25	S H03	弥生土器 甕	長石、黒ウンモ	細粒	淡黄茶色	淡黄茶色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	22.2				
28	25	S H03	弥生土器 甕	長石、角四石 黒ウンモ	細粒	黄褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	22.0				
29	25	S H03	弥生土器 甕	角四石 黒ウンモ	細粒	暗茶褐色	暗茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目後ナデ 消し ヨコナデ	24.0				
30	25	S H03	弥生土器 甕	長石 黒ウンモ	微粒	明黄茶色	明黄茶色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	18.5				
31	25	S H03	弥生土器 甕	石英、長石 角四石	細粒	暗茶褐色	暗茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	15.6				
32	25	S H03	弥生土器 甕	石英 金ウンモ	微粒	黄褐色	赤色	ナデ	ヨコナデ			24.0		
33	25	S H03	弥生土器	角四石	細粒	淡黄色	淡黄色	ヨコナデ	ヨコナデ				19.4	
34	26	S H03	弥生土器	角四石 金ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色		ヨコナデ					
35	26	S H03	弥生土器	角四石 金ウンモ	細粒	暗茶褐色	黒色	ナデ	ナデ				7.2	
36	26	S H03	弥生土器	長石、角四石 黒ウンモ	小粒	暗茶褐色	赤褐色	ナデ	ナデ				5.8	
37	26	S H03	弥生土器	長石、角四石 黒ウンモ	細粒	黒褐色	黒褐色	ナデ	指圧痕 ナデ				4.6	
38	26	S H03	弥生土器	石英、角四石	細粒	黄褐色	黄褐色	指圧痕 ナデ	ナデ					
39	26	S H03	弥生土器	長石 黒ウンモ	微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ				6.2	
40	26	S H03	弥生土器	石英、角四石	細粒	茶褐色	黄褐色	ナデ					5.9	
41	26	S H03	弥生土器	長石、黒ウンモ 赤色酸化土粒	微粒	淡褐色	淡赤茶色	ナデ	ナデ					
42	26	S H03	弥生土器	長石、角四石	小粒	黒褐色	赤褐色	ナデ					5.6	底部、ややあげ底、指圧痕あり
43	26	S H03	弥生土器	石英、角四石 金ウンモ	細粒	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	指圧痕 ヨコナデ				10.0	
44	26	S H03	弥生土器	長石、黒ウンモ	細粒	淡黄茶色	淡黄茶色	ナデ	ナデ				10.6	

第5表 遺物観察表(3)

遺物 番号	埋 入 番号	出土 土 遺 構	器 種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	最大径	底径	
45	26	S H03	弥生土器	角四石 金ウンモ	微粒	暗黄褐色	暗黄褐色							
46	26	S H03	弥生土器	角四石 金ウンモ	細粒	暗黄色	暗黄色	ヨコナデ	ヨコナデ	9.6				
47	26	S H03	弥生土器 甕	長石 黒ウンモ	微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					
48	26	S H03	弥生土器	長石 黒ウンモ	小粒	淡黄茶色	淡黄茶色	ナデ	ナデ					
49	26	S H03	鉄鍬											
50	29	S H08	弥生土器	長石 黒ウンモ	微粒	淡黒褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ					
51	29	S H08	弥生土器	長石 黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					
52	31	S H09	弥生土器	角四石 黒ウンモ	微粒	明黄色	明黄色	ナデ	ナデ					
53	31	S H09	弥生土器	長石、角四石	微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヘラナデ	ナデ ヘラナデ					
54	31	S H09	弥生土器	長石、角四石	細粒	淡黄褐色	淡黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ					
55	31	S H09	弥生土器	長石、角四石 黒ウンモ 赤色酸化土粒	小粒	淡黄灰色	淡黄灰色	ミガキ ヨコナデ	ヨコナデ					
56	31	S H09	弥生土器	長石、角四石	微粒	明赤黄色	明赤黄色	ナデ	ヘラ1具ナデ ナデ					
57	31	S H09	弥生土器	長石、角四石	微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					
58	31	S H09	弥生土器 甕	長石、角四石 黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	タテヘラナデ					
59	31	S H09	弥生土器	長石、角四石 黒ウンモ	細粒	淡黒褐色	赤茶色	ナデ	ナデ					
60	31	S H09	弥生土器	長石、角四石 黒ウンモ	細粒	淡黄色	淡黄色	ナデ	ヨコナデ ナデ					
61	31	S H09	弥生土器 鉢	長石、石英 角四石	小粒	淡黒褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ	13.0				
62	31	S H09	弥生土器 器台	長石、角四石 黒ウンモ	細粒	淡茶褐色	淡黄茶色	ヘラナデ ナデ	ナデ		6.5		10.6	
63	31	S H09	石鍬				淡緑白色							緑色片岩 重量3g
64	31	S H09	砥石				淡黒灰色							千枚岩 重量48g
65	31	S H09	砥石?				淡灰黑色							千枚岩 重量100g
66	31	S H09	砥石				淡黄白色							頁岩 重量90g

第6表 遺物観察表(4)

遺物 番号	埋 込 番 号	出土 区 域 土 構 造	器 種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				泥和材	粒 子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	附 属 最大径	底径	
67	31	S H09	砥石				淡黄白色							頁岩 重量230g
68	-	S H12	弥生土器 甕	長石 黒ウンモ	細粒	明黄色	明黄色	ナデ	ナデ	34.4				
69	-	S H12	弥生土器	長石 黒ウンモ	細粒	淡褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ				6.5	底部、指圧痕
70	74	S K01	弥生土器	長石 黒ウンモ	微粒	淡黒色	淡赤灰色	ナデ	ナデ					
71	34	S K03	弥生土器 甕	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	明茶褐色	淡黒褐色	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	34.6				
72	34	S K03	弥生土器	角閃石	微粒	暗茶褐色	黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	32.0				
73	34	S K03	弥生土器	角閃石 金ウンモ	細粒	茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	タテナデ ヨコナデ	27.0				
74	34	S K03	弥生土器 甕	長石 角閃石	微粒	茶褐色	黒褐色	ナデ ヨコナデ	タテ方向ナデ ヨコナデ	22.6				
75	35	S K03	弥生土器 甕	長石、角閃石 黒ウンモ	小粒	黄茶色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	39.6				
76	35	S K03	弥生土器	角閃石 金ウンモ	細粒	黄褐色	黄褐色	指圧痕 ハケ後ナデ ヨコナデ	細いハケ目後 ナデ ヨコナデ	15.4				
77	35	S K03	弥生土器 甕	長石	微粒	淡褐色	明黄色	ヨコナデ	タテナデ ヨコナデ				7.3	
78	35	S K03	弥生土器 高坏	長石、角閃石 黒ウンモ	小粒	黒色	暗赤茶色	ヘラ工具によ るヨコナデ	ナデ ヨコナデ				9.7	
79	35	S K03	弥生土器	角閃石 金ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	指圧痕 ヨコナデ				14.6	
80	35	S K03	弥生土器 長頸甕	黒ウンモ	細粒	淡黄灰色	淡黄灰色	ヨコナデ	タテ方向ハケ 目 ヨコナデ					
81	35	S K03	弥生土器 甕			灰黄褐色	投灰色	ヨコナデ	タテナデ ヨコナデ				5.8	底部 ナデ
82	35	S K03	弥生土器 甕		微粒	黄褐色	丹塗り		ヨコナデ丹塗 り)					
83	74	S K07	弥生土器 甕	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	淡茶褐色	淡黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					
84	74	S K12	鉄											重量20g
85	37	S K13	弥生土器 甕	長石 角閃石	微粒	黒褐色	黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	23.0				
86	37	S K13	弥生土器	黒ウンモ	微粒	明黄白色	明赤黄色	ナデ	ナデ				6.0	
87	37	S K13	弥生土器 鉢			淡橙色	黄橙色	ヘラ削り痕 ナデ	タテ方向ハケ 目 ヨコナデ	14.4	9.7		6.4	底部 ナデ
88	37	S K13	弥生土器 鉢	長石 角閃石	細粒	明黄茶色	淡黄褐色	ヘラミガキ ナデ ヘラナデ	ハケ目 ヨコナデ	14.2	10.0		6.3	底部 ナデ

第7表 遺物観察表(5)

遺物 番号	検出 箇所	出土区 遺構	器 種	胎土		色調		器面調整		法量 (cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
89	37	S K 13	磨性石器				淡黄緑色							緑色片岩 重量2.4
90	39	S K 14	弥生土器	長石 黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	淡黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					
91	39	S K 14	弥生土器	長石、黒ウンモ 赤色酸化土粒	細粒	淡黄灰色	淡茶褐色	ハケ目	ナデ					
92	74	S K 20	弥生土器	長石 黒ウンモ	微粒	淡褐色	淡茶褐色	ナデ	ナデ					
93	42	S K 23	弥生土器 高坏	長石、黒ウンモ 赤色酸化土粒		淡黒褐色	淡黒褐色	ヨコナデ	指圧痕 ナデ ヨコナデ	28.4				
94	42	S K 23	弥生土器	長石 黒ウンモ	微粒	淡赤黄色	淡赤黄色	ナデ	ナデ					
95	45	S K 38	弥生土器 甕	長石 角閃石	細粒	黄茶色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	35.8				
96	45	S K 38	弥生土器 甕	長石 角閃石	細粒	淡黄褐色	暗赤褐色	ヘラ工具ナデ ヨコナデ	ヘラ工具タテ ナデ ヨコナデ	26.4				
97	45	S K 38	弥生土器 甕	石英 角閃石	細粒	暗黄褐色	黒茶褐色	ナデ はね上が ⁽⁴⁾	ハケ目 はね上が ⁽⁴⁾	23.0				
98	45	S K 38	弥生土器	長石、角閃石 金ウンモ	細粒	黒茶褐色	黒茶褐色	ヨコナデ ナデ	ナデ			13.0		
99	45	S K 38	弥生土器 壺	長石 黒ウンモ	微粒	淡褐色	黄褐色	ヨコヘラミガ キ ナデ	ナデ					
100	45	S K 38	弥生土器 壺	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	明黄色	明黄色	ナデ	ヘラ工具ヨコナデ ヘラ工具タテナデ ヨコナデ	26.8				
101	45	S K 38	弥生土器 高坏	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	淡褐色	淡黄色	ミガキ	ヨコナデ ミガキ	29.8				
102	45	S K 38	弥生土器	石英	微粒	淡黄褐色	明黄色	ヘラナデ ナデ	ハケ目 ナデ					
103	46	S K 38	弥生土器 甕	長石 角閃石	細粒	黄茶色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	34.6				
104	46	S K 38	弥生土器	石英、角閃石 ウンモ	細粒	暗黄褐色	暗茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目一部ナ デ消し ヨコナデ					内径12.0cm
105	46	S K 38	弥生土器	石英、長石 角閃石	細粒	茶褐色	茶褐色	ヘラナデ	ハケ目後ナデ ナデ				10.1	
106	46	S K 38	弥生土器 甕	長石、角閃石 黒ウンモ	小粒	淡黒褐色	赤茶色	ナデ	ナデ					
107	46	S K 38	弥生土器	長石、角閃石 黒ウンモ	細粒	暗黄茶色	明黄色	ヘラ工具ナデ	タテナデ					底部 ナデ
108	46	S K 38	砥石				淡黄白色							全長 14.1 砂岩 幅 4.2 重量190g
109	48	S K 42	土師器 坏	石英 赤色酸化土粒	細粒	明黄色	淡黄灰色	不定方向ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	12.8	3.4		8.5	底部 ヘラ切り難シ後ナデ
110	48	S K 42	土師器 坏	長石 赤色酸化土粒	微粒	明黄色	明黄色	不定方向ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	13.0	3.8		8.3	底部 ヘラ切り難シ痕

第8表 遺物観察表(6)

遺物 番号	出土 区画	出土 位置	器 種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴径	底径	
111	48	S K 42	土師器 坏	石英 赤色酸化土粒	細粒	明黄色	淡黄灰色	不定方向ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	12.8	3.1		8.2	底部 ヘラ切り磨シ後ナデ
112	48	S K 42	土師器 坏	長石 赤色酸化土粒	微粒	明黄色	明黄色	不定方向ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	13.3	3.7		8.7	底部 ヘラ切り磨シ後ナデ
113	74	S K 44	土師器		微粒	明黄色	明黄色	ナデ	ナデ	15.2				
114	50	S K 47	須恵器 釜		微粒	緑灰色	青灰色	不定方向ナデ 回転ヨコナデ	回転ヘラケズリ 回転ヨコナデ	14.6				
115	50	S K 47	土師器	長石	微粒	淡灰褐色	淡赤黄色	手持チ一定方 向ナデ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	13.4	3.9		10.0	底部 回転糸切り後手持チナデ 磨シ
116	52	S K 48	弥生土器 壺	石英 角閃石	細粒	赤茶色	赤茶色	ヨコナデ	ヘラ工具によるナ デ・ヘラ状工具に よる洗滌 ヨコナデ					
117	52	S K 48	弥生土器 壺	長石 角閃石	微粒	淡黄白色	淡黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ					
118	54	S K 49	弥生土器 壺	黒ウンモ	微粒	明黄茶色	明黄茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	30.0				
119	54	S K 49	弥生土器 甕	黒ウンモ 赤色酸化土粒	細粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					
120	54	S K 49	弥生土器 壺	長石 黒ウンモ	微粒	明黄色	明赤黄色	ヨコナデ	ヘラ工具ナデ ヨコナデ	26.8				
121	54	S K 49	弥生土器 壺	石英 黒ウンモ	小粒	明黄茶色	淡黄褐色	3条のボタン 状浮文 ヨコナデ	ヘラ工具による 「ハ」字状のミガキ 指圧痕ありナデ ヨコナデ ナデ	44.0				
122	54	S K 49	弥生土器 甕	長石 黒ウンモ	微粒	淡黄褐色	淡黒褐色	ヨコナデ	ハケ目タテ方 向 ヨコナデ	21.8				
123	54	S K 49	弥生土器 甕	長石 黒ウンモ	細粒	淡黄茶色	淡黄茶色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ					
124	54	S K 49	弥生土器 甕?	長石 黒ウンモ	微粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ					
125	54	S K 49	弥生土器	長石	微粒	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ					
126	54	S K 49	弥生土器	石英、角閃石 赤色酸化土粒	細粒	明黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	18.6				
127	54	S K 49	弥生土器 甕	長石 角閃石	小粒	明茶色	淡黒褐色	ヘラ工具によ るタテナデ ヨコナデ	タテ方向ヘラ工 具によるナデ ヨコナデ	21.0				
128	54	S K 49	弥生土器 甕	石英、長石 黒ウンモ	小粒	淡黄色	明黄赤色	指圧痕 ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					
129	54	S K 49	弥生土器 甕	石英 黒ウンモ	細粒	淡黄色	淡黄色	ナデ	ヨコナデ					
130	54	S K 49	弥生土器 壺	長石 黒ウンモ	細粒	明黄色	明赤黄色	ヨコナデ	ナデ					
131	54	S K 49	弥生土器 壺	長石 黒ウンモ	細粒	明赤黄色	明赤黄色	ヨコナデ ナデ	ナデ					
132	55	S K 49	弥生土器 甕	長石、石英 黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	淡黄赤色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ				9.6	
133	55	S K 49	弥生土器 高坏	長石、角閃石 黒ウンモ	小粒	明赤黄色	明赤黄色	指圧痕 ナデ ヨコナデ	ヨコナデ					

第9表 遺物観察表(7)

遺物 番号	種別 番号	出土区 出土 遺構	器 種	胎土		色調		器面調整		法量 (cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	胴径	底径	
134	55	S K 49	弥生土器 長頸壺?	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	淡茶褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	6.8				
135	55	S K 49	弥生土器	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	淡赤茶色	明赤黄色	指圧痕 ヨコナデ	ヨコナデ				11.4	
136	55	S K 49	弥生土器 精製浅鉢	長石 角閃石	微粒	明黄灰色	淡赤茶色	ミガキ	ミガキ	13.8				底部 ミガキ
137	55	S K 49	弥生土器	石英、長石 黒ウンモ	小粒	淡黄色	淡黄白色	ナデ (ヘラ工具痕アリ)	タテナデ				5.0	底部 ナデ (ヘラ工具痕アリ)
138	55	S K 49	弥生土器	長石 角閃石	微粒	淡黄茶色	淡茶褐色	ヘラ工具ナデ	ヘラ工具ナデ					底部 ナデ
139	55	S K 49	弥生土器	長石 黒ウンモ	細粒	淡黒褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ				6.6	
140	55	S K 49	弥生土器 壺	石英、長石 黒ウンモ	微粒	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ				6.1	底部 ナデ
141	55	S K 49	弥生土器	長石 黒ウンモ	小粒	淡茶褐色	淡赤褐色	ナデ	ヨコナデ				5.6	底部 ナデ
142	55	S K 49	弥生土器	石英、長石 角閃石	細粒	淡黄白色	淡黄白色	ナデ	ヨコナデ				6.3	底部 ナデ
143	57	S K 50	弥生土器 壺	長石、角閃石 黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	赤茶色	ナデ ヨコナデ	タテ方向ハケ 目 ヨコナデ	30.2				
144	57	S K 50	弥生土器 壺	長石 黒ウンモ	微粒	淡黄色	淡赤茶色	ナデ	ナデ					
145	59	S K 51	弥生土器 壺	角閃石	粗粒	黄褐色	淡茶黑色	ヨコナデ	ヨコナデ	30.6				
146	59	S K 51	弥生土器 壺		砂粒	黄白色	黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	13.0				
147	59	S K 51	弥生土器 壺	長石 黒ウンモ	細粒	明黄色	明黄白色	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	23.2				
148	59	S K 51	弥生土器 高坏	長石、角閃石 黒ウンモ	細粒	明黄色	明黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	32.0				
149	61	S K 52	弥生土器 小壺	長石、角閃石 黒ウンモ 赤色酸化土粒	細粒	淡黄色	明黄色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ナデ ヨコナデ	6.9	16.2	15.6	4.9	
150	61	S K 52	弥生土器 高坏	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	明黄色	明黄色	ヘラ工具タテナデ ヘラ工具ヨコナデ ナデ	ナデ				17.0	
151	61	S K 52	弥生土器	長石、角閃石 黒ウンモ	細粒	明黄色	明黄色 (暗赤色)	ナデ ヘラナデ	ミガキ					外面朱を塗布する
152	61	S K 52	弥生土器 精製浅鉢	長石 角閃石	微粒	淡黄褐色	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	30.0				
153	61	S K 52	弥生土器	石英、長石 黒ウンモ	小粒	淡黄色	明赤黄色	ナデ	タテナデ					底部 ナデ
154	61	S K 52	弥生土器 壺	長石、角閃石 黒ウンモ	細粒	淡黄茶色	淡黄茶色	ナデ ヨコナデ	タテ方向ハケ 目 ヨコナデ	18.0				
155	61	S K 52	弥生土器 壺	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	明黄色	淡黄褐色	ナデ ヨコナデ	タテナデ ヨコナデ					

第10表 遺物観察表（8）

遺物 番号	採掘 番号	出土区 遺構	器 種	胎土		色調		器面調整		法量 (cm)				備考
				混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口徑	器高	胴部 最大径	底径	
156	61	S K52	弥生土器 甕	長石、角閃石 黒ウンモ	細粒	淡黄褐色	明赤黄色	ナデ	ヨコナデ ナデ				10.4	
157	61	S K52	弥生土器 甕	長石 黒ウンモ	微粒	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ				5.0	
158	61	S K52	弥生土器 甕	長石、角閃石 黒ウンモ	小粒	淡黒褐色	明赤黄色	ナデ	ヨコナデ				6.2	
159	63	S K53	弥生土器 甕		粗粒	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ヨコハケ目 タテ方向ハケ目 ヨコナデ	41.6				
160	63	S K53	弥生土器 甕	石英	微粒	淡茶褐色	淡茶色	ヨコナデ	貝ガラ素肌					
161	65	S K54	弥生土器 壺	石英	小粒	明黄色	淡黄白色	タテ方向ナデ	タテ方向ハケ				4.9	
162	65	S K54	弥生土器 高坏	長石 角閃石	小粒	赤茶色	赤茶色	ナデ ヨコナデ	タテナデ ヨコナデ				10.4	
163	67	S K57	弥生土器 甕	長石 角閃石	細粒	淡黄茶色	淡褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ					
164	67	S K57	弥生土器 甕	長石、角閃石 黒ウンモ	微粒	茶褐色	茶褐色	ナデ ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	13.6				
165	67	S K57	弥生土器	長石 角閃石	小粒	赤茶色	赤茶色	ナデ	ナデ					
166	74	S K58	弥生土器 甕	長石、角閃石 赤色酸化土粒	小粒	淡茶褐色	淡茶褐色	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	26.6	31.5		6.0	底部 ヘラ工具ナデ
167	74	S K58	弥生土器	長石、石英 黒ウンモ	小粒	明赤茶色	明赤茶色	ナデ	ナデ					
168	74	S K60	弥生土器 壺		砂粒	淡黒色	赤褐色	ナデ	ナデ	12.2				
169	69	S K61	弥生土器 甕	長石、角閃石 黒ウンモ	細粒	明黄色	淡黄茶色	ナデ	ハケ目 ナデ	30.2				
170	78	円形周溝遺構	陶器		微粒	淡黄緑色	淡黄緑色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	5.8				
171	81	方形周溝遺構	須恵器 釜		微砂粒	灰黒色	灰黒色	回転ヨコナデ	ナデ ヘラ削 り後ヘラナデ 回転ヨコナデ	16.7	3.5			
172	81	方形周溝遺構	土師器 釜		微砂粒	黄褐色	黄褐色	回転ヨコナデ	ナデ 回転ヨコナデ	19.4	2.9			
173	81	方形周溝遺構	須恵器 釜		微砂粒	灰色	青灰色	回転ヨコナデ	ヘラ切り摩シ後 回転ヨコナデ 回転ヨコナデ	15.8	3.1			
174	81	方形周溝遺構	土師器 皿?		砂粒	黄白色	黄白色	一定方向ナデ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	16.0	2.6			
175	81	方形周溝遺構	須恵器 釜	微砂粒	灰白色	灰白色		不定方向ナデ ヨコナデ	ナデ ヘラナデ ヨコナデ	15.2	3.0			
176	81	方形周溝遺構	土師器 碗		砂粒	黄褐色	黄褐色	手持ち回転ナ デ 回転ヨコナデ	ヘラ工具不定 方向ナデ 回転ヨコナデ	15.2	5.1			
177	81	方形周溝遺構	須恵器 釜		微砂粒	青灰色	青灰色	回転ヨコナデ 後不定方向ナ デ	回転ヨコナデ					

第11表 遺物観察表（9）

遺物 番号	挿図 番号	出土区 遺構	器 種	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)				備 考
				混和材	粒子	内 面	外 面	内 面	外 面	口径	器高	胴径	底径	
178	81	方形周溝遺構	須恵器蓋		微粒	青灰色	青灰色	ナデ 回転ヨコナデ	回転ナデ ヘラ 切り磨シ後ヘラナ デ 回転ヨコナデ	14.8	1.9			
179	81	方形周溝遺構	土師器 坏	石英 金ウンモ	微粒	黄褐色	黄褐色	ナデ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	14.3	4.2			底部 ナデ
180	81	方形周溝遺構	須恵器蓋		微 砂 粒	青灰色	青灰色	ヘラ工具による 不定方向ナデ ナデ	ヘラ削り ナデ	13.3	3.3			
181	81	方形周溝遺構	土師器 碗		砂粒	黄褐色	黄褐色	ナデ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	13.3	3.3		9.7	底部 ヘラ切り磨シ
182	81	方形周溝遺構	須恵器 坏身		微粒	青灰色	青灰色	手持チナデ ヨコナデ	ヨコナデ	12.2	4.6		9.3	底部 ヘラ切り磨シ
183	81	方形周溝遺構	土師器 身		微 砂 粒	黄褐色	黄褐色	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	9.8	2.9			底部 回転ヘラ切り磨シ ナデ
184	82	P i t 107	弥生土器 甕	長石、角閃石 金ウンモ	細粒	黄褐色	暗黄褐色	ナデ 指圧痕 ヨコナデ	ハケ目一部ナ デ消シ ヨコナデ	31.6				
185	82	P i t 107	弥生土器 甕	長石、角閃石 金ウンモ	細粒	暗黄褐色	赤褐色		ハケ目 ヨコナデ 指圧痕				6.8	
186	83	A地区	石器				淡黄白色							砂岩 重量100g
187	84	C地区	石楯											黒曜石
188	84	G地区	石楯											黒曜石 重量2g

第12表 石器観察表

遺物 番号	挿図 番号	出土 遺構	種 類	法 量			備 考
				長さ	幅	厚さ	
S01	75	S K03 S H03	石皿	—	26.0	11.8	全体に磨痕 角に敲打痕あり
S02	75	S K15	砥石?	18.5	5.5	7.0	磨痕が表面に残る
S03	75	S K23	打製石楯	19.0	12.0	2.0	撥形を成す
S04	75	S K49	砥石	15.3	8.8	5.5	磨痕あり 一部に敲打痕
S05	76	S K51	磨石	15.0	8.0	4.3	磨痕が著しい
S06	76	S K49	石皿	25.8	27.0	7.2	
S07	76	S H01	磨石	11.5	8.0	423	全面使用
S08	76	S H01	磨石	11.0	10.0	2.5	磨痕が全面に残る 砥石?
S09	76	S H03	石皿	—	—	5.7	裏表に磨痕 一部に被熱を受ける
S10	76	S H09	門石	10.3	9.6	6.0	敲打痕が裏表にあり
S11	76	S H09	門石	11.0	9.0	4.1	裏表の中心に敲打痕 側面は磨痕
S12	76	S H09	磨石	16.9	13.0	5.5	一面に敲打痕あり
S13	76	S H09	磨石	12.8	11.0	2.3	

第Ⅳ章 まとめと考察

第1節 まとめ

今回の調査によって、城南遺跡では弥生時代中期から中世にまで及ぶ集落と墓域の痕跡を確認することができた。この内、古墳時代はこの場所で生活をおこなった痕跡は見当たらなかった。さらに、各時代の遺構は連綿として永続的に継続されたものではなく、それぞれの時期に短期的に使用されたものと思われる。弥生時代以外の遺構については祭祠的なものや墓であり、生活の場としては使用されていない。今回の調査で確認できた遺構・遺物を大まかに時期区分するとⅠ～Ⅴ期に分類することができ、これについてそれぞれ検討を加えたい。

Ⅰ期 弥生時代中期	S H02・S H03・S H09 S K03・S K13・S K23・S K38・S K48・S K49・S K50 S K51・S K52・S K53・S K54・S K57・S K61
Ⅱ期 弥生時代後期	S H01
Ⅲ期 飛鳥時代～奈良時代	S D01・方形周溝遺構
Ⅳ期 平安時代前期	S K42
Ⅴ期 鎌倉時代	S K47

Ⅰ期 弥生時代中期

須玖Ⅰ式と併行とする「く」の字口縁と鋤先口縁壺の特徴を持つ土器が見られる。したがって、土器の年代を中期の後半から末に考えたい。この時期に比定できる遺構は調査区西側に集中している。この内、住居跡についてはS H02・S H03・S H09がこれにあたる。平面形はいずれも円形であり、規模は直径5～6 mである。中心にはいずれも楕円形の土壌を持っており、灰溜めのものと思われる。それと長方形の竪穴遺構であるS H10があるが、これは弥生時代中期後葉のS K54に切られており、時期はこれよりもさかのぼるが、周囲の状況からすれば、中期の所産と推測される。しかし、住居跡とするには円形の住居跡に比べてかなり小型であるため、一般に生活するための住居ではないと思われる。

土器以外の遺物には農具に石包丁と石鎌、狩猟具に磨製石鏃、調理具では、石皿・磨石・敲石・凹石等である。磨製石鏃はいずれも無茎三角式であり、基部のへこみは顕著に見られない。

Ⅱ期 弥生時代後期

この時期に該当する遺構は中期に比べ減少する。住居跡ではS H01のみであり、円形のプランである。甕の口縁の外反度とやや平底が残る形態からして後期後葉の時期が考えられよう。

Ⅲ期 飛鳥時代～奈良時代

この時期に相当する遺構はS D 01と方形周溝遺構がこれに当たる。そのため、生活遺構は一切見当たらない。S D 01は埋土の状況やその場所に溝としての役割が必要としない地形に位置していることから、これを道路状遺構として取り扱うのが望ましいと考えられる。遺物は少なく須恵器の長頸甕の口頸部が見られるに過ぎない。頸部の厚さと延びの状態から8世紀前半代（陶邑Ⅳ型式1段階を前後する時期）に想定される。

方形周溝遺構では、須恵器の蓋と椀、土師器の蓋と坏が出土している。これらの遺物からやはり8世紀前半代（陶邑Ⅳ型式1段階を前後する時期）に押さえられる。こうしたことからS D 01と方形周溝遺構は共存していたことが考えられる。したがって、双方の関係から道路状遺構が方形周溝遺構に通じる施設の可能性があるのもと言えよう。

Ⅳ期 平安時代前期

この時期に相当する遺構はS K 42であるが、これ以外に遺構は見当たらない。このS K 42の遺構は、木棺を主体部とした埋葬施設の可能性が非常に高い。その理由を遺物の出土状況から説明したい。ひとつが、土壌の西側から出土した2枚の土師器の坏（110・112）であり、2枚の坏が重ねられ、垂直に立った状態で検出したものである。この土器は破損を免れており、土壌の最下部の堆積層と土質が異なっていることから、この2枚の坏が埋葬時から現位置を動いていないことが言える。こうした遺物の出土状況を考えるならば、この2枚の坏をある物に立て掛けたと考えるのが妥当であろう。それが発掘時にその痕跡が見当たらないことから、これを木製の板とする以外に考えることはできない。一方、東側に伏せられた2枚の坏（109・111）は土壌の最下層と同一層にある。したがって東側の2枚の坏は木製の板の内側にあったことが明白であり、なおかつ堆積の状態は自然に堆積していることから、ある時期まで木製の板の内側に空間があったとすることができよう。したがって、この土壌の中に木棺を埋設したものとすることができ、木棺の長さは堆積土の状態と遺物の位置から長さ1.6～1.7mであったものと想定することができる。

なお、年代について土師器を見ると、大きく2タイプの坏（109・111と110・112）が見られる。双方共に、内外面は回転ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り離しを行いその後ナデを施すものとそのままのまがある。よって、体部にはヘラミガキが見られず、底部の処理に回転ヘラケズリはおこなわれていない。

これらの坏と豊後国分寺跡のS K 04出土の一括遺物とを比較してみると、外反度は国分寺の坏の方が大きく、さらにヘラミガキが見られる。こうした器形や調整の特徴から城南出土の坏の方が新しい様相が見られる。この豊後国分寺のS K 04からは墨書で「尼 尼寺 天長9年」と書かれた坏が出土していることから、天長9年（832年）よりも下ることになる。

また、その下限については、宇佐宮弥勒寺のS K 2に器形・調整が類似するものの、S K 42より明らかに後出のものと考えられる。その他に安岐町の久末京徳遺跡¹²⁾におけるS K 8・S K 9・S K 10出土土器に比べS K 42よりは後出するものである。なお、宇佐宮弥勒寺のS K 5出土土器¹³⁾の器形・調整からはかけ離れており、10世紀に入らないものである。

以上のようなことからして、その下限は9世紀後半から末を中心とする時期に置かれよう。

V期 鎌倉時代

この時期の遺構としてはS K 47のみが該当する。平面が隅丸方形を呈する土壙墓であり、方形周溝遺構の溝の部分に造られている。このため、周溝遺構の遺物である須恵器が埋土に混在していたが、純粋にこの遺構に伴う遺物は糸切り底の坏が1点のみであった。出土状態を見ると意図的に坏を裏返した状態で埋納したものと考えられる。

第2節 竪穴住居跡について

今回の調査によって検出された弥生時代の竪穴住居跡は円形が4軒、方形が3軒であり、それ以外に不明の遺構も見られる。その大半の遺構は弥生時代中期中葉から後葉に属し、S H 01のみ弥生時代後期後葉に属している。

平面形態は円形がやや多いが、方形のものは概して小型であり、住居として使用されたものかは定かではない。方形の柱穴はいずれも2本を基本としているようである。一方、円形の住居跡は直径5～6mでありほぼ規模は同一である。柱穴はS H 03とS H 09が4本、S H 02が4本に2本の補助柱が付属する。そしてS H 01は6本の柱が円形に巡る配列を成す。こうしたことから、次第に柱の穴の数が時期と共に増加する傾向にあるようだ。土壙は、隅丸長方形、楕円形を呈し、内部に焼土と炭化物が流れ込んでいる。弥生時代後期のS H 01のみが中心から少し南にずれた位置に土壙が付設し、それ以外の弥生時代中期に属するものは中心に掘られている。その他の付属施設として、竪穴の壁に壁溝が有るものは、S H 01のみである。

以上からすれば、住居の形は基本的には中期から後期まで円形であることがいえる。そして方形は小型のみが作られ、住居としては小規模であることから、その付属施設ともいえよう。住居跡の規模は時期を通じて増減は顕著に認められないが、柱穴配列とその数や土壙の位置が中期と後期では異なる様相を見せる。

第3節 S D 08に見られる土坑列について

S D 08 bの円形の浅い掘り込みは、直径20～25cm、深さ10～15cmの大きさを有し、それが60cmおきに15ヶ所の穴を確認したものであった。遺構の性格としては掘り込みが浅いことや斜面に見られることから柱穴や柵列の可能性は低い。

宮崎県における類例をまとめると次ぎのようになる。それらの特徴には、溝状遺構が直線的に伸びるものや曲線的に伸びるものが見られる。浅い掘り込みには、円形・方形・楕円形など様ではない。また、S D 08のように両側に溝状遺構を伴うものとなないものがある。そして遺構については、道路状遺構もしくは道の基礎を行うために掘られた穴、さらに重い荷物を運搬するために設置された木馬道等の性格が考えられている。

こうした類例を基にS D08の遺構の性格付けをおこなえば、道に関連した施設と考えるのが妥当であると思われる。そしてS D08の位置する場所が東下がり¹⁵¹の傾斜した場所にあり、谷間から上がっていく所としては最良のコースを選んでいることから示唆して、斜面を登りやすくするために設けられた施設の跡と見ることができよう。

第4節 方形・円形周溝遺構について

まず、遺構の名称をここでは方形周溝遺構と円形周溝遺構としている理由から説明したい。方形周溝遺構は、弥生時代から古墳時代初めにかけて盛んに造られた方形周溝墓と形態が類似している。しかし、城南遺跡での遺構は、明らかに埋葬施設が確認されなかったこと、方形周溝墓のように集団墓の性格を持ち合わせていないこと、墳墓の形状(特に溝の掘り方の形状)や周溝の規模が異なっていることから、方形周溝墓と同質のものではなく、さらに方形周溝墓が消滅した時期に相当することから、この墓制の延長上のもの¹⁵¹とは言いがたい。よって、方形周溝墓と対比する語として方形周溝遺構と呼称した。また、円形周溝遺構もここでは同じような考えで使いたい。

ここで城南遺跡の方形周溝遺構および円形周溝遺構について改めて整理しておく。

・方形周溝遺構

出土遺物…周囲の溝の中より須恵器の蓋・椀、土師器の蓋・坏が十数点出土しており、須恵器と土師器の割合は須恵器の方が若干多い。他には弥生土器が流れ込んでいる以外、遺物は見られない。出土状況は東側に破碎されたものが多く見られた外、完形品のものも数点見られた。

構築年代…土器の時期は形態の特徴より8世紀前半代に収まるとされる。その出土地点は殆ど¹⁵¹のものが溝の床面からやや浮いた位置にあるが、堆積状況から構築してから土器が混入するまでには大きな時間の隔たりは見られない。

平面形態・規模…平面形は一辺12mの方形を成し、正方形を意識した、企画性のある形状である。

立面形態・溝…遺構の西側には弥生時代の住居跡(S H02)が見られるが、壁面は殆ど残って¹⁵¹おらず後世の削平が著しかったことを物語っている。したがって、この方形周溝遺構においても、上面はかなり削られていることが窺われる。溝の堆積層を観察すると、内側からの流れ込み堆積土層が見られることから、構築当初には、溝の内側に盛土があったものと考えられ、溝の掘削土を内側に盛ったものと思われる。しかしながら盛土は、古墳のように高い墳丘を有しているのであれば残っている可能性が高かったであろうし、溝の壁面が平均50°を越え、最大傾斜が70°を有することから高く盛ることは不可能であろう。そうしたことから盛土の高さは高塚墳に見られるように高くなく、構築には、平面企画に主眼が置かれていたものと考えられる。

付属施設…遺構の東南側の溝に床面よりやや高くした幅40cmの陸橋部を造りだしている。溝の深さは最も深い所で70cmあり、削平前であれば1mを越えるであろう。また、内側の盛土を考えれば、比高差はさらに広がり、内側に入るための施設が必要であったと言える。

また、遺構の中央には不整形の浅い土塋が見られるが、方形周溝遺構に伴うものか調査では判断

できなかった。その他に柱穴などの建物跡の痕跡は見あたらない。

なお、方形周溝遺構の南側には須恵器を伴う溝状遺構が東西方向に走っており、これが方形周溝遺構に関連した施設ではないかと思われる。須恵器を伴う遺構が方形周溝遺構以外に見られないことや地形からすれば溝の役割は考えられず、切り通しの道路になるものと想定される。

・円形周溝遺構

出土遺物…遺構に伴う遺物が出土しておらず時期も不明。

平面形態・規模…平面形は直径7 mの円形を成し、整った形である。

立面形態・溝…遺構全体は削平されているが、溝の幅が狭いことから、復元しても溝の規模は大きいものではない。また、溝の内側には墳丘が見られないが、仮に土を盛ったとしても高くなかったであろう。

付属施設…遺構の中心に不整形の浅い土壌がみられるが、調査では円形周溝遺構に伴うものか判断できなかった。また、柱穴等が見られるものの、規則性のあるものや建物跡にはならない。

上記のことから共通する要素として次のようなことがいえる。

- ・立面形では高い盛土をおこなわず、それとは対象に平面形は精緻な企画により区画を呈している。
- ・溝の内側には建物が建てられた可能性はない。ただ、中心に土壌があることから埋葬施設等の可能性がある。

それでは、他地域に同じような事例を探すと、県内や九州において類例はあまり見られないが、関東周辺ではこれまで多くの類例が発見されている。

この地域の概要をまとめると以下の通りである。

1、分布

佐倉・印旛沼南岸の鹿島川・新川流域と千葉県東南部村田川流域に100例以上が分布している。

さらに、福島県を除く東北各県にも見られる。

2、時期

古墳時代後半（6世紀中葉頃）から歴史時代（9世紀前半頃）

3、平面形態・規模

- ・方形 平面形は97%が正方形を成す。

規模は大型で一辺13～15 m、小型で一辺3 mを成し、平均では一辺5～7 mである。

- ・円形 小型のものは直径4.5 mである。

4、立面形態・溝

- ・盛土 立体面を強調しているというより周溝の平面を強調することに主眼を置いている。
- ・溝 壁面は鋭角に掘り込まれており、堆積土は自然堆積状況を成しているのがほとんどである。

5、埋葬施設

- ・直葬土壌…火葬・木棺直葬

- ・横穴式石室類似…板材で玄室を構築（石材の使用はない）
- ・地下式墳類似…方形の竪坑を掘り込み、隅丸方形の玄室を造る。また、周溝から長く張り出した前庭部の中に竪坑を掘り込む。
- ・有天井土墳…中心位置に木棺直葬土墳を持ち、また、周溝内に天井土墳を設ける。

6、歴史的意義

古墳時代後期から歴史時代における、明確な形状での埋葬主体およびマウンドを遺存しない方形ないし円形状の溝からなる墳墓の遺構である。後期群集墳の群構成を踏襲しながらそれに継続して築かれ続けたものであろう。⁶

このように、方形周溝遺構や円形周溝遺構が地域を異にしながらも類似した事例があることを考えれば、さらに広い範囲で確認されるものと思われる。こうした遠隔の地に方形や円形に溝が巡る遺構が見られることから、畿内においても類似した遺構を見いだすことができるに違いない。仮に類似例がなければ、畿内で祖形となりうる方墳や方形周溝墓等が周辺部に伝播し展開されたとも考えられよう。

以上のことからこの遺構の性格を考えてみたい。

（１）平面の企画を意識し墳丘を高く持たない造墓形態であること。この場合、埋葬施設は削平されてしまったものと考えられよう。

ただし、奈良時代の墳墓になることから歴史的・地理的背景を考慮すれば、この地域の墓制に対する概念を変えなければならないであろう。

（２）祭壇を意識した祭祀的遺構が考えられよう。円形周溝遺構のすぐ東側にはS B01・02の２棟の総柱の掘立柱建物が並んでおり、祭祀において使用された可能性がある。

この場合、出土遺物の中に高坏・長頸壺など祭祀の色合いのものは見られない。また、方形周溝遺構では溝の造りが大きく綿密な企画の基に行われていることから、ただ単に祭祀遺構として取り扱っていいものか疑問である。

（３）中世・近世の時期に平面が方形もしくは円形状の塚が各地で見られており、これらは民間信仰の要因に基づいて構築されたものと考えられている。よって、こうした事例も考慮する必要もあるだろう。⁷

上記に３例の遺構の性格を挙げたが、現段階ではそれが古墳時代の墳墓の系譜を引くものか、神道や仏教による祭祀的な遺構を引くものか、またはそれ以外のものかは判断できないが、今後、比較検討すればその源流が見えてくるであろう。

最後に私的な考えではあるが、今回発見の奈良時代の方形周溝遺構を墳墓とすれば、それ以前に造営された古宮古墳との関係も指摘できよう。遺構の大きさは、古宮古墳が一辺12m四方の方墳を成し傾斜地に造墓しており、方形周溝遺構も一辺12m四方の区画を有する点からすれば非常に規模が近似している。また、立地場所は双方共に台地上の南斜面にあり、川を見下ろす位置にある。さらに、この時期の墳墓形態からすれば、畿内における終末期の方墳とのつながりも考えなければならない。とすれば、被葬者を「日本書紀」天武天皇の条に登場し、壬申の乱で活躍した「大分君恵

尺・稚臣」を指摘することができよう。恵尺は天武4年(675年)に死去し「外小紫位」の位を頂いている。一方、稚臣の方は天武8年(679年)に死去し「外小錦上位」を頂いている。恵尺については古宮古墳の被葬者として指摘されているところであり、その位からすれば、薄葬令の規定において墳丘を築くことのできる身分として矛盾するものではない。だとすれば、この時期に方形の墓を造れるとすれば中央と結び付いた人物を考える必要があり、方形周溝遺構の被葬者に稚臣をあてることも可能であろう。稚臣の位からすれば、墳丘を築くことができない身分となっているが、薄葬令の規定通りに構築されたものかは疑問であり、前述したように方形周溝遺構に墳丘を高く構築していないとすれば、規制されなかったであろう。ただ、没年代が7世紀後半であることから、須恵器の所産年代とやや隔たりがあるが、埋葬施設からの出土でないことを考慮すれば、可能性は高まるであろう。

他に被葬者としては考えられるのは、遺跡に近接して8世紀初期に相当する複弁十葉軒丸瓦が出土した永興寺に¹⁰関係した人物が挙げられよう。この場所は古代寺院として、この地方の有力在地首長の氏寺的なものが考えられており、また、この地方に君臨した大分国造の拠点¹¹⁾をこの付近に想定しているところでもある。こうした場所からすれば、そうした有力者の存在も考慮する必要もあるろう。

いずれにせよ、遺構の性格を解明し時期と地域によって差異が見られるものかを明解にすることが今後の課題になろう。

註

- 1) 玉永光洋・讃岐和夫『国指定史跡豊後国分寺跡 環境整備事業報告』大分市教育委員会 1992
- 2) 後藤一重・丸山啓子『久末京徳遺跡 安岐町文化財調査報告書第1集』安岐町教育委員会 1989
- 3) 『弥勒寺 宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告書』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989
- 4) 『水落遺跡』小林市教育委員会 1992

- 5) 鈴木敏弘「畿内地方における方形周溝墓の展開」『原始古代社会研究』2 校倉書房 1975

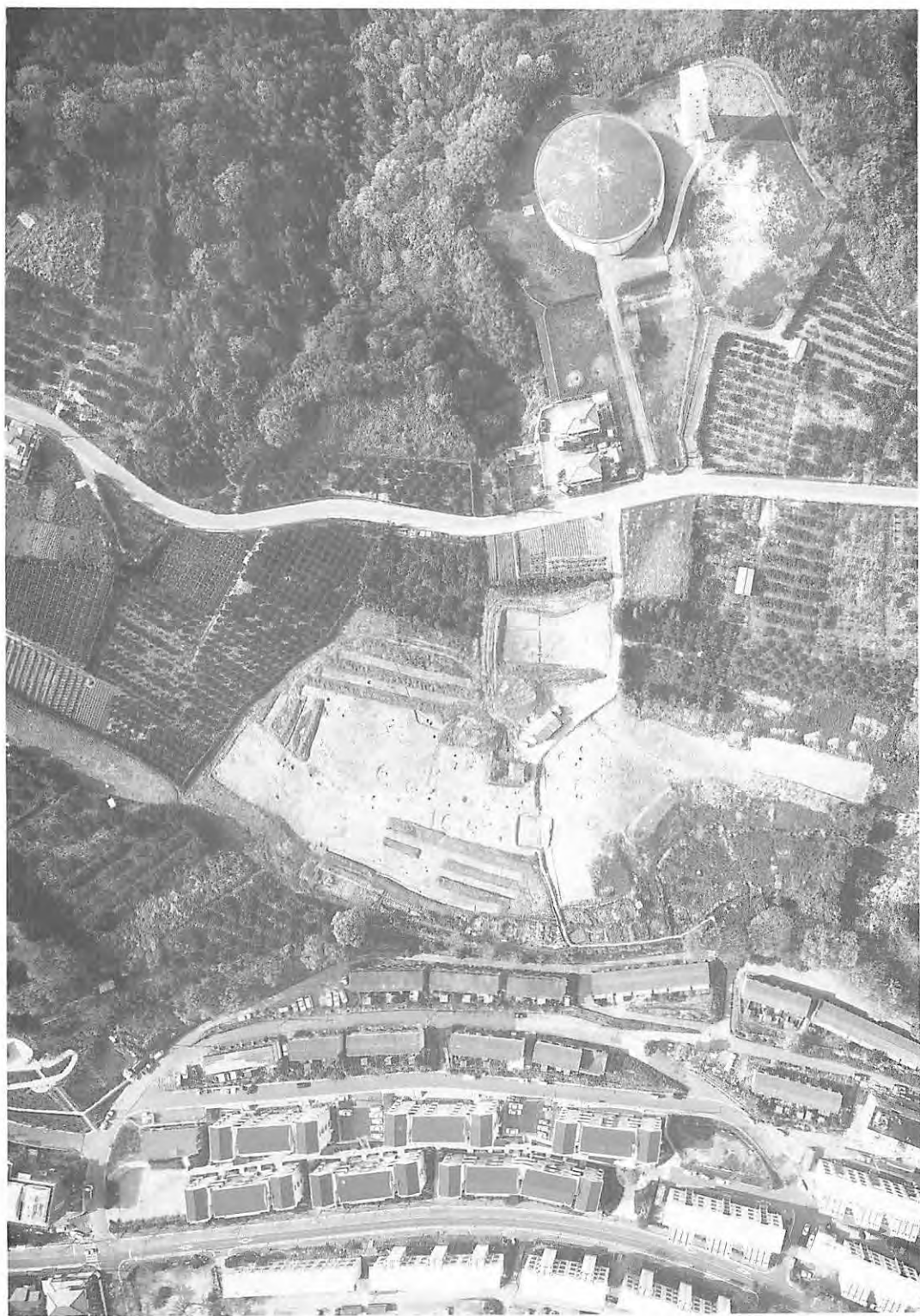
周溝墓の定義について「溝により区画される墓域を持ち、方形、円形に大別されるが不整形や部分的な区画しか認められないものも含む。埋葬施設は、原則として地山へ掘り込むが、盛土が発達すると地山に達せず、封土中に主体部がある」

- 6) 金丸 誠「房総半島に於ける方形・円形周溝について」『研究連絡誌』第1号 千葉県文化財センター 1982
- 7) 坂詰秀一『図録・歴史考古学入門事典』柏書房 1991
- 8) 『古宮古墳』大分市教育委員会 1982
- 9) 後藤宗俊「古宮古墳考」『大分県地方史』第117号 1985
- 10) 後藤宗俊「そびえる国分寺の塔」『大分市史』上巻 大分市 1987
- 11) 後藤宗俊「律令体制と二豊の古代寺院」『大分県史』古代編 1982
- 12) 後藤宗俊「大和国家の成立と二豊の在地首長」『大分県史』古代編 1982

参考文献

- 山岸良二 『考古学ライブラリー 8 方形周溝墓』 ニューサイエンス社 1981
- 山岸良二 「『方形周溝状遺構』研究序説(Ⅰ)」『研究紀要』第2号 東邦大学付属東邦中学校 1982
- 金丸 誠 「房総半島に於ける方形・円形周溝について」『研究連絡誌』第1号
千葉県文化財センター 1982
- 渡辺修一 「『群小区画墓』の終焉期」『研究連絡誌』第6号 千葉県文化財センター 1983
- 渡辺修一 「『群小区画墓』の終焉期(2)」『研究連絡誌』第14号 千葉県文化財センター 1985
- 山岸良二 「『方形周溝状遺構』研究序説(Ⅲ)」『研究紀要』第4号 東邦大学付属東邦中学校 1986
- 木對和紀 「房総における改葬系区画墓の出現期」『市原市文化財センター研究紀要Ⅰ』
市原市文化財センター 1987

圖 版



城南遺跡（上空より）

図版 2



①A区・B区・H区遠景（北東より）



②B区遠景（北西より）

① D区遠景
(西より)



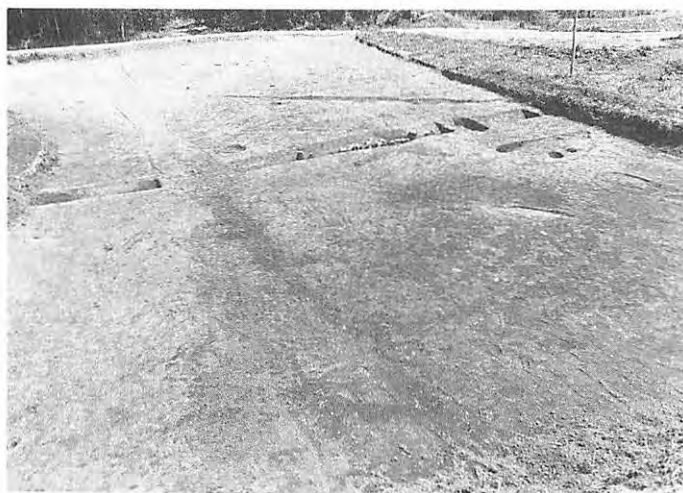
② D区遠景
(西より)



③ E区遠景
(西より)



図版 4



① G区全景
(西より)



② H区全景
(東より)



③ H区遠景
(東より)



① S D 01 全景（西より）



② S D 01 遠景（西より）



③ S D 01 土層堆積状況（西より）

図版 6



① S D 04 (G区・南より)



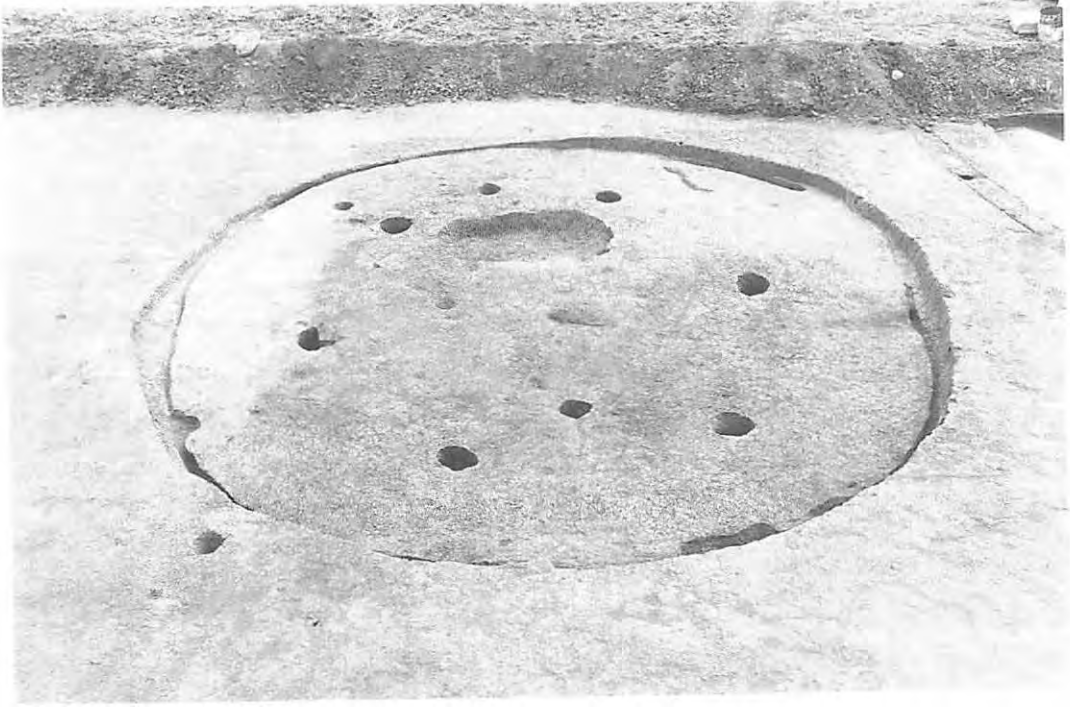
② S D 04・05 (D区・北より)



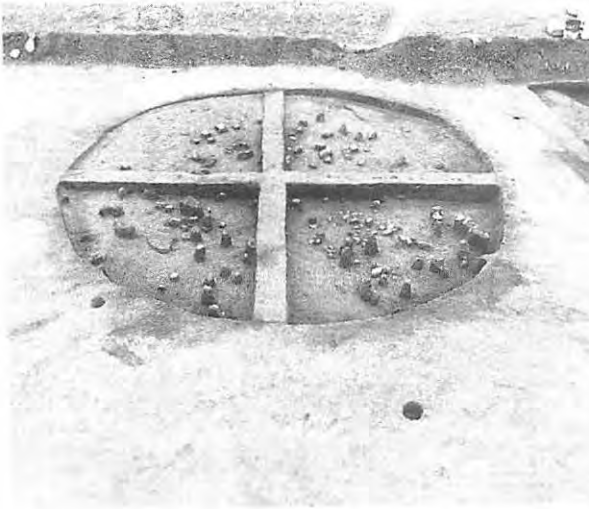
③ S D 08遠景 (西より)



④ S D 08近景 (西より)



① SH01 完掘状況（北より）

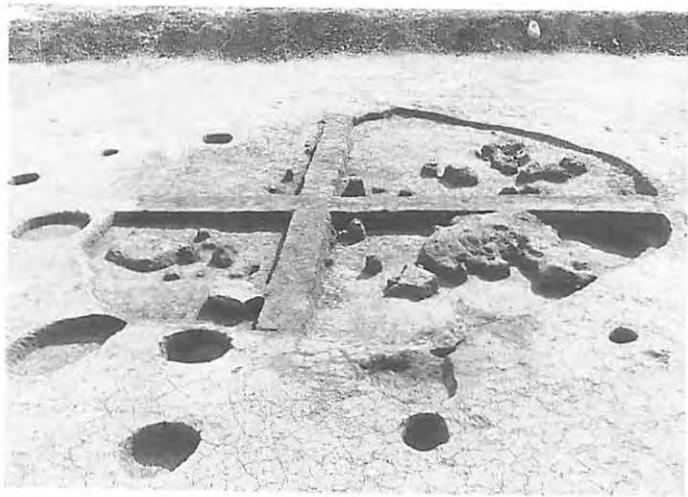


② SH01 遺物出土状況（北より）



③ SH01内土壌（東より）

図版 8



① S H02遺物出土状況
(北より)



② S H04・05・06完掘状況
(西より)



③ S H04・05・06遠景
(西より)

① S H 09

完掘状況（北より）



② S H 09

遺物出土状況（南より）



③ S H 09

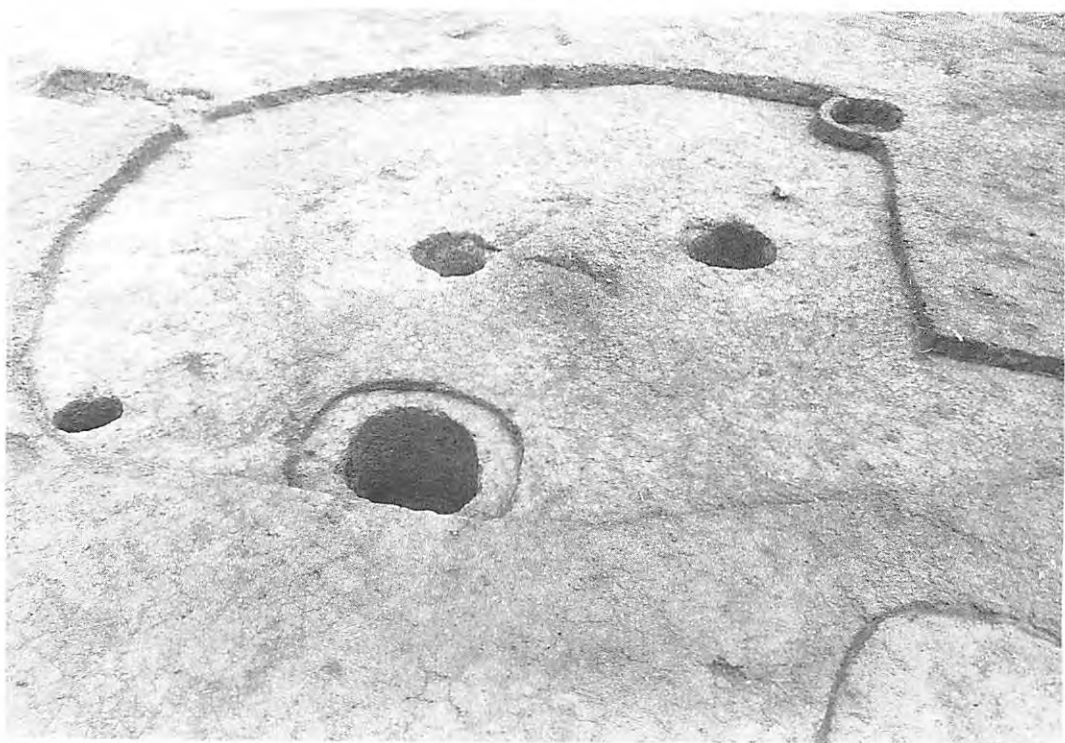
土層堆積状況（東より）



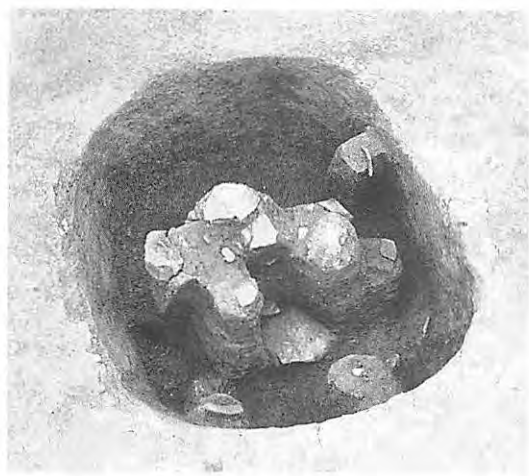
図版10



①SH07 完掘状況（東より）



②SH10 完掘状況（北西より）



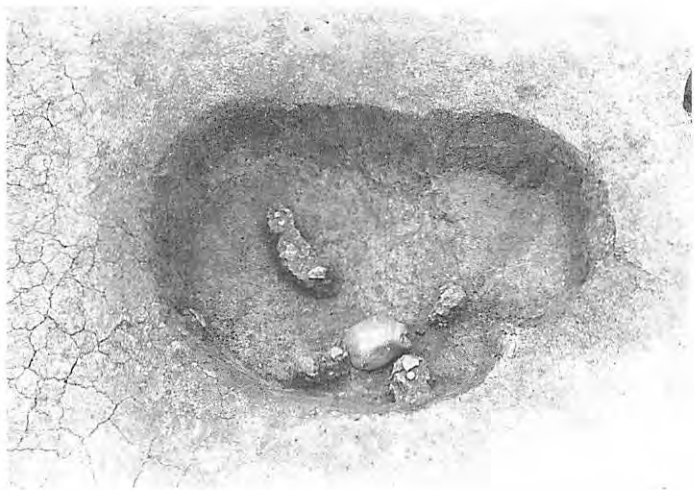
①SK13 遺物出土状況



②SK14 遺物出土状況

③SK15

遺物出土状況



④SK13・14・15・16

全景（南より）



図版12



① S K 28

完掘状況（西より）



② S K 47

遺物出土状況（西より）

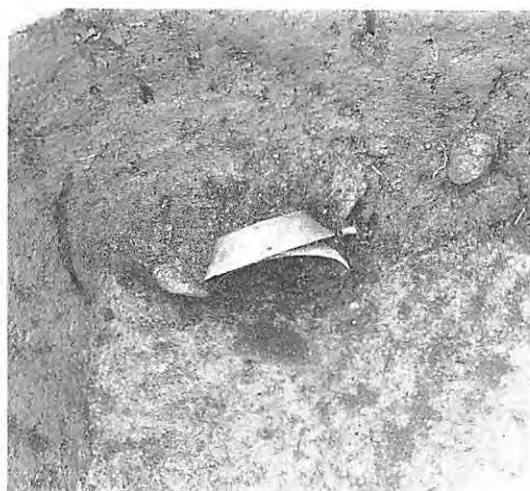


③ S K 62

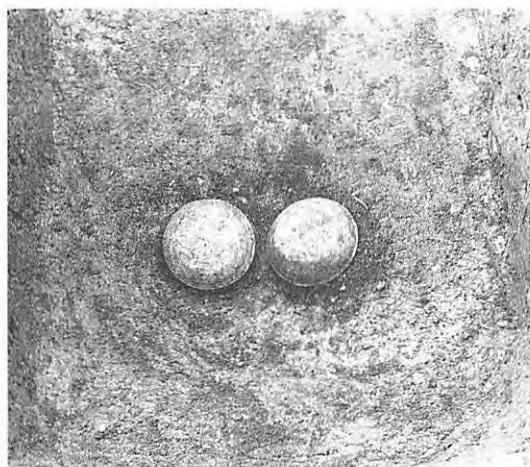
遺物出土状況



① SK 42 全景（東より）



② SK 42 遺物出土状況（西側）



③ SK 42 遺物出土状況（東側）

④ SK 42

土層堆積状況（南より）



図版14



①方形周溝遺構
遺構検出状況（北より）



②方形周溝遺構
全景（北より）



③方形周溝遺構
全景（西より）

①方形周溝遺構

土層堆積状況

西側（北より）



②方形周溝遺構

土層堆積状況

北側（東より）



③方形周溝遺構

土層堆積状況



図版16



①方形周溝遺構 遺物出土状況
南側（東より）



②方形周溝遺構 遺物出土状況
北側（東より）



③方形周溝
遺構
遺物出土状況
東側（東より）



⑤方形周溝遺構 遺物出土状況
東側（南より）

④方形周溝遺構遺物出土状況
南西側（東より）



6



3



15



61



62



65



64



66



67



城南遺跡出土遺物①

图版18



81



80



88



149



104



105



108

城南遺跡出土遺物②



109



110



111



112



115



115

城南遺跡出土遺物③



127



136



151



161



166



169



171



173



180



175



178



172



182

180



176



179



183



181



4



188



23



89



63



186



186

城南遺跡

大分県大分市大字永興所在遺跡の発掘調査報告書

1993年 3 月31日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町 2 - 31

印刷 株式会社 新郷印刷所
大分市羽田字川田1151